明治三十二年三月廿四日發兌

女鑑

第百七十六號

東京國光社

女鑑第百七拾六號

目録

井上通女



本業を先にすべし

業はあまたあり、造物者我をつくる。我生ず。造物者我に生活を與ふ、されど、ただには取らせず。我其の生活を求めて汲々する、之を生業とす。故に生を得けたる者は業なかるべからず。人間は人間、牛は牛、馬は馬、鹿は鹿、犬は犬、豚は豚、猫はねこ、三分の虫は三分のはたらきをし、五分の虫は五分、かげろふの夕に出で、朝に消ゆるものさへ、生を求めて汲々たるものの幾千萬ならむ。而して、馬はよく走り、牛は重きを負ひ、蟋蟀はよく鳴き、鳥はよく歌ひ、よくあさる。一のものに一二三のの業あるのみ、萬物の靈たる人、之を細分すれば、千萬之を數へつくすべうもあらず、政府國家を治むる之を公業と云ひ、百姓の田を耕し畑をつくるを農業と云ひ、蠶を養ふを蠶業と云ひ、物をつくるを工業と云ふ、工業にまた種々あり、大工業あり、

左官業あり、屋根屋あり、井戸屋あり、器具師あり、彫刻師あり、金物師あり、人形師あり、仕立職あり、鍛冶職あり、木挽業あり、建物業あり、細き職業中々によみつくされず。物をひさぎて生とするを商業と云ふ。商業には米屋あり、酒屋あり、鹽屋あり、砂糖屋あり、油渡世あれば、菓子業あり、綿屋あれば、糸屋あり、太物屋あれば、小間物屋あり。大小之もまたよみつくすこと難し。さやうに多き業務ながら、生業はたゞ一、大工にあれ、米屋にあれ、皆一の生業なり。鳥にあれ、虫にあれ、たゞ一の生業なり。生業は天の與へたる所、已に叶へるをつとむること安かれ。而して男には如何なる生を與へ、女には如何なる業をさづけゝる。男は外を勤め、女は内を助く、之一の定りたる男女の業にして、男外に政事をすれば、女、内に家を治め、子をはぐくむ、男外に工事に行かば、女、家に物を縫ひ、男外に耕さば、女、家に紡績す。これつねの業なり。而るを當世は、女も交際せずはあるべからず、細君などぞれろかな、さやうな細き事誰かはとらん。女とて大事業なし得られぬことやある。否大事業なさざるべからず、何の裁ち縫ひに汲々たるべき。衣食な

んぞ營むに足らん。我は國業の大事をとらんなどとて、家事のことはつゆ營まんともせず、日本の語はせまし、句みだれをりぬ。英語の方廣し、獨逸語の方規則正し、徒らに日本の語などよみをりては、西洋各國におろかにさるゝなどゝて、わが國の言はすてゝ、とつ國の言を用ゐ、はては男を内におきて、自ら走りありき、其の辯口を高慢す。さながら、魚が陸に上ぼり、獸類が水中に食をあさらんとするふるまひ、危しとも危し。大事業は出でゝ働くのみにあらず、内よく家を治め、夫をして家計の細事に拘はらしめずして、外事をはげまし、事をなさしむ、知らず〳〵其の効にあづかる、亦大事業ならずや。よき子をまうけ、よくはぐくみ、英雄、豪傑の母となる、亦大事ならずや。身武器を携へ、百萬の敵にあたる兵士よりは、帷幕の中にありて謀をめぐらす。亦かしこからずや。おのれは鶏鳴のあしたなどは云はず、婦人も智をみがき能を盡くして、夫を助くるはよし、勵ますもよし、たゞ本職を先きにして、夫をして細事にかゝはらしめず、よく内助の實を擧げむ事をのぞむなり。



論説

物の音はよく家庭のさまを寫す

白松園主人

れはかた、物の音ほど、よく悲喜哀樂のさまを寫す者はあらじ。されど、秋の夜の更け行く月に琵琶の音を聞く時は、涙催す種となり。霞にくるゝ高樓の春の夕に琴のすがかき聞く時は、風流心ぞおこさるゝ。いかならん賤山兒も、物のねには心を動さぬ者ぞなき。かゝれど、唐土のむかしは、はやく之をもて政教のたすけとはしたりき。書經にも、戛擊鳴球搏拊琴瑟、以詠、祖考來格。虞賓在位、羣后德讓。と見えたり。されども、物の音にも、正あり、俗あり、正樂は高尚優美なれど、俚耳には入り難く、俗樂は概ね婬邪の曲にして、頗る野卑下賤の耳に適へり。世に野卑下賤の者いと多ければ、俗樂を廢せんに由なけれども、世の降るに從ひて、さらぬきはの人士、相率ゐて漸く正樂を去りて俗樂に近づくめるは、如何なる故なるらむ。おのれ、音樂志操に乏しけれど、兎角いはんはをこに似たれど、當時大に流行する、月琴三絃の如きは、所謂俗樂の唯一な

る者なり。或は三味線は、我國人得意の技にして、音樂として甚だ誇るに足るべき者なるを、俗としおとすは、國人の音樂志操に乏しき證にして、斯道の爲め慨すべきことなりなど、此頃云ふ人もありとかや。音樂技術として價値ある者なるか、いかに、そはおのれよくも得知らねど、音樂は風致を助くるが爲めにこそ貴きものなれ。風致に害ありては、何ぞ取るべき處のあらんや。吾人は、道に三絃月琴の音する家の前を過ぎては、其家必ず大人君子の住める家ならず。其家庭必ず亂りがはしきなる事を知る。其の音いかに聞きても輕跳浮薄にして、從來も俗樂として賤みたる者を、今更聞き改めん耳もなかるべし。されど、下賤なる妓の之を演ずるはもとより問ふ處にあらず。吾人は家庭に於て嚴禁せんことを望む者なり。然るを、今や滔々たる滿都、至る所として此種の淫樂盛んならんとす。吾人は、かゝる地に子女を養育する事の實に容易のわざならざるを知る。詮ずる所、家庭の責任重き女子の志操いかんに決せらるゝ者なれど、望むらくは、志操を高尚にして、心ある人の爪彈きうけぬやうに、物せられんことを、はやく太宰春臺の、之れを痛歎せるあり。今左に其語を抄出す、

今の世に淫樂多き中に、絲竹の屬は三線、うたふ物のたぐひには淨瑠璃に過ぐる淫聲なし。三線は琉球國の樂器なるを、慶長のころとやらん、此の國に傳へしといふ。昔、

晋阮咸が造りし樂器を、阮咸といふ。此の國に傳へて昔は玩びけるにや、延喜式に載せたり。今の三線は阮咸の遺制なりといふはいかゞあらん、阮咸はいかなる制にてかありけん。琵琶に比ぶれば、（三線は）形甚だいやしく、是を彈ずるさまも極めてみぐるし、此の聲纔に發すれば、倏に人の淫心を引起して、放辟邪侈に至らしむ、其の害云ふばかりなし、士君子の假りにも聞くべき物にあらず。淨瑠璃といふ物、三線と同じ頃に始まれりと聞ゆ、………中畧　三線の聲よく是に叶ふ、故に淨瑠璃に必ず三線をあはせて世俗の上なき玩びとなれり。然るに、寛文延寶の頃迄の淨瑠璃は、皆昔物語を演せし故に、詞やさしく綴りなして、あはれにをかしきことも多かり。淫聲といひながら、忠臣孝子義士節婦のことを云へれば、愚なる小人女子も、是を聞きて感じあへり、元祿の比より稍ます〳〵俗に近くなりて、淫靡の聲多し。………中畧　昔物語を捨て、たゞ今の世の賤者の淫奔せし事を語る、其の詞の鄙俚猥褻なること云ふばかりなし、士太夫の聞くべきことにあらざるは云ふに及ばず、親子兄弟みな居たる所にては、面をそむけて耳をれはべき事なり。されど、此の淨瑠璃、盛に行はれてよりこの方、江戸の男女淫奔する事數を知らず、元文の年に及びては、士太夫の族はいふに及ばず、貴き官人の中にも、人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にて、姦通するたぐひ、

いくらと云ふ數を知らず。是まさしく淫樂の禍なり。三線も、寛文延寶の頃までは調子ひく〳〵、ひく手もまばらにて、筑紫箏に類せり。うたふ歌も、詞やさしく、ふしもゆるやかにて、俗調と云ひながら、いやしげすくなかりき。近頃は、調子高く、ひく手も甚だせはしく、こまかになり、歌ふうたも、詞いやしく、拍子つゞまりて、いそがはしさ云ふばかりなし。婬聲の至極、人の心をやぶること、是に過ぐる者なし。凡雅樂は、拍子まばらにて、絲竹ともに、手をつかふこともまばらなり。雅樂とは正樂をいふ、淫樂は煩手とて、手を繁くす、今の三線牧笛尺八一節切皆煩手なり。中にも三線の煩手、たとふべき物なし。……牧笛尺八一節切は、俗樂にて煩手なれども、三線の如くの淫聲にあらず。凡俗樂のあらゆる樂器の中に、三線程の淫聲なし。古の鄭聲は、如何なる聲にてありけん、孔子の、鄭聲を放てとのたまひしは、雅樂を妨げ、風俗をやぶる故なり。世に雅樂ありても、鄭衛の淫聲を禁ぜざれば雅樂は行はれ難し、今の世には雅樂絶えてなくして、淫樂のみ盛に行はるれば、風俗の衰敗する事甚だ速なり。我國の古を考ふるに、朝庭より民間に至るまで雅樂のみにて、淫樂なかりしと見ゆ。……淨瑠璃も、俗に近き鄙俚猥褻なることをかたるほどに、今に至りては、詞きはめていやしく、淫聲いやまさりて、少しも心ある人は、きくに忍び難くて、耳を掩

ふ、是を面白く思ひてたのしむ、淺ましき世の風俗なり。昔なきかやうのことの、出できたるれば、誠に國家の大なる病なり。除かずばあるべからず、たとひ遽に禁止せずとも、三線淨瑠璃をば、非人の所作に定めて、座敷に上らぬ者とせば、士君子は、おのづからこれをもてあそばざるべし。之れ風俗を正しくする一つの道なり。胡弓といふ者は、三線のたぐひなれども、其のわざ殊にいやしげなり。…………下畧

若し今の世に、太宰氏をして、長唄常磐津淨瑠璃を聞かしめ、ひとたび府下の寄席に臨ましめなば、之れを何とか云はん、況んや三線を長技として、之れを正樂に列せしめんとまで珍重がる者ある世に於てをや。

兒童訓練の本旨

茗溪　風湍子來稿

女子は、將來、賢母良妻として、家庭敎育の中點となり、善良なる國民の雛を育つ可きことは、殊更に、喋々する要あるなし。徒に、容色を麗にし、衣服を華にして、媚を良人に呈し、譽を世人に求めんとする者の如きは、我は、女子たる者の任の、何處に存するかを知る能はず。兒童は、家庭の反射にして、特に、母性の全面なり。兒童は、初めて、幼稚園に入り、小學校に入りて、各種の習慣行爲を齎す者なり。其齎す所は、善と

惡とに拘はらず、遡源すれば、必、之を家庭に得、之を母性に受く。故に、其家庭、其母性の良否は、之が爲めに、容易く、判斷せられて、虚飾の家庭なるか、假面の女性なるかを、明かに知らるゝに至る。然れば、女子たるもの、自己の慣養を缺ぐ可からざるは、論なきことなり。

兒童訓練と特筆する所以は、世の兒童研究の、誤解を避けんが爲めなり。兒童研究といふことは、故より可なり。如何なる事物にても、之を用立てんと思はゝ、先づ、其事物に付いて、細く知ることを要す。兒童を導かんとするにも、始め、兒童心性の發動を知らざる可からざるなり。然れども、一の好奇心に驅られ、最愛の兒童を、犬猫同樣に玩弄し、之によりて、故意に、兒童心性の試驗を成す如きは、不慈の極と云はさるを得ず。故に、名けて兒童訓練といふは、徹意なきにあらざるなり。兒童訓練とは、俗に之を躾方といふ。躾方とは、一定の主義方針ありて、兒童心性の發動を、悉く、之に、向はしむる事なり。是、彼の兒童研究とは、大に異る所なり。この訓練といふことを、終始、念頭に置きて、兒童心性の自然發動を注視し、兒童の觀念界を整理して、一の方針に、固着せしむる時は、德育上、案外の良果を得るは論なく、知育上にも、尠からざる効力あることなり。

さて、其主義方針を説明するといふことは、頗、困難なる事にて、到底、一朝一夕の談にあらざれども、我等は、家庭にありては、余り、浩漠なる主義方針を避くるものなり。只、其家風の善良なるものを採りて、之に充つれば可なりと信ずるなり。如何なる家にても、必、家風の善良なる者は存ず。然るに、近時、家風といふ事、更に、重ぜられず。父母たるもの勝手次第に、家憲を壊ち、家風を更へて、少も省みざる跡あり。之は、兒童訓練の上に、大害なりと思ふ可し。嚮に、友人某、某華族の家庭教師となりて、其兒童を委託せられたるに、某家にては、家庭教師は只、學校豫習の師と心得、學校の下調にのみ熱心にて、訓練の事は更に意を用ゐず、其教師の勞を、啻に、讀本の紙數にのみ置きたりといふ。かゝる家庭の狀態を、如何と觀察したるに、頗、奇怪なる現象を見出したり。今之を列擧すれば、(一)兒童は、無教育の保姆と寢食を共にして、父母の慈愛を解せざること。(二)父なる人は、常に外にありて、閨門の中、甚、亂雜なること(三)侍女下婢、概、無教育にて、母たる人を、惡に陷らしむることあるとも、善には導くことを知らざること。(四)母たる人の我儘にて、兒童を近つくるとを欲せざること、(五)父たる人の不在なる夜は、母は、無聊を慰めん爲に、女義大夫を呼び入るゝこと。(六)兒童も、之を聞かん爲に、母の室に行かんとすれども、母は、欺きて他室に眠らしむること。

（七）兒童の我儘を容れて、時々、侍女に、相撲を取らしむること。（八）女義大夫、伺候の際には、時々、小女を提へ來ること。（九）兒童は、年齡、尚ほ、幼弱なるにも拘はらず、淫猥の談話に傾聽すること。如此は、其一端に過ぎざれども、國家の藩屏たる家庭教育の、全班を洞見するに足る。嗟、かゝる家にても、祖先の遺風は、尚、存するにや。滔滔として、天下、悉、斯の如くんば、將來、忠良の國民は、豈、得可けん。これ、則、教育と知識とを誤解し、知識と躾方とを誤解したる好例にあらずして、何ぞ。尚、訓練の細目に至つては、追て、之を論せん。

女德のしをり（二十二）

三輪田眞佐子

第三天壽を遂ぐべし

凡そ生あるものは必ず死ありとはいへども、その死するは止むを得ざる原因あるべし。亦至當なる理由なかるべからず、乃ち死すべき時至りて死するを天壽とこそ言ふべけれ。蓋し天壽は天則に從ふものにして、これを全うするは亦人道なるべし。孟子曰く、命を知るものは岩牆のもとに立たずと。若しみづから死を招くものあらば、天壽とはいふべからず。

然るに、史を播きて見、亦現在なる世の實例を視るに、無意識、あるいは故意に天壽を棄

つるもの少からず。その無意識に天壽を棄つるとは、放食過飲のため健康を害し、運動不足のため强壯を減ずるより、おのづから短命なる類をいふなり。その故意に棄つるとは、危に近づき以て落命し、無益に暴虎馮河の勇を好みて沒命し、若しくは厭世の念を起して自殺するごとき類を言ふなり、これ等は悉く天賦を破り、人分を擲つものなれど、道理に戻るは明なり。

わきて女子は、遊逸を好みて運動を欲ぎ、一朝病にかゝらんも、藥は苦く且つ臭しとてこれを用ゐず、甚しきは神佛に迷信して醫藥を顧みざるものもなしとせず。亦小事に激して身を水に投じ、あるは刄に伏する例も往々あり。故に、女子たるものは、深く戒め以て目前の感情を抑ゆる能はずして、攝生の道を離れ、將た一時の憤慨に狂して、天壽を遂げざる不德の行あるべからず。

されど、如何なる事情あらんも、轍頭轍尾天壽を全うするを以て良しとなおもひそ、苟も女子たるものは、貞操のためには死も鴻毛より輕からしむべく、亦皇國の民たる以上は、たとひ城を枕にして死せんも厭はざる決心、及び實行なかるべからず。思ふに、大義のため死するは反りて天壽なり、若し不義を犯し汚辱に安ずる如きは、精神旣に死しけり、などか天壽と言ふべき。

先哲曰く、慷慨赴死易、従容就義難、と。實に如何なる時に死すべきか、如何なる所に死すべからざるかを定むるを以て肝要となす。抑、人事を盡し丶も、猶疾病、あるは天災にて死するは眞の天壽なり。不養生などの無意識にて死するは、愚昧の結果なりと知るべし。獨り講究すべきは自殺なり。すべて女子の自害するものを見るに、貧困のためなるあり、痴情のためなるあり。嫉怨のためなるあり、その他種々の原因より自害するものあれども、おのれは公義のため、利他心より起る自殺の外は、悉く惡まんも譽むべきものにあらずと信ず。

德川時代の末世に、女乞食ありて、自害せしとき（ながらへてありつるほどを浮世ぞとおもへど殘ることのはもなし）と辭世の詠を遺しけりとかや。固より乞食にしてかゝる風韻の辭あるは賞すべしといへども、未だ身を逆境より拔きて、正業を得るまで、倒れんも止まじとの勇德なきのみならず、天壽を害するの不德たるを知らざりけんこそあはれなれ。蓋し自ら浮世を觀ずる天資あるこのものにして、夙に女子の道を聞き正しき世路を踏まんか、唯に乞食ながら風流は奇なりとの名を得るばかりに止まらざらましをとれもへど、人生の幸と禍との岐るゝところ知るべきなり。

むかし秦の始皇帝、使を蓬萊山にやり、不死の藥を求めしめけりとかや。そは反りて、

天壽は人力を以て得る所にあらざるを知らざる愚のわざぞかし。おもふに、天壽つきて、死すべき秋至らむ、莞爾として永眠することそ望ましけれ。要は時を知るにあり。義を悟るにあり。故に死は、以て惜むべし、以て惜むべからずと言ふべきなり。



史談

井上通女

鹽井ふく子

智者はまどはず、讃州丸龜の城主につかへたる井上儀右衛門と云へるもの丶娘に通女と云へるあり。いはけなくして賢く、書を讀み、詩歌をよくし、老成の人にもこゆるさの磯うつ浪のなみ〳〵ならぬかど、多かりき。年なほ若うして、京極侯の夫人養生院の召しに應じてはじめて江戸表に赴きぬ。花のあづまとはいへど

通女、此時はじめて親に分れ、はらからに分れ、親しき友にうち分れ、うき浮に棹さして舟出しぬ。折しも風烈しく、浪たちて、舟たゞよひぬるに、通女舟椽に出で、浪をうち亘して

　しるべせよ浪まをよけて行く船の
　　こゝろしられぬ八重のしほ風

その日十六日、いざよひの月浪にうつりて玉の如かりしに、

　風吹けど月にみがけるしら玉も
　　くだけてなみの立つにぞありける

また、十七日、響の灘を過ぎしに風昨日よりあらけく松の音いと高く聞ねしに、五節の君のひきとゞめらるゝと云ひけんこそとぞ、ふと思ひて

琴の音をまつにこめてやいまもまた
たゆたふ舟をひきとゞむらん

又詩を賦しけり

乘レ寒一葉浮。倏忽過二他州一。
風響驚二郷夢一。波聲動二旅愁一。
蒼々天與レ水。浩々月如レ流。
枕レ袖蓬窓裡。不能只自羞。

など詠じけり。其の時の記事あり、東海紀行といひて、曾て本誌にものせられたれど、此處にまたいはず、たゞ其の中なる詩歌、二つ四つばかりを取り出でなん。

十八日兵庫を出で、難波津をけふこそみつの浦につきぬと悦びてあがりぬ。爰に枯れ殘りたるよしなめりと人の云ふを

冬かれのけしきもよしや津の國の
なにはわたりははるならねども

二十一日晝ごろ淀までからうじて至り

夜もすがら棹さす舟にさへられて
まくらのしたにむせぶかは波

鳥羽の戀塚にて

停レ棺獨憐戀塚前。貞名勒レ石草芊々。
若人自是再難得。天命如何使レ渠然。

逢坂の關を過ぎて

へだてこしふるさと人をこふる夜の
夢路はゆるせ逢坂の關

二十七日あら井にやどり、難波にて給はりの御印、關所に奉せしに、わきあきたるを少女と書きわくべき事を知らで、たゞ女とのみ書きて奉り、御印の言葉にも女とのみありけれど、ゆるし給はで空しくもとの宿にかへり

たび衣荒井のせきをこえかねて
そでによるなみ身をぞうらむる

身經二萬里一走二君命一。今日已來荒井關。
未レ識少長因レ袖分。空留二旅館一我心歎。

さて御印とりかへてゆるされ、通りて濱松に着き、

いさみしを袖には深くうちよする
　なみに答ふるはま松の風
たま紀行の書き出でに、天の和らぐ初めの年、霜をふみて堅き氷に至る頃ほひとあれど、天和元年霜月にやあらん。
其の後夫人みまかり、なほ幼き君のうしろ身なし、忠やかなること九年、國にありける父母に切に呼び迎へられ、ゆるされて久しかりし故郷にかへり、たらちの親に仕へぬ。其の折りもまた紀行あり歸家の日記とて、これも本誌九十號以後に見えたり。歌も文もいとめでたし、
後たらちねの教に從ひ、三田茂右衛門といふ者に嫁ぎて、一人の子をまうけぬ。名を義勝、字を傳右衛門と呼びて丸龜の城主に仕へ、侍讀儒となり、才志論孟子訓などの書をあらはし、才學いとめでたかりしも、母の性質をうけしにやと思ふもめでたし。
通女かつて、僧の盤桂と儒佛を論じ、歌を詠じて之に聞えたり。
　つねに行く道ならむこそ世をうみの
　　あまののりたるふねもたのまめ
これは人間はつねに行ふべき道あり、何ぞその道をすてゝ佛菩薩の力をからん、世を渡る道ならむこそ海士の乘る船だもたのまんとの心にて、流石善智の坊、盤桂和尚も、通女がまどはぬ、才智に感じて、女丈夫と呼びしとかや、通女がよみたる詩歌とり集めて、往事集と云ひ、後の世に行はれしとあれど、之を拾はんものといろ／＼尋ねたれど、遂に得ること能はざりしぞ口惜しき。また兼ねて聞きれける歌に
　たれぞすての山には入らじ勝母とて
　　車をかへす人もありしかを
下の句しかと覺えず、されど、その意ばかりは忘れず
たれぞすての山は、昔時老いたる母をすてし、山なれどたれぞすて山と云ひしなり。されど、さやうの山には這入らじ、曾子は里の名を勝母と聞き、母に勝つことや

あるとて、其の里には入らで、車を引きかへしたりと云ふ。さう云ふ人さへあり。我もれどすて山には入らじ、けがらはしとの意にて、その孝心のほどもくまれてめでたけれど、さだかならぬをもとり出でぬ。幸に知りたらむ人はたゞし給ひてよ。

農夫彦助の老母妻娘

井上頼文

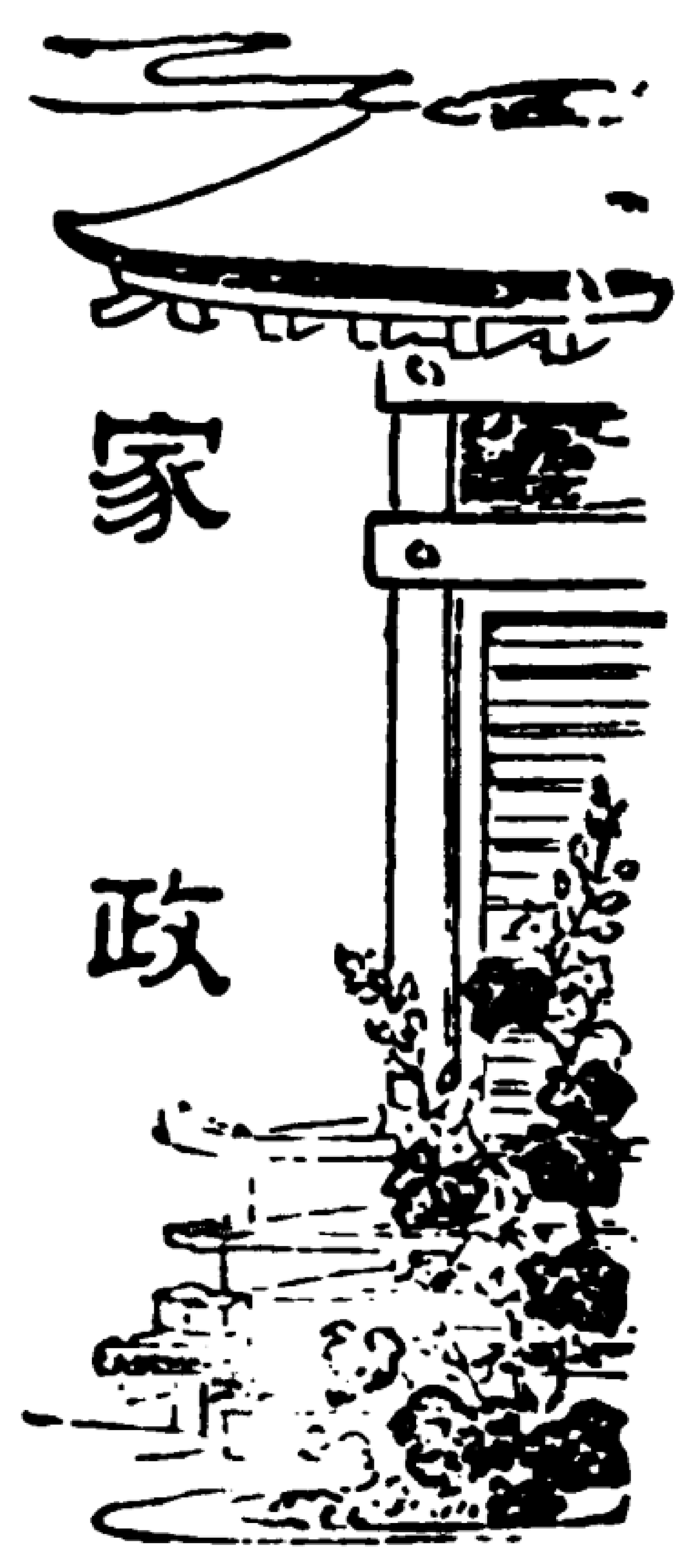
一家心を一にする時は、その家必興るべく、一國心を一にする時は、外敵もこれに乘ずるの機なかるべし。然るに、何事ぞ、一家心を一にせんとすれど、これを離たんとする奸者いで、一國心を一にせんとすれど、これを隔てんとする猾者いづ。もしこれを除き、これを排はずば、その極遂に家をも國をもそこなふに到るべし。然かもこれ、世の通弊にして、古今東西まぬかるゝ事あたはざるがごとし。識者たるもの、よろしく注意注目せずして可ならんや。こゝにかよわき三女が、力を合せ、心を一にして、するどき猛獸を斃したる佳話こそあれ。

いでや、その概略をかたりてん。飛騨國大野郡宮村に、彦助といふ農夫あり。農業のいとまいとまには山々に分け入りて、猪鹿の類を獵る事をなりはひとせり。彦助はかゝる荒きなりはひにも似ず、心ざま温和にして、いとよく老母につかへけり。その妻もまた老母と夫とにつかふること厚く、その娘もまた老母と父母とにつかふること極めて厚かりけり。されど、此の一家には、つねにものあらがふ聲など聞ゆる事はなかりけり。ひゝとせ、吹く風はげしく置く霜しろき頃、彦助は例の山かせぎに出でゆきぬ。留守は女と小兒とのみなれど、いとものさびしく暮したり。ある夜、老母はことし六歳になれる孫をつれて、廁に行かんと、背戸口をたちいで、四五間あまり歩むをりしも、何ものか襲ひくるけはひす。猿などにやと思ひて、ふと見れど、こはい

かに、明星の如きまなこをきらめかして、あらはれいでたるは一頭の狼なり。あなやといふ間に跳りあがり、孫を目がけてかまんとす。老母は孫にきずつけじと、ありあふ薪おつとりて、力かぎりに打ちたゝけど、怒れるかれは物ともせず、牙をならして飛びかゝり、老母が左の腕をかむ。かまれて何かはたまるべき、心はやたけにはやれども、いたでにえたへず、老が身のもろくもそこにうち仆れぬ。彦七の妻はかくと見て、えものを求むるいとまなく、むな手ながらに走り出で、身を以て老母を隔つれど、かれはます／＼たけりたち、さゝゆる妻が肩をかむ。老母も妻も、あはや今、餌食となならん一刹那、身の危さもうち忘れ、娘は椽より飛れりざま、狼やらじと組み止めぬ。ふり放さんと狼は、いよ／＼たけるを、ぬぢふせおし伏せ、咽をひつしとしめつくれど、かれはます／＼たけりたち、娘が手足のきらひなく、するどき爪もてかきむしる。かきむしられて皮肉裂け、鮮血さつと迸れど、絞めたる手をむちつともゆるべず、命かぎりと絞めつけたり。母はこの間と足もそら、勝手の山鉈取り來り、組みしかれつゝなほ狂ふ、かの狼が眞向を、さつく／＼と梨子割に、切りつけ切りつけ切り割れど、さしもにするどき狼も、遂に斃れて死きとぞ。こは、天保四年癸己の正月十二日の夜の事にして、此の時、老母は七十三、妻は四十八、娘の年は二十三なりきとなん。此の事官に聞えて若干の賞與ありきといふ。

嗚呼かよわき女の腕もて、するどき猛獸を斃し、近隣の害をさへ除きつるは、これたゞに勇氣のみにはあらざるぞかし。これ全く、孫をいつくしむ老母、老母をすくはんとする妻、母を助けんとする娘慈心孝志、各こゝに一致せるによる。實にめでたきしわざならずや、實にをゝしきふるまひならずや。もし力を合せ心を一にすることなく、おのがむき／＼逃げまどはましかば、四人とも、かの猛獸の毒牙にかゝりて、あへなき最期をと[illegible]ゝんこと疑あるべくもあらず。まして、む

さばりて飽くこと知らぬ毒獸は、なほいくぞくの人をそこなひしか測るべからず。嗚呼かよわき婦女子すら力を合せ、心を一にする時はなほかくの如し嗚呼。



家政

茶の湯

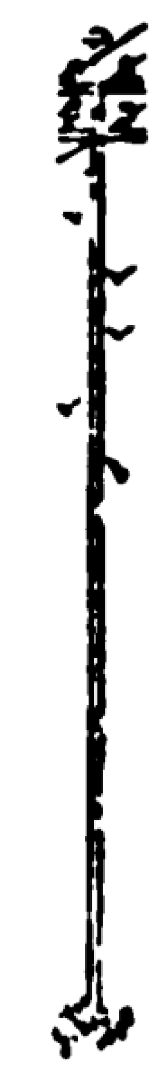
茶禮初學（續）

孤峯庵碌仙齋不羨
關　葦雄

客方は此前に、薄茶菓子を、上客より次客に辭讓の禮をなして取廻すべし。（但し懷中より紙を出し、其上に取べし。婦人は多分紙入を紙にて卷込み、帶の右側にさしはさみ居れば、此時は其紙一枚を出して、其上に取方体裁よからん。菓子は二種あらば二種共に取べし。箸あらば箸にて取べし。是を喰するには、亭主茶を掃時を竢て喰ふべし）亭主薄茶を點て出したらば、次の客へ挨拶して進み出、茶碗を取には、亭主へ向ひ、あなたは如何杯と云て後茶碗を引べし。先一旦進み出たる其膝の際に引寄置て、後座して又茶碗を右手にて取揚げ、左手の掌中に置、右手を右の側に添て戴き、而後右手にて向正面の方を持、前へ廻し、呑口を見て呑べし。呑方は餘り音を立て呑むは野鄙に成て不ㇾ宜、三口半に呑べし。末の半口は、茶碗の裡面に泡の殘り有ものなれば。些少音を立て茶の泡の底にのこらぬ樣に、茶碗を傾けて呑切べし。又呑口は、例の如く指先にて露を切而後、茶碗を下に置、兩手を疊に突、茶碗總体の形容を見、次に手に取て茶溜り、口造り、香臺、作柄、切廻し、藥の濃淡、能々見て何燒と云事を認べし。又

不審の廉あらば亭主歟、又同座の中巧者の人に可ㇾ聞、見終らば直に返すべし。此内亭主は換茶碗を取て、跡の薄茶を點て出すべし。二客は次へ一禮して、茶碗を取戴きて薄茶を呑こと上　客の如くすべし。上　客は爰にて空茶碗を返すべし。以下段々如ㇾ斯して末客に至る迄同し、一順廻りたらば、上　客は相客の塲合を開合、再服を望む人あらば、其儘跡を亭主に爲ㇾ點しむると雖、數服に相成、亭主の繁勞もあるべければ、相客の内より替り合て、之を補助するも客方の慰みにて、一興ならん、或は番頭を出して、此薄茶の代點せしむるも、貴顯紳士は相當たるべし。偖又衆客は薄茶足り十分ならば、上客塲合を見計ひ、茶碗をすゝぎ湯を明るを見て、一旦御仕舞可ㇾ被ㇾ下と挨拶すべし。主方は併如何に可ㇾ有ㇾ之哉、又白湯にても御好みの方は無ㇾ之哉抔と云て、深切に可ㇾ聞。客方は白湯好の人は、乍二御面倒一御釜の湯は格別故、御湯戴き度旨を云て可ㇾ望。主方は所望に逢たらば、例の如く一旦茶碗をふき、今一篇湯すゝぎして、今度は不ㇾ拭、直に湯を汲入出すべし。（但し湯の分量は、茶の分量と同じ澤山に入べからず。微量を好む（偖客方は順序に係らず、望みたる人より呑て差閊なし。呑口をふくこと薄茶に同じ。又亭主方へ歸りたらば、矢張薄茶の如く湯滌して、客方より、御主人樣も食上りて御仕舞をと云べし。然ある時、亭主方は所謂臨期にて呑んと欲せば無二遠慮一私も御相伴と云て點て可ㇾ呑、又餘り時間移ると思はゝ、餘り長くなりますからと歟、又は實際釜の煮落たらば、釜も煮落候故とか、又は釜の湯涸れたらば、湯も涸れ候間一旦取入申抔と云て、水柄杓に取水を茶碗へ汲入、茶碗をすゝぎ、水を翻し、茶巾を入、茶筌を入、茶杓を拭ひ、茶碗に掛、帛紗を腰間に鋏み、薄茶入を水指の前に置、茶碗を右手にて取、左手に移して棗と置合すべし、次に釜へ水を指、釜の蓋を締め、柄杓を蓋置へ掛、水

指の蓋を締むべし。此時　上客より、御薄茶器御茶杓の拜見を願ひますと云て所望すべし。亭主は御慰に可レ入二御覽一と云て受べし。

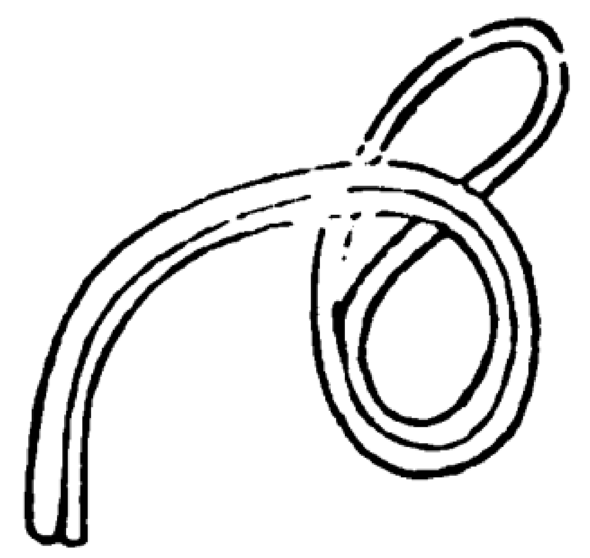


新撰 結物百種

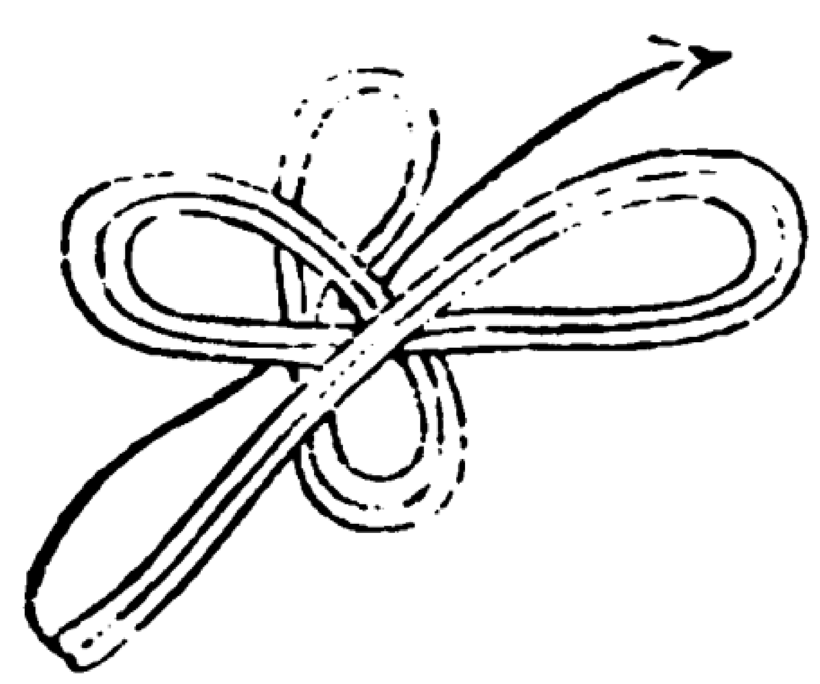
百草庵一無

蜻蛉結28 （小笠原流）是も旗竿の蟬口に用ひし結なり。當世は帷等の總角結の代に用ゐるもよし。

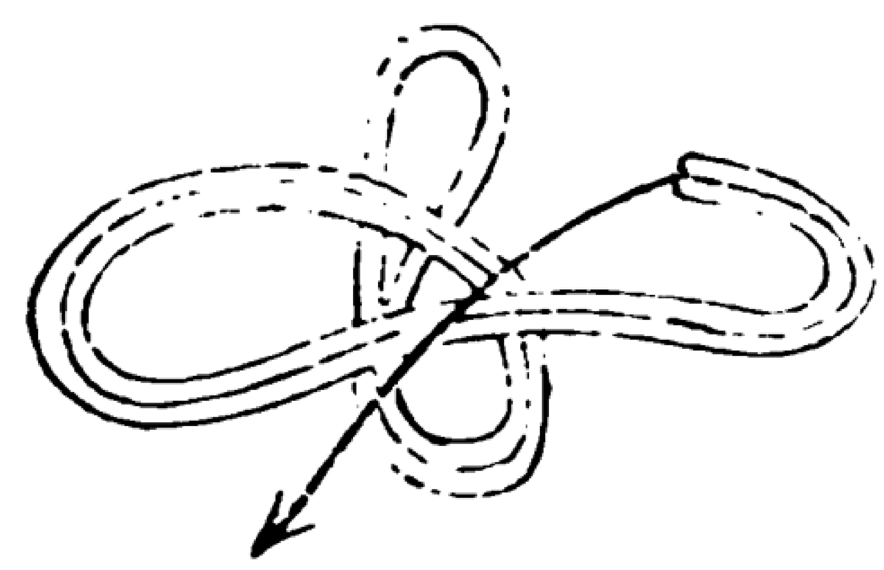
第一圖



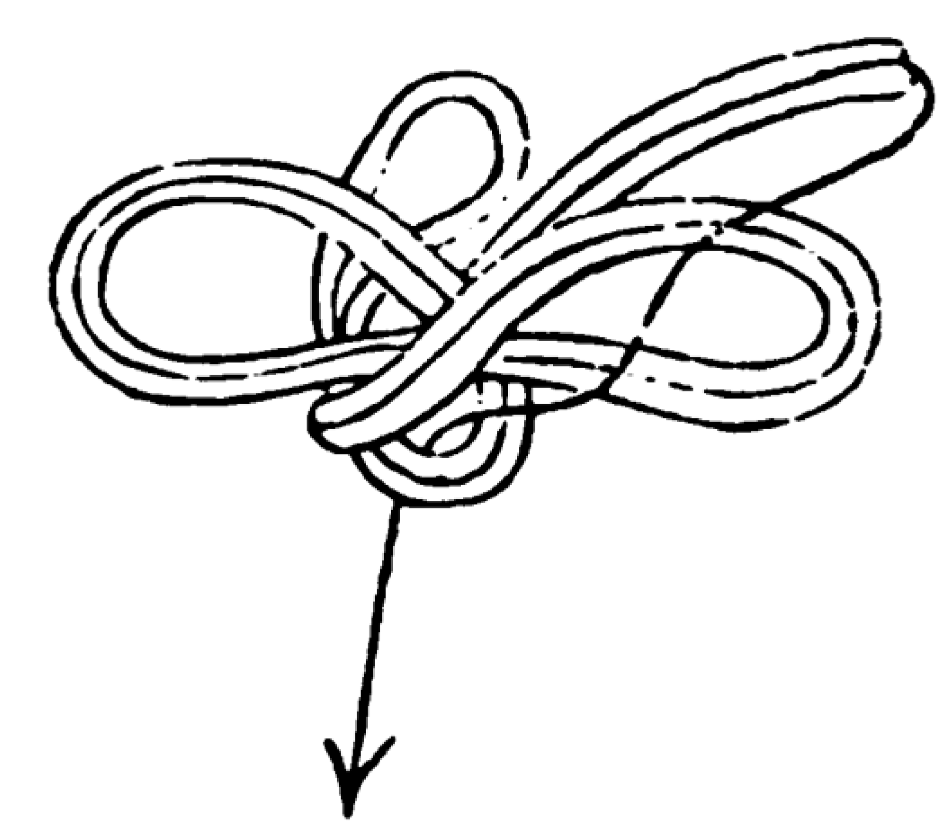
第二圖



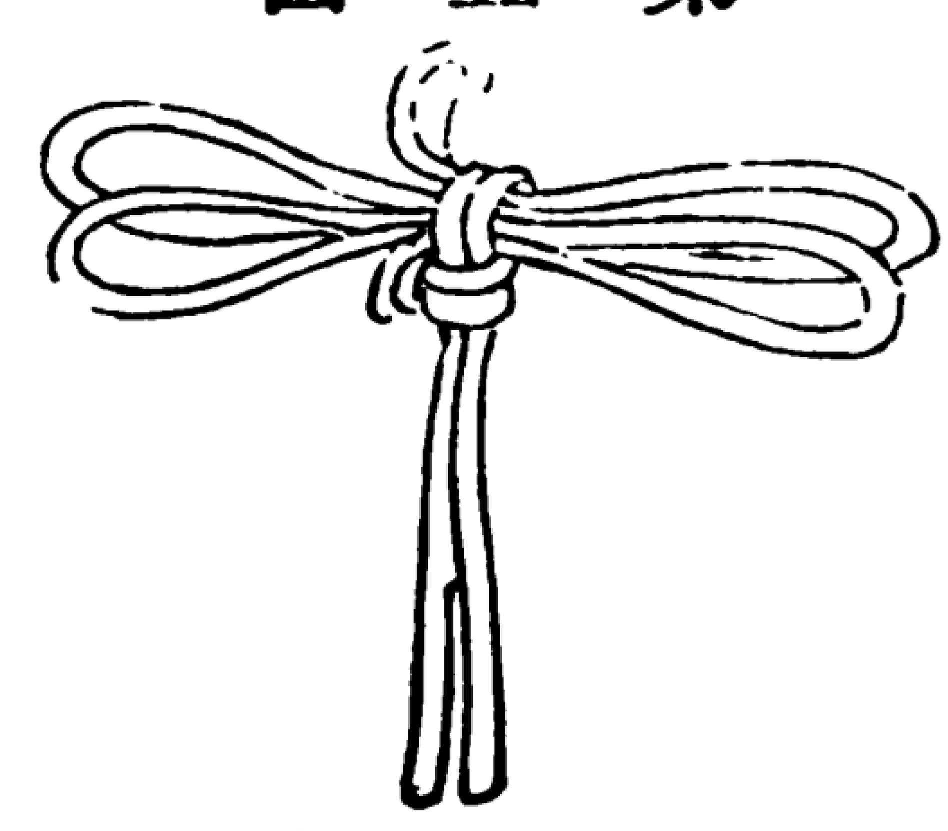
第三圖



第四圖



第五圖



結び上り

だいどころ

四季料理の取合

夏の部（續）

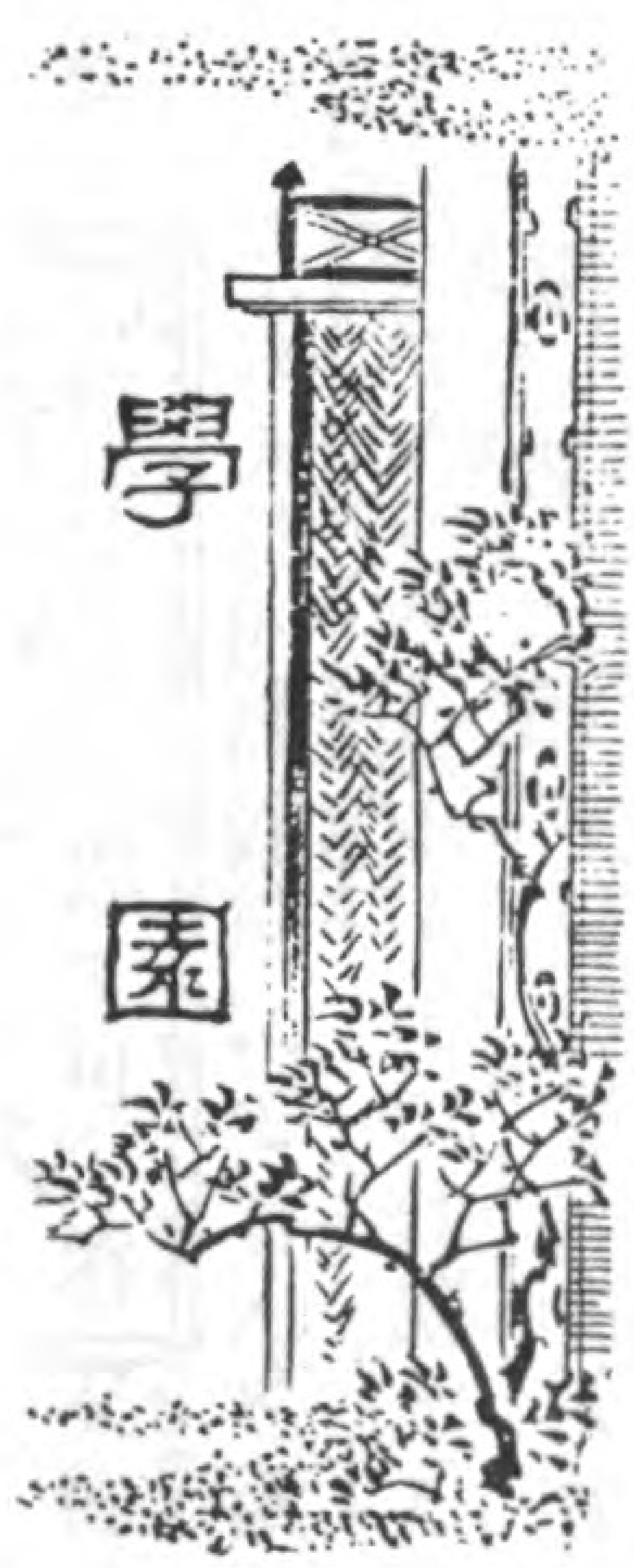
和物

竹の子、きのめあへ、きのめをすりたるものへ、白胡麻をすり、味噌、味醂等にて鹽梅すべし○竹の子、芥子あへ○田にし、きのめあへ○むきみ類、わかめ、すみそあへ○小あゆ、芥子ぬた○蕗のはろあへ、葉とも

湯煮し、細かにきざみ、胡麻味噌にてあへる○はじけ豆、糸こんにやくあげて、きのめ、味噌あへ○小茄子、くるみ、卯の花あへ、茄子、胡桃を湯煮し、胡桃の皮を去り、少し味つけ、豆腐のからをよく擂り、食鹽、味啉等にて鹽梅し、煎て右二品をあへる○胡瓜もみて、百合の根、ゆで〻、番椒、酢味噌あへ○小茄子、なたまめ、もろみあへ○ふじまめゆで〻、木の芽味噌あへ○十六さゝげゆで〻、黑胡麻、醬油あへ○新ゆり、ひじき、きん山寺あへ○さや、いんげん、めうがの子、青あへ○さつま芋、岩たけ、胡麻味噌あへ○きんこ、輪ぎり、白瓜もみて、木のめ、味噌あへ○新牛房、山椒味噌あへ○

汁

新牛房ほそいんげん、葉しそ○若茄子、小口切、あられ豆腐○小かぶ、めうがの子、めうど○小櫻海老、わかめ、花柚子○新里芋に、そら豆○むかごに、みぢん豆腐○丸むきなす、しそこま〴〵○根芋にえんどう豆○竹の子、そぼろに、ときからし○茄子輪ぎりに、新牛房、さゝかき○ふき小口、やき豆腐○めうがの子、つみいれ○小あぢに、小口茄子○はねぬき鰡、すり山椒○かはくじら、若ふき○



秀歌集（四十一）

鹽井正男

○

山里の春の夕ぐれ來て見れば
　いりあひの鐘に花ぞ散りける

○之は新古今集春下の部に、能因法師が山里に、まかりてよみ侍りける歌なり、○山里にまかりて○山里に行きてと云ふことなり。まかるは、まゐると相

對したる詞にて、貴き所より卑きかたへゆくを云ふ。まゐるは卑きかたより貴き方にゆくを云ふ。田舍は、都に比ぶれば、いやしき所ゆゑに、山里に行くを、まかるといへるなり。○能因法師。橘諸兄の十世の孫にて、俗名を橘永愷と云へり。攝津古曾部に居りたるを以て、世に古曾部入道と稱す。歌を好みて、その道を藤原長能に問ひ、また、つねに心を此の道に盡くして、伊勢の住みたる趾の松を見て、車を下りて禮して過ぎ、長柄の橋の木片を秘藏するにさへ至れりと云ふ。彼の「都をばかすみとゝもに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」と云ふ歌をよむや、徒らに作りしものと思はれむことは口惜しとて、三十日あまり、人にも見えず、顏も日にこがし、旅にやつれしさまを粧りて、後に此の歌を出せしと云ふことは、上東門院の女房の加賀が「兼てより思ひしことをふし柴のこるばかりなるなげきせむとは」と云ふ歌をつくりて、徒らに題詠とせられむを面白からず思ひて、花園の大臣にあひ、後、見すてられて、これをつくりたる如くになしたると、共に當時の好事と云はる。かゝるほどなりしかば、よく一時の名人と云はるゝに至り、その後、能因がよみたる歌の所なればとて、白河の關を越ゆる時、いつも裝束をつつしみて、禮して過ぎたる人ありと云ふに至りぬ。○此の歌の初句、ある本には。山寺のとあるあり。然れども、山里にてよろしかるべし。下の句に、入相の鐘とあればとて、それはたゞ聞ゆるなれば、山里ならずともよろしかるべし。殊に、まぢかに鐘あらんよりは、やゝ離れてきこえたる方あはれなるべし。○入相の鐘。黄昏に撞く鐘の聲なり。入相とは、日の入るころのことなり。「入相の鐘に花ぞちりける」とは、入相の鐘きこゆる空に、ちら／＼花の散ることにて、換言すれば、落花の空に入相の鐘きこゆるなり。入相の鐘のひゞきにつれて、花の散るにあらず。○花ぞちりける。花が散るワイと云ふことなり。

○一首の意は、山里の春の夕くれに來て見れど、入相の鐘の音あはれにきこゑて、花がちら〳〵散り居るワイといへるにて、誠にもの淋しき山里の夕ぐれの景色、自ら云ふばかりなき感情こもりて、身にしみておぼゆる歌にこそ。

○

あふ坂や木ずゑの花を吹くからに
　嵐ぞかすむ關の杉むら

○之も同集同部に宮内卿が關路の花をよまれけるなり。○あふ坂や。逢阪にてはといふ心にて、且つ語勢に感歎をこめたるなり。○木ずゑの花。櫻の木ずゑの花にて、櫻の花なり。○吹くからに。吹くゆゑにといふことなり。○嵐もかすむ。むら〳〵と落花を吹きませたる山風のけしきなり。

○一首の意は、逢坂山にては、さくらの花を、嵐が花を吹きちらすゆゑに、嵐までが霞みて見ゆるといふにて、山風に紛々と亂れかゝる落花のさま、誠に面白きけしきなり「嵐ぞ霞む」といへる、思ひ切りたる詞づかひ、あはれに面白し。彼の定家卿が「大空は梅の匂ひにかすむ」といへると共に、古今の絶句と稱すべし。此の歌も、前のと同じく、はなやかにして、しかも、おほきやかにさかむなる拔群の姿にて、誠に千古に朽つべからざる名吟と云ふべし。女子、しかも、年若くして、よくかゝる秀逸あり。増鏡に、此の人年つもるまであらましかば、實にいかばかり目に見ゑぬ鬼神をも動かしなましに、若くしてうせぬる事、いとほしくあたらしくなむ」と惜しみたる、誠に然り。いとほしき限りにこそ。

○

八重匂ふ軒端のさくらうつろひぬ
　風よりさきにとふ人もがな

○之も同じ集の歌にて、式子内親王が、家の八重櫻を折らせて惟明親王の許につかはされけるなり。○家の八重櫻。我が宿なる八重さくらなり。○八重匂

ふ軒端の櫻。軒端の八重匂ふさくらといふことにて、八重匂ふさくらとは、八重櫻の色の、つややかに光るをいへるにて、匂ふは香のにほふにあらずして、つやの匂ふことなり。○うつろひぬ。花の盛りのすぎて、既に色もさめ衰へたるを云ふ。既に散れるにはあらず。○風よりさきに。風の吹き來る前にといふことなり。○とふ人もがな。訪ふ人もあれかしと希望せるなり。

○一首の意は、我が軒前に、つやゝかに匂へる八重さくらも、既に散りすぎて、色もさめ衰へたり。風の吹き來りなば、やがて散らむばかりなれど、風の吹き來る前に、あはれ訪ふ人もあれかしといふことにて、人とは惟明親王をさし給へるにて、花もやがて散らうほどに、せめて散らぬ中に、一度は問ひ給ひてよと、これまでに問はれぬを、やゝうらみをこめて云ひやり給へるなり。源氏物語の若紫の巻に「宮人に行きて語らむ山ざくら風よりさきに來ても見るべく」とあるよりよませ玉へるにて、同様の思想なれど、本の歌にては、山さくらとあるを「八重匂ふ軒端のさくらうつろひぬ」とかへ、また「宮人にゆきて語らむ」といへるを、「とふ人もがな」となげき乞ふ意になし給へるなど、誠にもとの歌よりも、あはれふかくこもりてればねまゐらせけり。

○

かへし

つらきかなうつろふまでに八重ざくら
　　とへどもいはですぐる心は

之は惟明親王がかへし給へる歌なり。つらきかな。情けない事ではあるよと歎息し給へるなり○うつろふまでに。色さめ衰へるまでにとなり○とへどもいはで○花見に訪ひ來よとばかりも仰せ給はずしてといふことなり。

○一首の意は八重ざくらが色さめおとろへるまでに、花見に問ひ來よとばかりも仰せたまはずして、

過ぎ給へる御心は、情けない事であると云ふ事にて、式子内親王が、もはや宿のさくらの盛りもすぎ、散らんむかりに成りたれど、せめて散らぬ中に、一度は訪ひたまひてと、やゝうらみをこめて云ひこし給へるを、惟明親王は、また、花のすぐるまで、一度も問ひてよといはで過ぐしたまへる御心は、誠になさけないとうらみかへし給へるにて、かへしの手振り、誠に面白くてこそ見奉れ。

源氏物語講義（二十二）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

宮城野の露ふき結ぶ風の音に小萩がもとをおもひこそやれ』とあれど、え見給ひ果てず。命長さの、いとつらう思う給へしらるゝに、松の思はむことだに、恥しう思ひ給ひ侍れど、百敷に行きかひ侍らむことは、ましていとはゞかりおほくなむ。畏きおほせごとをたびたびうけたまはりながら、みづからはえなむ思ひ給へたつまじき。若宮はいかに思はしるにか、まゐり給はむことをのみなむ思し急ぐめれど、ことわりに悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給へるさまを奏したまへ。ゆゝしき身にはべれば、かくておはしますも、いま〳〵しう辱くなどのたまふ。宮は大殿ごもりにけり。見奉りて、委しく御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべしとていそぐ。

○みやぎの丶露ふきむすぶ風の音に云々
陛下より北の方へ贈りたまへる歌なり、御宸翰中にありしをぬき出して、斯くことさらにかけるなり。
みやぎのは陸前の宮城野なり。宮城野は昔より萩の名所を以て聞えたり。萩の名に宮城野などいふ名を負せて愛づるも、其の萩に名高き所なれどなり。さて宮城野と云ひて、こゝはその裏面に宮城、即皇

居の意を持たせたり。○つゆは萩の上露なり。露は萩の咲く頃、枝もたわゝにおきあまるものなれど、花と共に常に歌などの材料にとり用ゐられたり。ここはその露を、陛下の御涙の意に用ゐたり。○ふきむすぶ　荒き風の吹きすさびて、萩の糸をかなたこなたに靡かせつゝ、其の上露を吹きみだすさまをいふ。露のおくことをむすぶといふこともあれど、ここは其の反對にて、散亂るゝことなり。○風の音は、所謂今宵の荒涼たる野分の風の音なり。○小萩のもと、を萩、を田、を野などのごとく、をと副ふるは美稱の意はあれども、必しも小さきと言ふことを意味するにあらず。即たゞ萩といひ、田といひ、野といふことなり。されど、こゝは小萩にて、ちひさき方に取成したる所なり。故にを萩と言はず、こはぎといひ、やがて其の裏面に若宮の事をにほはせたるなり。○思ひこそやれ想像せらるとなり。こそといふ助辭は多く物のある中に、唯一つ取りあげて、これこそ云々と、その事を専にいふ時用うる助辭なり。●ぞといふ助辭と同勢のものなれども、●そは物を指示す時に用う。一は物を取擧ぐる時、一は物を指示す時に用うる助辭と心得べし。

一首の意は、宮城野の露を吹き散す野分の風のはげしき爲に、其所なる小萩が許のいかならむかと懸念せらるといふ意なり。今一度語を換へて云へば、九重の宮中にありてすら、朝夕ひまなき涙の露のこぼるゝに、殊に今宵の野分によりて、一層かきみだるる心地のするを、まして草深き二條の里亭に在します若宮は、いかにわびしく過したまふらむ。わが宮中の境遇に引き比べて、一層氣遣はしく思ひやらるといふ意なり。

○とあれど、えみたまひはてず　御宸翰を拜しもて行きて、あまりのかなしさに、遂に卒讀するに堪へたまはず。半途にして差置きたまふよしなり。これに依りても御宸翰の詞は、この外にも猶多くありし

ことを知るべし。この母君をして、ことさらに御宸翰を讀殘させたる處、即餘情ある處なり。

○いのち長さのいとつらう思うたまへ知らるゝ、に云々

北の方は御宸翰を半ばにしてさしおきて、命婦に向ひて申さるゝなり。北の方の前に言ひたる詞の内にも「今まで止り侍るがいとうきを、かゝる御使を、よもぎふの露わけ入りたまふにつけても耻しうなむ」とありし語を今一層審にして、こゝに云ひ重ねたるなり。憂きも耻しきも命長き故なりと、その命の長きをかこちし詞なり。莊子に、壽則多辱といふことあり。こゝは其の意を思ひ寄せて書けるなり。人生の幸不幸は、棺を覆ひて後にあらざれば品騰し難し、よし短命なりとも、身幸福の時に死なば、後生宜き人といはるべし、たとひ長壽にても、時不遇の身にあらば、反りて罪深きものと思はるべし、御息所が陛下にかしづきて、獨御寵愛を專にし、他に並ぶものなかりし時には、勢に附く世の人は、北の方を皇太后かなにぞのごとくに打あがめて、北の方の幸福は、其の例も稀なるほどなりしを、定めなき世のならひに依りて、御息所に先立たれしよりは、ありし勢にうつてかはりて、今は二條の里亭にわび住居する身の境遇となりぬ、世の人はこれを見て、必北の方を御息所に代へたかりきと思ふなるべし。今は誰ありて北の方を仕合者なりといふものはあらさらむ、命長くて死におくれたるゆゑばかりに、この憂目を見ることとなれば、これを意におもひて、いのち長さのいとつらう思うたまへ知らるるに、とはいへるなり。○れもひたまへしらるるにとは、思ひますするのにといはむが如し。

○松のおもはむことだにはづかしう　引歌なり。古歌に「いかにしてありとしられし高砂の松の思はむこともはづかし」とあり。一首の意はいかにして此の世に在りといふことを人に知られにけむ。言ふ甲斐も無き身は、世に在りとも知られであらむを、なま

なかに人に知られたることの耻しさよ。彼の高砂の老松は心なきものなれども、夙に世にその名を知られて居る、松若心あらど吾が身の上を笑ふならん。其の松の思はむ心も耻しといふ意なり。其の意をとりて、北の方の世間の人の口の端にかゝるらむことはさておき、心なき松の思はむことすらも耻しく思はるとなり。

○もゝしきにゆきかひ侍らむことは、ましていとはゞかりおほくなむ、　元來もゝしきといふ詞は、宮中は百官の座を敷く所にて、廣き所なれど、その意にて、百敷の宮とつゞけたる枕詞なりしを、後には直に宮中をさしてもゝしきといふに至れり。こゝも其の後の意にて、宮中のよしなり。吾が身の耻は人の口にかゝるのみならず。松の思はむことだに耻しき身なれど、まして人目繁き宮中に、かゝる身にて行通ひ侍らむは、思ひも寄らぬことなり。唯吾が身の耻かしきのみに非らず。斯かる不吉不祥の身を以ちて、禁裏に出入せむことは、第一憚多しとなり。

○かしこき仰ごとたび〳〵うけたまはりながら云々　この詞によりて見る時は、陛下が北の方に參內を促したまひしことは一再ならざりしことと知らる。前にも、親しき女房御乳母などを遣したるよし見え、典侍の使したまひしこともあれど、其のをり〳〵に參內をも慫慂したまひしなるべし。依りて、たびたびうけたまはりながらとは言へるなり。文面にはかくれたることも、突然なるは一つもなく、必何所にか其の照應となるべき詞のあるは、一糸亂れざる源氏物語の常なり。先日より幾度となく、御使者を賜はりて、參內せよとの畏き御懇命を頂きますれども、斯樣に憚多き身でござりまするゆゑ、自進みて參內することは思ひも寄らぬ身でありまするとなり。

○わか君はいかに思ほし知るにか　血を分けたる御親子の御情愛はあらそはれぬものなれど、若宮には、

頑是なき御心にも、いかにしてか知し食し分くることやおはしますらむとなり。おもはし知るにかとある下には、あらむといふ詞を省きたり。

○まゐりたまはむことをのみなむ思し急ぐめればことわりに悲しう見奉り侍る　　若宮には、宮中に參內したまはむことをばがり思召し立たせられて、御急ぎあそばす御樣子にてあれば、御道理のことよと悲しく御痛はしく見奉りますとなり。○いそぐめれば　のめれば、めら　めり　める　めれと活く助動詞なり。語原は見えありの約れるにて、事物の狀態しか見ゆと推量る意あり。

さてこの一句に就きては、聊其の修辭法のことを申試むべし。抑此の一句は、これを文法の上より痛論すれば、一句の句法即修辭法の起結の定格をたがへたる續けがらなり。吾が國、中古以來、語法の紊亂してより、中には其の理の解し難き修辭ども少からずと雖、殊にこの句法の起結法ほど濫雜になりたるものはあらざるべし。これには人の注意を引くこともおろそかになりしゆゑにや。ぞ　や　か　なむの係は何故にく　す　つ　ふ　む　るにて結ぶか。こその係は何故にけ　せ　て　へ　め　れにて結ぶかと言ふ理由を尋ぬるものは殆稀なる姿にて、唯既定的に斯くあるものぞとのみ心得て、稍もすれば形式のみ備りて、精神の貫徹せぬ修辭法を怪まざるもの多し。こゝもその例の一つなり。まゐりたまはむことをのみなむといひおこしたらば、これを結ぶべき所は、おぼしいそぐめれとある所なるべきは、其の意を吟味して明なるべし。然るに、こゝは、見奉り侍るといひて結びたり。さてはまゐりたまはむことをのみなむ見奉るといふ意に見ざるべからず。文意の精神を味ふに、いかでか、しか聞きなさるべき。斯くては恰木に竹を繼ぎしごとき觀ありて、論理更に立たざるべし。斯るとりはづしは、源語中隨分少からず。其のよしは其の所々にて必おどろかしおか

ひ。源語を以ちて絶對の明珠美玉とのみ思爲して、かゝる缺點のあるをもよきことゝ思へるは、決して眞に源語を見るものとは言ふべからず。されど、ここは、參りてまはむことをのみなむおぼしいそぐめる。されど、ことわりにかなしう見奉り侍りとあるべき所なり。

○などうち〳〵に思うたまへるさまをそうしたまへ　斯樣に、私の心中に思ひまするとを、陛下へ内内御傳達下されとなり。

○ゆゝしき身に侍れど云々　ゆゝしきはいま〳〵しきと言ふに同じ。この詞を後世勇々しきといふ字音の意にとりて、勇ましきよしに用うるは誤なり。北の方は、若き時夫に先立たれ、老いて女におくれ、昨日の榮華は今日の沈淪となり下り、加ふるに、今は佛門に歸依して、世にかゝづらふまじき身の上なり。故にゆゝしき身とはいへるなり。○かくておはしますもとは、若宮のかゝる忌々しき老母のもとにおひたちたまふもなり。

○いま〳〵しう辱く　とは、若宮は將來大臣執政ともならせたまひて、一國の重望を負はせたまふべき望ある尊き御身なれど、吾がごとき、後世惡しきものゝ手許に留めおき奉らむは、且はいまいましく、且は辱なく思ひますとなり。こゝの詞かたじけなくとのみにては語をなさず。この下には、思ふたまへらるなどいふ詞を含めて見るべき所なり。これまでが北の方の命婦に向ひて申す詞なり。

○などのたまふ　斯樣に申して、この外にも猶申したるを省きたるさまなり。

○宮はおほとのごもりにけり　以下筆を若宮のことに轉さむとする所なれど、先草紙地より宮のありさまを申すなり。おほとのごもりは大殿籠りなり。寢殿に御寢あそばされてあるよしなり。

○みたてまつりて云々　命婦の詞なり。若宮にも御目見え申し上げて、こよひみづから御見上げ申し上

げたる御容躰をも悉しく奏上申したけれど、御目醒をまたむも暇あらむ。宮中にては、陛下の御返事を待ちかねさせてれはしますらむ。兎角してひまを取らむには、其の内に夜は更けて仕舞うてあらうとなり。

待ちれはしますらむを‖のをは‖、つゞく所もなく、又筆を省きたる所にもあらず。また歎息のを‖の字に似てそれとも使用法異なり。言はゞ全くの誤用なるべし。かくのごとき誤用も源語中往々見ゆる所の瑕瑾なり。に‖文字の義に見るべし。上の、奏し侍らまほしきを‖のをは‖、さて御目覺を侍ち奉りて居らむ夜更けはべりぬべしといふ意にて、次の夜更け侍りぬべしといふへ續くべき脈なり。元來この助辭は、上下の語句をつゞくる時用うるものにて、上句の義を否定し、若は處分せむとする時に用うべき助辭なり。若宮の御容躰を見奉りて、くはしく奏し侍らまほしきを、左樣にして居て、兎角暇どりては、陛下にも待詫びさせ給ふらむに、夜も更け侍りぬべしといふ意なり。

○といそぐ　互に感情の高まれる兩人の、斯くては何時までも名殘の盡くるをりもあらざるべけれど、夜の更けはべらぬ内に歸參せむとて、命婦は御返事をせき立て顔に、歸參の用意するなり。

以上こゝの一段の大意は、今改めて再度說き重ぬべき必要もなかるべし。

布美安波勢（二）

白松園主人寄

正月

はじめて鶯の聲を聞く

左　渡邉重豐

よものけしきも、まだとゝのふらねど、はるをよろこぶ、うぐひすのはつこゑ、かたはにさへづるがをかしう、ひとりはゝゑまれつゝ。

右　勝　藤原保世

よに遠き山住なれど、年のけぢめも、しらざりしに、かきねにのこる雪のたえまに、わかやかに、あをみたる草のみゆるは、春きにけりと、柴の戸をたちいでゝみれど、いつしか霞わたりて、四方の梢、そこはかとなう、打ちけぶりて、こゝろもとなき中にも、うめのけしきどみ、はゝゑみたるに、をりしも鶯のみなれがほに、木づたひつゝなく聲に、おのづから心も、のびやかになん。

評判　左の文みじかきに、よくいひかなへてはあれど、がもじのつたなさよ、くちをし。右のふみは、いと〳〵めでたし、かちなること、いふもさらなり。

左　持　片岡徳

木々の梢ども、いつしかとけしきだちて、いとみどころおほかる中にも、かきねの梅の、いひしらずをかしう、咲きみちたるこずゑを傳ひつゝ、うぐひすのわかやかに、打ちなきたる初聲の、あかずめでたきには、こころものびやかに、なりもてゆきて、いと〳〵、れもしろき朝ぼらけなりけり。

右　岡祐之

雪の花にもさかどやとさへ、はやうより待ちわたりし聲にしあれど、たちかへるとしの初ねは、めづらしう、まだとゝのはぬこゑの片はしにも、ふとれどろきながら、つま戸おしあけたれど、朝日かげうら〳〵とさしわたりて、軒ちかき梅のにはひくるに、ふくとしもなき春風は、いとのどかなれど、さそふゑるべは、ゑるかりけんかし。

評判　左の文よろし、右の文は鶯といはで、それと志らるゝやうにかけるは、たくみにれもしろけれど、詞づかひ、てにをはの、いまだしき所みゆれど、かちとも、さだめがたくなん。

二月

柳れはかるところ

左　　　　片岡徳

雨はれてよりは、百の鳥ども、一きはこゝちよげに、さへづりあひたるおもしろさに、ふと心の行くまゝ、かなたこなたと、野べの小みちをふみわけつゝ、ゆきゆくほどに、青柳のいとおほくたちならびて、打ちけぶれる處ありけり。しばしと立ちよりて見れど、まだまゆにこもれるほどなれど、いみじう長くて、あたりの眞砂を、はらふばかりに、しだりたるに、雨のなごりとおぼしくて、枝々にとゞまりたるしづくども、朝日かげにいたうかゞやきて、きらきらと光そふしづくは玉とみゆるかな、柳のいとにつらぬかれつゝ、と思ふまゝを、うたひけるも、をこがましや。

右　勝　　當麻尚文

舟のぼす川ぎしに、こゝらおほき柳はらの、うれごとにけぶりわたり、霞のたえまに、たてぬきのほころびかと、みゆるあれど、うなゐ子が、ふりわけがみかと、あやまたるゝもあり。露を玉にぬきて、あめの神のみすまるかと、きらめくあれど、佐保姫のくりかけゝん、みどりの糸かとうたがわるゝもあり。ながきみじかき、こきうすき、柳の糸のいとおもしろきに、おのれも舟長も、こゝろつながれて、さをもさしたゆみぬ。

評判　左の文めでたし、右の文、柳のおほかるさまを、いろいろのものにたとへて、いといとたくみに、おもしろくも、かゝれたるかな。ひかりありと見し、しづくの玉よりも、すこしはまさるにこそ。



敎梯抄（續）

新葉集春下

花の歌の中に

前中納言　爲忠

こゝろさへあらぬ梢にうつるかな。
一樹のはなのいろかはるより、

續千載集春下

よみ人しらず

おのづから花のをりのみ訪ふ人の、
こゝろの色をいかゞたのまむ。

新續古今集雜上

古き詩の句を題にて歌よみけるに
花發風雨多といふことを

頓阿法師

世の中はかくこそありけれ花ざかり、
やまかぜ吹きてはるさめぞ降る。

古今集春下

櫻の如くとく散るものはなしと
人のいひければよめる

貫之

さくら花とくちりぬともおもほえず。
人のこゝろぞかぜも吹きあへぬ。

續拾遺集春下

百首歌の中に

式子内親王

吹くかぜものどけき御代の春にこそ、
こゝろと花のちるも見えけれ。

白川殿七百首

白川殿七百首歌の中に惜レ花

具行朝臣

いくかへりことわりしらず惜むらむ。
散るはならひの花の名ごりを、

家集

花ちりすぎて西芳寺に將軍
おはしたりしに

夢想國師

さかりをぞ見る人おほしちるはなの、

あとをとふこそなさけなりけれ。

後拾遺集春下

題不知　　永源法師

こゝろから物をこそおもへ山ざくら、
たつねざりせむ散るを見ましや。

續後拾遺集雜下

龜山殿七百首歌に

後宇多院御製

せきかへる苗代みづのさま〳〵に、
わくるや人のこゝろなるらむ。

新千載集雜上

元弘三年立后四尺屏風に

苗代　　前中納言惟繼

あら小田にまかする水もゆたかなる、
民のこゝろはにごらずもがな。

月詣集三月

苗代をよめる　　參河内侍

苗代のみづむかりをや山がつの、
はるはこゝろに任かせたるらむ。

新葉集雜上

春の歌の中に　　中院入道一品

小山田のなはしろみづのひき〳〵に、
ひとのこゝろの濁る世ぞうき。

夫木集春

題しらず　　よみ人しらず

かぞいろぞあはれと見らむつめむだに、
ふたりは人にちぎらぬものを。

同

鳥百首の中燕　　參議爲相卿

あはれみの後のはるまでのこりけり。

燕のあしにつけしいとすぢ、

續千歳集雜上

款冬を　藤原業尹朝臣

やまぶきの花もこゝろのあれどこそ、
いはぬいろには咲きはじめけめ。

新後撰集雜上

題しらず　平宣時朝臣

うきことも言ふにぞつらき山ぶきは、
こゝろありける花のいろかな。

（以下次號）

雨夜の徒然に思へる事共を記す

海上壽子寄贈

肥前唐津　宮崎雅香

一詞を修むるは歌を學ぶにしく事なし。物語類の文章、和文として世に用ゐらるれど、字音にてよむところ、或は音便にくづれたる詞等ありて眞の和文とはいひ難し。いはゞ中昔の俗言なり。眞の和文といふは、古事記の文言、且は祝詞の文言等にて、近くは直日の靈其類ならむか。

一題詠は後世の事にはあれど、おのづから題に定りあり。そは萬物中、いにしへよりよみ來れるものにつきて、名實ともによろしく感ずべき品を撰出で、中昔の人の設け定めたるものなりけり。抑吟詠は、和漢共、風景又は草木の花の麗しきに感じ、且は喜怒哀樂の情に溢るゝ時いひ出る業なれど、古歌には俗物を詠じたる例なし。俗物は感じ少けれどにや、格別見處なきもの其名よけれどよみ出たるぞありける。ありふれたる草花の中にも、つき草といふ名のやさしけれどよみ來れるが如し。今の世も其名よからむには、新奇のものとても苦しかるまじ。然るに、當事電信蒸滊其他是に類する題盛に行はれぬるが、電信蒸滊など、其名よからぬは何の感ずる所かある、現事に當りては、いかなる事にてもよむまじきには

あらねど、題を設けてよむべきものにはあらじ。新奇を好む人のこゝろ奥ゆかしからず。

一和歌を和歌の浦にいひかけたる歌、中古以來まゝ例あり。されど、字音なれどあかぬこゝちす。又ゐにしあれどといふ事是も字音なれど好ましからず。されど、蝶菊などはわろしともおもはれす。是らは字音なれど、牡丹、芍薬などとはことかはりて、其音の詞めきたる故か、但しはこゝのとなへの漢土の音と暗合せしものならむか。

一此世を浮世といふ事佛道より出たるが如し、いかにも世をあきはてたるいひ事にて好ましからず。めでたき御代とてこそいふべけれ。

一雅は俗の反對なる事は誰しも辨へたれど、其雅てふ事は、人其趣を異にせり。わが國にて、雅をみやびと稱へしは、宮ぶりの意にて、即大宮ぶりならむを、世の人の風雅といふは、人にていはゞ、頬冠りして裳裾をかゝげ、瓢を腰にしたる姿を見ては、彼人は風雅なり、風流なりといへり。雅といふものはかゝるものにはあらじ。

一俗談平話を主とする俳人の心などより論ふべくもあらねど、俗を以て雅の本体と心得て居るこそいぶかしけれ。凡て俳人の心には、常よりも等の下りたる趣を見て、雅ととなへ居らるゝが如し。

一詞に新共なしといへど、おのづから新古あり。特に續けがらに於て大にあり。故に、歌の姿におのづから新古あり。新らしきは古きに及ばざれど、よくよみおほすれど、新古共によし、新古混合せるがあしきなり。されど、初心の程は、新古の差別もつかず、彼も珍し、是も珍しと拾ひ集めたる詞、いづれも捨かたく、みだりに取用ゐて、世にいふ雜水の如くなすもの多し。かくいふ雅香など其類ならむ。歌をよむは料理人の魚肉野菜を調理するが如し。其取合せを見計ふ事肝要なり。取合せあしければ、折角用ひたる淺草海苔も、其香木芽の香に打消されて詮なきが

如し。物によりては中毒する事もあるべし。歌も症のしれざる詞は珍しとてみだりに用ふべからず。

一丘陽生とは如何なる人にか、雷會とは如何なる會にか、先頃讀賣紙上にて論鋒を戰はしたりしが、双方兼ての技量は如何にやさかなはし。一二の歌に附て論ぜられしところは、雷會其當を得たるが如しと雖も、同會より出せる歌も亦不感にてこそ。

一近來新休詩てふもの流行せるが、好ましからぬ事共なり。名をきゝて無學の人のざれごとなりとしられたり。

一世の歌人、貫之躬恒を尊び、俊成定家の掟を守りぬれど、是等の人師とするにたらざる事は、海上胤平翁の歌によりて、近頃思ひ當りたり。されど、是等の人々の中に於て、巧拙を論ぜむ、貫之躬恒よりも、俊成定家の方勝れりとやいはむ。惜らくぞ學力乏しきが故に、古人の誤りを其儘傳へ、且あらたに誤りをさへ作り出たり。是らの人々に學力を持せ、長歌の正しきを旨とし、三句切不獨立語の非ある事を論らしめたらむ、感能なる歌多からましを、長歌の詠さまもしらざる故に、三句切不獨立等の句法の誤りをしらざるべし。此人々源平戰亂の世に當りて、歌にのみふけりをりしは如何なる心得にか、有意の士の慕ふべき人物にあらず、又小倉山莊百首の中に、恐多くも　天皇方の大御歌をさへ、己がまゝ直し奉りて書れし事共、其仕業かたはらいたし。

一歌は奇しきものなり。わづか一首の中にも、其人の心見え透ものなり。輕々しくよみ出べきものにあらず。

一萬葉の歌は古きが故、よく感情をのべて龜鑑となれど、名歌少し、後世の人のよくよみおほせたる歌は、萬葉にも勝れるが多かりける。



家兄遺草（一）

松々記

白松園主人篇

白松園生曰ふ、萬松院主、山本提山ぬしは、なき兄が二なき友なり。なき兄そのかみ、院のひとまを借りて、院主と共に、れきふ志したりけるに、一年ばかりありて、別れて吾妻に上りしが、朝な夕なひたぶるに、忍び出でられて、なつかしさに堪へざりけん、院に在りし時の事ども、かき出でゝ、一冊にものして、松々記と名づけ、遙々院主におくりにけり。今なほ、其草稿の殘れりけれど、おのれ更に抄録して、家兄遺草の中に加へ、白雪の積れるあした、春雨のそぼふるゆふべなど、花橘のたづきとぞすなる。おのれが家の園號をば、白松園といへり。されど、松園とあるは、即ち兄の事にて、松々記と名づけしも、萬松院の松と、白松園の松とを、取れるならし。兄が實の名は、新井健之助とて、此の松々記をものして送りぬる、次の年に、廿五にて、東京に病みて失せぬ。

長門の國、山田の邑に、靈鷲山といふ山あり、山のなからに靈場ありて、萬松院となんいふ。昔此院に、やんごとなき聖出で給ひて、本山の座主にめされてめでたき、大往生をとげ給ひぬ、聖の御弟子に、提山和尚となんいへるが、聖の舍利をば、もてかへりて、間もなく、此院になほりにけり。この和尚いはけなかりしより、深く佛法に歸依して、聖の御弟子のはやくより、豐浦の覺苑寺に、住まれけるに謁して、剃度をとげゝるが、聖の本山にのぼり給ふにつきて、やがて上りて、入寂を見とゞけ、まゐらせけるにぞありける。今は塵外の靈境に住みて、紫雲に包まれつゝ、結跏趺坐の苦行、積みに積みて、專ら塵世の無常、人間の艱苦をはかなみ、遠く俗を離れて、朝にてみ谷に下りて閼伽をくみ、芝生に坐して花をつみ、夕には薫ずる

かをりこまやかに、讀經の聲かすかなり。そがひの山のかひより、出づる月影は、里人も眺め、和尚も見る、見る目は同じけれども、見る心は、同じからずとぞいふなる。されど今の世の、かいなでの僧とは異にて、五の戒れどそかに、飾りもなく、慾もなく、誠に聖の御弟子といひつべく、めでたき佛果を得られん事、疑ひなければ、行末たのもしとなん、ものしり人はいひあへりける。況や名利に役かはれて、閑かなるいとまなく、一生を困みに過ごす、非修非學の徒と、日を同じくして語られんや、未だ三十には、みたぬよはひなるを、おこなひの暇には、唐の大和の、歌の道にさへ、思ひ入りて、號は松院となん、聞えたりける。

こゝに、新井松園となんいふ、男ありけり。老たる一人の親を、養ひわびて、よきたづき求めにとて、はるぐ〵此里に、まどひ來にけり。この松園その性こちぐ〵しく、ともすれど人とあらがひ、心一と向きにて、己が善しと思ひぬることは、何處までも善しといひもて貫く、ねぢけたるしれものなりけり。文學をいたく嗜みて、旨と皇國振をなん學びける。文もかき、歌も詠みけれども、己れのみ善しといひて、人は一人も、善しといふ人あらざりけり。されど自らはわろしとはつゆ云はざりけり。又いたく猛り罵るをもて、目の前には、とかくいふ人なかりしかど、いよ〵心驕りて、物識良にすましたりけるぞ、いと傍痛かりける。つねにいひけるは、此道の奥にたどり入らんまでは、わだし事は、絶えて見もし聞きもせじ、たゞ面もふらず、ひたぶるに辿り入らんといへり。されど、世の中の事は、何につけても、すべて知りたらず、宜べこそ一人の親をも、養ひわびつるなりけれ。又佛法を、いといたく惡みて、誇りたりけるを、其道を知らずて、ひたぶるに惡むはよしなし、道場にも詣うでゝ、其道を聞きて、さてともかくもと、論す人もありけれど、さらに聽き入れざりけり。

さる程に、明治の廿五年といふ年の、七月の初つかた

暑さに打ち萎をれて、いかで、涼しく淸げなる、所もがなと打わびてありけるを、友なりける某、そはよき處に、ゐてゆかんとて、ある夜かの、萬松院にゐていきけり。住寺の和尙、簀子に端近く迎へ上げて、あるじせらるゝ、いとねもころなり。筧の水の音、かすかに聞えて、涼しく冷やかなる松風、そよ〳〵と袂に通ひて、ほのめきくるかをり、此世の樣とも覺えず、靈鷲山の月、さやかにさし出でゝ、向ひの青山勝山おぼろに見ゆ。松園心に、あはれがる事限りなし、夜更くるまでありて、歸るさ、友のいひけらく、いかに僧は惡くき者にて、道場は穢らはしきものなるぞと、いひけれど、松園とりあへず

あひ見ての後の思にまかせずて
　かねてつらしとなに思ひけん

あすの夜も訪はんいいへど、さもこそとて、笑ひつゝかへる。

あすの夜、ふたゝび訪ひけり。今霄は月影殊によかりけれど、諸共に山を下りて、住吉の祉に詣うでつ、池の面すみわたりて、月も影じ、松のかげも、さかさまにうつりぬ。こゝも亦、得難き幽境なりけり。中の島にゐて、笛を吹き、あるは歌うたふ。和尙も月ながめながら、唐詩などくちずさぶ。友は笛もえ吹かず、只心よき者にて、松園が和尙に馴れつる樣を見て、打悅ぶも又興ありげなり。かゝりし程に、晝も夜も、ひた訪に訪ひたりけれど、坊も廣きに、こゝに移らずやと、いはるゝまゝに、遂にやどりをさへ移しけり、こは廿二日の夜なりき。唐士の某といひけん人は、窻前の草、生ふるに任かせて、きらざりきとかや、和尙も同じ心にや、庭前の草生ふるがまゝに、打任かせたりけるを、まだしき世心ある松園は、いぶせしとてぬきとりなどして、さわぐを、これ又何ともいはで、するがまゝに任せたりけるぞ、いとありがたき心なりや。下衆男らは、和尙のかゝるありがたき心を、何かにつけてひそかに、とかくいひあへりけれど、非學の輩は、すべな

き者にて、いとくちをし。これぞ其道にとりては、めでたく、ありがたき心なるべきをや。

朝に皷の音を聞き、夕に讀經の聲に、耳を傾けつる、しるしにやあらん。やう〳〵佛の惡くきことも、うすらぎにけれど、未だたねてなしといふには至らず。ある夜和尙と、物語のなべ、法の事を、ほのめきそしりつるに、物やさしき心にも、さすがに堪へずやありけん。眉を昂け、唇を反へして、聲ふりたてゝ、いたく罵りにけり。法のたかはしも、えしらぬ外道の心もて、廣く深き、無量の道に、嘴を入れん事、誠に恐ろしき事とや、悟りにけん、後はたねて、謗る事はなくなりにけり。和尙のいひけるは、我宗は、說法を旨とせず、只自から悟りて、會得すべき法なりといへる、さもあらん。文字の法師、暗誦の禪師、けぢめあるべきにこそ。

（次號へつゞく）

浮世いかだ舟

作者不詳

●牛を賣とて佐奈田にたとへし事

今はむかし、ある人うしをうりけるに、買主いふやう、此牛はちからもつよく、病氣もなきかといへば、賣主こたへていはく、中々力のつよく、しかもそくさいな、大坂陣では佐奈田ぢやと思へといふ。さらばとて買とる。五月になりて此牛にからすきをかけて田をすかすに、一向よわうて田をもすかず、からすきは一あしもひかず、やゝもすれば人をみてはかけ出で角にてかけん〳〵とするほどに、何のやくにもたゝぬ牛なり。さてさてにくい事をいふて買せた。大坂陣ではさなだぢやと申たほどに、さこそつよからめと思ひたるにからすきは一足もひかず、そのくせに、人をみてはかけんとすると、はらだちて居る。ある時かの賣主にあらふて、そなたはとゞかぬうそをついて、人をだかけて、からすきをもひかぬ牛を、さなたぢやといふてう

りつけられたといへど、賣主こたへていはく、さうてあらう、犂は一あしもひくまい、人をみてはかけんとする事は定てあらう、されどこそ眞田とは申つれ、大坂ぢんで、さなたはたび／＼かけてこそしたれ、一足もひいた事はなかつた、そのうしもひかぬによりてさなたぢやといふた。

●足ことをしるといふ事

今はむかし、ある上戸よそに行て大酒をのみ歸る。道にてうちたふれ、かほをすりむき、むかふずねをうちやぶり、やう／＼家にかへりてうめき／＼ふしたり。女房是をみて、世の中の恥しらずといふはそなたの事ぢや、酒をのむとて酒にのまれて、かやうに道中にてころびたふれ、かほをすりむき、あしを打やぶりじゆつなさうなていたらくぢや、酒をのむならどよひころにのんだか見事なといへど、此男まくらをあげて、是がよいころぢやといふた。浮世坊此はなしを聞ていふやう、上戸の酒に飽足ことのなきををかしがれども、世の中の人みな、ともによろづあきたる事をしらで、わざはひにかゝるものおほし。是欲心のふかきがゆゑなり。老子のいはく、欲おほければ身をそこなひ、たからおほければ身をわづらはすといへり。わづらはすとは用心に隙なき心也。げにもあきたることをしらざるものは。欲ふかき故なれど、是わざはひのもと也。たからは身をそこなふたね也。この故に欲をはほしいまゝにすべからず。つねに足事をしるべし。足ことをしらざるものは、富といへ共まづしきがごとし。足ことをしるものは、まづしといへどもとめるがごとし。色は染ざれどけがれず、たからはむさぼらざれど害なしといへり。やるまじき人の、物をやるを、とるまじき人の是をとる、もろともにわざはひのたねをうゝる也。されどこそ、君子はやるべき時にはあたへ、とるべきものをどとるなれ。ゆゑに、禍にかゝる事なし。小人は欲心に目くらみて、後のわざはひを思はず、とるがうへにもとりたがり、ほしがるによりて足事をし

らず、恥をまねぎわざはひにかゝる。それ寒蟬は枯木をいだきて露をくらひ、蜻蜓は草葉にとまりて水をのみ、おのれあきたりてたくはへなし。このゆゑによこしまの害をうけず、せみははらをもつて吟し、とんぼうはつばさをひらきてとぶ。思ふことなくかゝはる事なし。鷦鷯は巣をくふに一のえだをひろしとし、鼴鼠の川をのむ、腹ふくるれば足ぬ。人は欲心に限なくして足ことをしらず、かの大上戸の酒にゑひふして、よいてろおぢやといふにおとれり。

節儉

龍孫生

落合可酔の布衣

享保年中、江州彦根の藩士に落合勘左衛門と云へる人ありしが、同國大津に舟公事ありし時、御城使を命ぜられ、其後、布衣役を仰せつけられけり。そが近傍に住まふ同家中は、勘左衛門が布衣役となりし祝ひにとて訪來り、さて御祝ひのしるしとして、我等より布衣作りて進ぜんと云へば、勘左衛門は悦び、深く其厚意を謝しけるに、人々はやがて勘左衛門が邸宅の裏にある藪の中より、程よき竹を切り、苧にて處々をくゝり、三四寸廻りの竹を心にして、更に十文字に以前の竹をくゝりつけ、暫時にして布衣籠と串を作りあげ、いざとて進めけり。さて勘左衛門は、それより妻に紅絹を購はしめて、布衣に縫はしめ、波不立の緒には、赤紙を觀世撚にしたるをつけ、牛の舌には、勘左衛門己が姓名を記し、よくこそ出來たりとて、之を床の上に飾りつけしぞと。

數年の後、勘左衛門隱居して、可酔と號したりしが、其後、嫡子總次も布衣役を仰せつけられたれば、父に向ひ、布衣は如何にすべきやと問ふに、可酔は妻を呼びて、我が先つ年の布衣ぞあらん、倅にとらせよと云ふ。妻は、其布衣は良人の許を得て、既に無しと云ふ。可酔、何時いかにしたりけんと問ふに、妻はゝ笑み、

そは同家中の勝五兵衛方へ嫁ぎ居る我が娘、昨年初孫を擧けし折、七夜の生衣如何がせんと思ひしが、新たに調ふも入らぬ費と思ひ、旣に不用となりし彼の布衣の絹を解きて生衣とし、娘方へ遣はせしと云ふ。可醉、如何樣その樣の事ありしと覺えしが、年老いてはや忘れけるなりと云ふ。總次、さるにても串籠はあるべしと問へど、可醉、籠は風呂場の上に釣り置きたる樣に覺ふと云ふ。妻は、いや／＼その籠は孫の生れし時、しめしあぶりの籠に作りかへて遣したりと答へけり。其時、總次が同役の士出來り、今は彥根藩の布衣は、皆京都の奈里傳兵衞、七里藤左衞門兩人の中へ申付くれど、大中小、好みに應じて作り呉れ、代金一兩を拂へど、牛の舌も添ふるなりとの事に、さらばしかせんとて、總次も京都に布衣を誂へしとなん。其後文政年中に、ある人はこの事を語りて、可醉が布衣役となりし時と、總次が又同役となりし時と、其間長くとも二三十年なるべし。さるに世の奢りに移り易きは、實に驚くばかりなり。さて今は布衣とても、皆きらびやかなるを好みて、一兩か程のもの持つ人はあらじ。總次の時より比ふれど、又一段の驕奢に移りきと歎ぜしとかや。可醉、當時の風尙、淳朴の氣質、欽すべきにあらずや。

酒井忠世の襦袢

酒井雅樂頭忠世、或る年夏の日、殿中にて襦袢汗に浸みしかど、脫ぎて一室の手摺にかけぬ。その襦袢、つぎつぎにて甚見苦しかりけれど、忠世歸邸の後、老女を呼び、斯くと語りて、いかなれぞとて人の見る目もあれど、今少し見宜きものに改めよと云ひしに、老女は、容姿を正し、こは我君の仰せとも覺えず。君にははや奢りのつき給ふと覺えたり。前年戰亂の時など思召し給はゞ、左樣なる事のたまふ事なかるまじとて、終に舊の儘にて改めず。忠世、亦再び襦袢の新調を口にせざりしとぞ。嗚呼、忠世一城の主にして斯の如く、老女聰慧主を諫めて新調を肯せず。忠世亦其忠言を容

れて晏如たり。而して今や如何。上流の士は云ふ迄もなく、下賤匹夫の輩に至る迄、錦衣只是れ誇稱せんとす。痛嘆何ぞ堪へん。

酒井忠質の綿服

酒井修理太夫忠質は、若うして學を好み、江戸の別邸に校舍を建て、、藩中の子弟を學ばしめ、又武道にも心懸厚き名將なり。奥方は、京都久我家の息女なりしが、其婚姻の始め、忠質老女に命じ、奥方用として、木綿の衣服數種を調へしめき。老女、其故を伺ひしに、忠質曰、我等儉約を專らにするは、江戸在處大勢の家中を養育し、公儀の御用を滯無く勤め度存心なればなり。されば我も常に綿服の外は着用せず。我妻ならん者、同じく綿服にて何の不可かある。萬一之を辭まば我妻とするに恥づ、速に破談すべきのみと。かくて婚姻の當日も一同綿服なりしとぞ。忠質、諸侯の身を以て勤儉斯くの如くなりし也。

瀧川一益の單衣

瀧川左近將監一益、關八州の管領として、信、武、上州。其他の國々を責降し、勢威隆々たりし時、一日、諸侯一益を其邸に訪ひしに、一益、侍臣をして接待せしめて曰、只今將監着用の衣服洗濯して未だ乾かざれば、暫らく待たさせ給へと。一益、織田家の宿將として、鬼柴田と聲望を等うす。而して夏日彼は、只一領の單衣より所有せざりしなり。

紅梅軒

友人、長澤參川、性紅梅を愛し、書齋に名づくるに紅梅軒を以てし、事を諸友に寄せて、歌に、詩に、はた文を徴す。友人、清瀬深山庵、この頃參川が需に應じて、紅梅軒に寄するの一文をものしき。左に揭ぐるもの、即ちこれなり。

傷春軒主人　識

深山庵

縣居の翁は、梅を愛し給はざりしとかや。我先哲にも梅を喜ばぬ人ありけり。常に宜く、雪中の奇芬は愛すべきが如しと雖、大凡、物は春に會ふて生育す。其獨り魁けたるは利口ぶり、功名ぶりて、面目寧ろ惡むべ

し。『うら／＼とのどけき春の心よりにほひいでたる山櫻花』。かくの如くにして始めて可なり云々と。こは一理ある言の葉なれど、さりとは餘りに、理に偏りし癖言なりかし。凡て物を愛すると愛せぬは、情にして理にあらず。情の往くところ、必ず理をもて抑へんとならむ、世は蠟を嚼むが如く、味ひも趣もなきものとなり果てん。我は、花の前に在りては、たゞ愛する情ありて、理を思ふの暇なし。梅もめでたし。櫻もめでたし。菫、たんぽゝ、躑躅、卯の花に至るまで、皆ほど／＼につけて、めでたからんものあらんやは。されど、めでたきが中にもめでたきは、櫻にもあらず、桃にもあらず、っの利口ぶり、功名ぶりと難ぜられたる梅にこそあれ。その枝のこゞしく、くねりたる。花の姿の清らかに、みやびたる。殊にその香のくすしく妙なる。すべて神々として、塵の世のものとは見えず。

　　月雪を花の姿によそほひて
　　　神代ながらに匂ふ梅かな

色をしも月といはんに、月にあらず。雪といはんに、雪にあらず。香をしも栴檀伽羅と、名木のかぎり取出でてたとへんに皆似つべうもなし。實に百の花の司とぞ。

　　花といふ花の色香もなにならし
　　　梅にたぐへんものぞおほえぬ

昔は、王仁、韓人なれど、御國ぶりに『難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春邊と咲くやこの花』と歌ひけん。その、

　　難波津の昔もかゝる香に匂ひ
　　　聖の御代の春にあひけむ

と思はるゝさへ、ゆかしく、なつかしきゝはみになん。但馬なる、一道長澤ぬしは、わが如く梅を喜ぶ人にして、書讀む窓の軒に、古き紅梅の一と本を植ゑ、月に雪に、その趣をめで喜び、この年頃みやびの友垣にこひて、歌に唐歌に山なす許り積りしを、尚、足れりとはし給はで、我にも歌よみて送れと、文して宣はすれど、

友つどひみやびのかぎりつくすらむ
　そのくれなゐの梅のしたかげ

と思ひやるのみにて、見ぬ紅梅軒のけしき、いかならんを知らねど、たゞ思ひよれるまゝ、怪しき言の葉をかいつらねて、かへり言とはしつ。

玉露の香に醉ひて得ねぶらぬ夜、この文をかきをはりて、不圖頭を上ぐれど、宿の主人のすさびにや、床の間の瓶に挿したる梅の、あやしきまで懐かしき香を送るに、

梅が香の枕にかよふひとり寝は
　あやなく人の戀しくぞある

知れ切たる事

石南子

手をついて歌申し上ぐる蛙かな」といへど、蛙鳴なりとて、さげすむ心も起さず。「常もなき夏の草葉に置く露を命と賴む蟬のはかなさ」などきけど、蟬噪なりとて、うるさくも覺えず。世ははかなき者と知りながら、方丈記などよめど、その事の今更に感ぜられ。尊氏は惡きものと知りながら、正統記などをよめど、いよゝ憎く思はる。げに、むさくろしきものも、歌人の口に上れど、うるはしくなり、知れ切つたる事も、能文家の筆に上れど、珍しくなるものなり。

明治の聖代に生れたるものは、片山里の小供まで、學校に出でゝ、世の事、人の道の敎をうく。されど、わづか八九歳の女子にても、親樣には、いかにかすべきと問はゞ、孝行をせねばなりませぬと答ふべく、女の道はと問はゞ、操をつくさねばなりませぬと答ふるならん。まことに、よく知れるぞうれしかりける。されども漸く進みたる學校の學生に向ひて、孝貞の事をとかんか、そはよく知れりといはん計りの顔するものなきにあらざるべし、いな極めていふを憚れども、かくの如き人、或は少からざらん。これぞも〳〵、貞節の

說の數學より輕きか、孝行の道の裁縫より重からぬか、あらず、人倫の大道、この上のことやあるべき。たゞ常に藥局にある藥劑師は、藥の量を過さでは、服藥の効なしと聞きつるが、それとおなじく、これもまた餘りに、大切なる事にて、常に聞きなされて、其の語の感受力少くなりたるはあらぬか。學校にて、修身科に興味をもつ生徒が、その學科の價値の、限りなる高く、限りなく深く、上なく大切なるに、割合はぬ如く人のいふは、そもいかに、聽く人の罪か、諭す人の足らぬ所あるか。

なべて說く人も、知れ切つたる題にては心躍らず、文かく人も、知き切たる事を書くを好まず、まして聞く人、讀む人、知れ切つたる事には心を傾けず。これまことに、新奇を好む人の情として、無理ならぬ事ながら、思へどなか〳〵に危き事なりかし。

人はその長所において、失敗すとは、古よりいふことなるが、おなじく、人の過ちは、知れ切たる事に、いと多かるべし。疑はしき事は、人にも問ひ、自らも考へてなせども、知れ切つたる事は、始よりおなどりてなす故なり。學生が、清潔を好むといひ乍ら、書物もて机の塵を拂ひ。嘘言せずと誇れるが、敎場にて下調せざりしうそを、計らずいふが如き。或は人に約束を違へぬものが、小供をど、口さき計りの菓子にて、賺すが如き。火事は恐ろしと知り乍ら、煙草のすいがらを、おろそかにするが如き、みな知れ切つたる事に、過ちの種のあるにあらずや。

改良といひ、發明といふも、おほかた知れ切つたる事に多し。三四十年前まで、男子が髷を結ふは、あたりまへの事となし居けれど、斬髮の令はいたく反對をうけたるなり。今日の斬髮、また改良することなからざらんや。女子の鉄漿、眉剃またかくの如くありしなり。よその國に、林檎の地に落つるが、あやしといひけるを、狂なりと笑ひしも、鐵瓶の湯氣の上るを、あやしみし人を、愚なりと嘲りしも、思へどおなじく味

ある事なりかし。

されど自らすて、自らそこなふ人はともかくも、苟くも世を益し、人を導き、自ら修めんとするものは、すべて世の人の、知れ切つたりとする事に、ふかく志をひそめて、よく研究せざるべからず。知れ切つたる事を書きてしかも、珍らしく感せしむるは、能文家のわざなるべく。人の聞きあきたる問題をとらへて、面白くきかしむるは、能辨家の才なるべく。わりふれたる物事を詠みて、しかも人の心の奥底にひそみたる琴線に觸れしむるは、まことの歌人の徳なるべし。己れは、じつにかくの如き人の、多からんを望むなり。高遠幽玄の理、などか知れ切つたる事の内にわらざらんや。

女人の氣の毒

金津常十郎

客曰、世の諺に、子を産まざる女は、死してのち、其の罪を以て、燈芯にて、竹の根をほらせ、鬼、其のわたはざるを責めて搖打といへり。此の事佛書中に於て出所ありや、否哉。

主曰、其の事は、世上、專、佛者のいふ言なれども、予、普く、佛書を見ざるゆゑ、其の出所をしらず。然れども、血盆經のうちに、

爾時目蓮尊者昔日往二羽州追陽縣一見二一血盆地獄一闊八萬四千由旬其地獄中有二一百二十件事一鐵梁鐵架鐵鎖但見下南閻浮提女人無レ限披二頭散髮長一枷扭手在二地獄中一受中大苦惱上獄主鬼王一日三度驅二勒罪人一飲二其汚血一此時罪人不レ甘二伏喫一遂被二獄主鐵棒搥打一哀聲遠徹目蓮悲哀問二獄主一言不レ見三南閻浮提丈夫之人受二此苦報一只見三許多女人受二此苦痛一獄主答レ師言不レ干二丈夫之事一只是女人生產之時血露觸二汚地神一將二穢汚衣裳一溪河洗濯水流汚漫悞諸善人取レ水煎レ茶供二養諸聖一致レ令二厭穢一天大將軍劄二下名字一

附ニ在善惡簿中一後百年命終之時受ニ此苦報一

此の經文にとけるがごとく、子をうむ時のけがれによりて、死後血盆地獄に落つるといふなれど、かへりて、子をうまぬ婦人は、死後の所、佛より御賞美もありて、はやく善所へ落付さうな事なるに、公がいひ給ふ諺のごとく、子をうまぬ婦人も、又、其の罪を責らるゝ事あらぞ、女人はどちらの道にも、こまつたものなり。可笑々々。

「文外註評」我佛者に聞く、南閻浮提さは、我朝のことなりさ。實に、佛教は、虚僞を吐て、方便とす。此の經文も、亦、虚言なり。我神國女よ、佛說に迷ひ給ふな。

才くらべ

蓬生屋女史

一休和尚の檀那に、何屋とか云ふ扇屋ありたり。もとはいたく繁盛したるものなるが、主人死し、妻死し、殘るは老いたる夫婦と二つぞかりなる孫女にて、家計やう〳〵立たずなり行きたるに、分散せんとて、一日一休の許に來り、家の事など何かと語り、分散するよしを云ふ。分散せんと、それはめでたきことなりと一休とぼけ云はるゝに、老いたる者は顔を見て分散が何めでたからん、分れ散りはべるが何めでたからんとあるに、めでたし、めでたし、翁や、何にもあれ家さへ立ぞよきにやあらん、して孫女は幾つぞ二つなりと、何はとも今晩養子に行かんとあるに、和尚樣、何をとぼけたることを仰せ給ふ。さやうの氣樂なる事をきくべき時ならず、何にまれ今夜養子に行く、何の用意もいらず、只提燈を出しおけとあるに、とぼけたる事を幾度云へど、和尚はくりかへすのみ、何とも分かねど、何にまれ一休さまの仰せらるゝ事、今宵、金子を持てこられ、分散せずともすむにやと翁夫婦語りあひてまつ所に、一休はぼく〳〵と只一人來り、翁よ養子に來れり、今日より此の家の養子ぞ、して孫女は[illegible]何處に居る、オー此處にか、よくねぶれるよ、愛らしき子、翁大事にせよ、翁提燈出せ、一寸近所を廻りて



んとて。弓張ひつさげ、之は扇屋の養子でござる。何分たのみ申す、家は年寄と子供、何事もれたのみ申すとて、向ふ三軒兩隣りに觸れあるくに、孰れも不思議のおもひ、狂氣の沙汰と笑ひいぶかしむほどに、一休は其の家に歸り、翁よ今晩は寺に用事あれど、まづ歸るべし。明日來んほどに嫁を大事に賴みますとて、ひとり云ひ、ひとり合點して歸りゆくに、翁夫婦は金子にても持ち來りて助けくるゝかとたのみ居りしに、この怪しき事たゞあきるゝばかりなり。さて明朝一休さう〳〵尋ね來れり。翁や、サー今日より養子に來りたり、嫁はたつしやか、さて〳〵、硯はあるか、墨を出せよ、して扇をもある限り取り出せよとに、翁はふざけたる

ことゝは思ひながら、云ひつくるまゝ取り出すに、一休今日大書すと大きく紙に書きて、軒に張りつけしに、人々之を見、日來頼みても書かざる一休が今日は大にかゝるゝよし、十人、百人、はては千人萬人傳へ聞き、傳へきゝ、皆書き貰はむものとて、家の前は人の黒山を築きたり。一休筆を採りて、はじめは一字二字認め與へ居りしが、遂には筆も手もまはらず、一の字をひき、丸を書きてたゞとらするに、人はよろこびて持ち歸り、皆志の程を捻りておきぬ。之を以て扇屋の家、再び產を興したりとなり。才あるものは何につけてもめでたきものなり。

禽獸の言行

田端の隱居

支那の北夢瑣言に、不肖の子三たび變じて其の家を亡ぼし、第一には父の死後に先づ蝗となりて田を賣り、莊を鬻ぎて食ふ第二には、次に蝨となりて書物を賣りて食ひ第三には後に虎となりて譜代被官を賣つて食ふと云へり、この頃ある學者のはなしを聞くに、幼きより慧敏ある學者の弟子となりをりしが、其の師、其の子弟の才學をよろこび、拔んでゝ誠の子となさむとす。其の子もまた之を諾し、遂に其の師の娘を妻としたり。あはれ其の折り師は誠にめでゝ、其の子弟を誠に子としたり。子が心は如何に、彼れは其の師を慕ひ、其の心をよろこび、其の女を愛して之を諾せしや、知らざれど、其の人かつて、人に語りける事ありとかや、己れは彼の家の養子となるは好まざりしかど、家に數多の書物あり、其の書のめでたさに養子となれりと。あはれあはれむべし。父の師死して、母を養はず、妻をはぐくます。遂に家をひさぎ、書を鬻ぎ、母を捨て、妻子を捨て、他に美くしき庭園をつくり、花を植ゑて朝夕ながめしが、はては虎となりて、官をもとられて西の果てに行きたりときく。これ學者の中の蝨なり。

家庭の花

後篇（承前）

小倉山人

昨夜飄然霞村が家に天降りし花嫁御、名はお千代とて芳紀は二十歳の上を三つ、何處を何様と取立てていふ程の美人にはあらねど、先づ目に附くは七難隱すといふ色にて、目元に心の優しさを現し、肉豐にして眉の間も蹙らず、女性はこれが何よりの笑顔常に麗しく、何とは無しに福の神の跡を慕うて來さうな顔、身の丈も適度にて、着物の着方も下品ならず、烏の濡羽色ともいふべき加之も僻なき黒髮を、わたしの身は御縁あつて霞村様に差上げまする、お受取は依つて以つて件の如しといふかの如く目立つ程の圓髷に、水も滴らんばかりに結うて、おもひ燃ゑ立つ緋鹿の子の手柄さては鼈甲の櫛笄など物一言打言ふにも相映じて美しきに、人知れず薄化粧さへして在れど、嫁御振又一際引立つて、お釋迦様でもいやとは仰せられまじき姿、無邪氣一遍上人の霞村でさへ、殘雪ほど白き手を尋常につかれ、愛嬌滴る黒目勝の目に凝然と垢だらけの顔視られつゝ、此方の人と呼ばれては、嬉しきと恥しきとに何んじやの返事は勿体ないやうな氣持して、軀幹の痺るゝ事もありけり。

これまでの霞村の家庭は、樹の間すつきり透通り、霜寒ければ鳥も啼かず、北風枯木の枝を鳴らす冬の野邊より淋しかりしが、お千代といふ顔も心も優しきが突然姿を現してより、霞村が家庭は一陽來復、俄に紅白の花いろ〳〵咲溢れて、霞棚引き百鳥來鳴く春の野邊より賑しく成れり。昨日までこそ此の門のみは避けて通りし酒屋魚屋八百屋などまで、お千代が姿を瞥見しては、行きかけし足を止めて裏口に迂回り、御用はござりませぬかと云ひながら、お千代の目立つ姿を眺め、これまで影も見ゑざりし簞笥長持其處邊狹しと在るを見ては、いづれも心に打點頭、その翌日よりは一朝も素通せず、必ず一度顔を出して、御用を承はらぬはな

し。又一方には、昨日までこそ現在門を過りながらも、霞村近頃は何うして居るぞと、門から聲もかけざりし友達、この度恩師の媒介にて、よき嫁迎へ得たりと聞き、祝ひを機會に我れも〱と來て見れど、世の噂にも立勝りて、これは立派な細君なるが、あの手に酌みたる茶の一杯も喫まむやと、その後は頻々足を運べは、霜村が、家庭は日に月にと彌榮に榮え行くのみ。これも愛嬌の心に富めるお千代を妻に迎へし一徳去りとは女は男に勝れし一種の幸福なる特性を持てるものぞ。去れど霞村は何んとやら、俄に長者にでも成つたやうな心持。當座は全然これ唯一場の敢果なき夢のみ、やがては花のちりしが如く覺むるならんと、喜びも極まつては却つて悲しく、うつら〱と一日二日は唯夢心地にて送りけるが、夜中にふいと眼を覺し、視れど我れとれなし蒲團を敷妙の枕ならべて、今を滿開の花とも見るべき美しきが、我れを良人と頼みつゝ優しくも眠を結べる顏を視ては、勃々と心動きて、早く立身出世せんとの勇氣も興る。これも女の引力ぞかし。

霞村が身に取りて何よりの幸福は、この度迎へし妻のお千代が心意氣、その顏の優しきが如く、心まことに温順にして、夫の意に一寸戻らず、老母の心に一分違はず、夫いかに貧しくとも、そは我れ傍よりこれを助けて富すべし。老母何程邪見なりとも、わが身を捨てて仕へんには、何時かは打笑み給はめや。われは桐生霞村が妻、わが身の死す可き所はこの家、假令や熱湯を浴ぶるが如き苦を見るとも、貧しきこの家を程なく富せて、夫を社會の暖き所に出し、唯一人の老母にも、有ゆる孝行の道を盡し、それにも愉快にその日をれくらせ、これにも滿足させ申すがこの身の役目、わが一命を無きものにして、倦まず撓まずこの事にあたらむ、何時かは一家の打集まりて、打笑む時のなかるべき。樂し嬉しと氣を引立て、この家に來ける翌朝より、未だ東雲の空暗きに起きて、疊は斯くまで破れた

るとも、わが手業の及ばん限り、先づこの家を清めんと、心がけたる襷の緒の挺然として、女一人の殖ゑたるからは、人の目に附く臺所より、鏡のやうに清めんと、老母が眠の覺めぬやうに、開閉不自由なる形ばかりの戸を一枚開けて、臺所の樣子を見れば、苔靑々たる古手桶の今や毀れんとしたるが一ッ、外には縁の欠げたる古鍋、これも欠げたる茶碗三ッ四ッ、貧乏風に吹轉がされて、彼方此方に散りたるのみ。外には釜一ッだも無き始末に、豫てそれとは聞きつるものから、去りとは又意外極まる貧しさ加減に、お千代は一向おどろきつゝも、取形附けて清潔に掃除し、雜巾さへ幾度かゝけつ。次には御飯にかゝらんと、米の在所を探せども、見當らぬも道理にこそ、霞村が家にはその日〳〵に買へるなり。斯くと知らねばお千代は窮し、いかにせましと思案に暮れたり。打から霞村目を覺し、意氣惡げに出で來り、アヽ清潔に成つたな。お千代見るより襷を外し、板間に雪のやうなる指を突き、お早う

ございます。霞村は最も訥辯なる口調にて、餘り早過ざるじやないか、未だ東の白んだばかりじや。お千代は微笑み、イヱ最う左樣でもございませぬ。お手水お遣ひあそばすか、お湯を差上げませうと云ひつゝ、何やら頻りに見廻せば、霞村は早くもそれと悟つて、イヤ手水盥ならばない。輪の切れたまゝ投つてあつたが老母樣が薪の代用に燃してお了ひなすつた。お前は嘸かし困つたであろ、未だ遣はずかと義遣ふ優しさ。
お千代はさも〳〵氣の毒さうに、イヱわたくしは最う濟みました。柄杓でやつたのかな、私も一杯かけて貰はう。お千代は生れて以來、柄杓のみにて手水つかひしことは今朝が始め、若き身なれば情なくも感ずべく、將可笑しくも思ふなるべし。されどもこゝは夫の前、泣かれもせず笑はれもせず、萬事忍へて畏まり、それではおかけ申しましやうと、柄杓取りて好き程に沸きたる欠鍋の湯を滿々と汲めば、わづか鍋より霞村が手に渡るまでの道中筋にて、柄杓の彼此破れしために、可

惜やわづかの燃料もて千辛萬苦の結果、辛うこれまで沸し〻湯の、半分は漏りて空しく廢ればお千代は思はず眉を顰む。霞村も亦おなじ心にこれを見て、あ〻勿体ないな。柄杓が太く成つて居るので、半分は癈つて仕舞う。おつと待つたり、此奴は中々骨が折れるぞ。併し好い氣持じや、湯で洗うと洒灑して。何うじや、お前にもかけて進げうか。イエ最うわたくしは。宜しいかね。はい、ア〻快い氣持じや、それでは吾儕に最う一杯。併しお湯はと差覗けば、まだ澤山にございますサアお手をお出しあそばせ。進げますよ。霞村は直と手を伸し、湯を受取つて顏をぶる〱ぶるりと洗ひ、ア〻快い心地じやと云ひながら、あわたゞしく兵兒帶の端を解きて、これを手拭に代へんとすれば、お千代は恟りして膽を潰し、良人これでと云ひながら、帶に挾みし手拭取つて手早く出せば、なに此れで澤山だと云ひながら、アレまあ到當拭いて了ひぬ。

この事終りて後、お千代は幾度か口籠りて、あの良人、お米は何處へ、霞村は仕舞ッたといふ擧動にて、無かつた、昨夜はころりと忘れた、今直に行つて來る。薪はあつたかね、彼の薪も、とお千代は顏をぱつとする。ム〻それでは一緒に。何うも氣の毒千萬じや、と言ひつゝ少き風呂敷片手に出かくれば、お千代は跡から追附きて、良人わたしが參りまする。霞村は一寸考へて、イヤお前には勝手が知れまい。今朝丈は吾儕が行く、直だ〱と云ひながら、表を差して大股に急ぎ行く。

夫の後を見送りてお千代さても、可愴しき境涯かな。切てはこの苦ばかりにてもこの身に引受けまゐらせなば、專ら筆に從ひ給はん。さらば、自然その名も世上に知られ給ひ。家計も漸々豐に成りなん。斯くまで貧しきが上に、その日〱の煮炊の事にさへ關らひ給ひし此れまでは、他に事繁き男の身のさこそは、など思ひつゞけて、夫の歸るを待ち待てり。や〻ありて夫霞村は、裏口より差覗き、風呂敷に何やら囲く、包みし物

を、顔を赧めて羽織の下より取出し、それでは此れをと差出す、お千代受取り觸れば米なり。さては日用の米すらも一度には取られず、豫て噂に聞きつる一舛買など爲給ふよ、益々傷々しき事かなと、氣も黒髪のおもひ亂れて、米淅桶の一ッ見えねば、例の欠鍋に米淅お千代、おのが心も南京米を但に砕けて心細し。折から足音烈しきに、お千代表を差覗けば、片手に薪の束を提げ、片手には他所の見る目も荒繩にて縛りたる澤庵一本ぶらりと提げて、泥板づたひに戻り來る。お千代飛出て受取りて、良人はそれ入りまする。ナニ馴れぬ間は辛かつたが、既うこの節では平氣なものだ。人は貧には馴れ易いこれ丈謡が進歩したならばな。お千代は返す詞に窮し、おもひ切つて落つる涙を烟に紛しつゝ、御飯を炊きて煨を移す古火鉢も、主人と倶に浪人の樣無しなり。その側に轉りたる倶けし土瓶に水を注し、それのことし沸く頃は、何時の間にやら新しき手水盥を始めとして、柄杓その他の世帶道具に、味噌や煮豆や菓子その他、老人の悦びさうな物ばかり、夫にも知らせずに買集めつ、今や老母の目覺し給ふと待受たり。

初冬の朝日窓より差込む頃老母寐飽きて眼を覺せば、お千代駈寄り會釈して、老母樣は早うございまする。老母は碌々返事もせず、寐床を脱けて便所に行けば、手早く床を形附けて、掃く洒く火鉢を中に出す、老母ぞろ〳〵出で來たれば、サアお遣ひあそばせと、手水のお湯を汲んで出すこれにて、お拭きあそばせと、手拭を取つて出す。手づから髮を掻いてやる。火鉢の側に案内して、茶を酌んで出す菓子を供ふる。それが了れば後は御飯の段となり、未だ何分にも此方のお勝手に馴れませぬ。のでお膳の在所が知ませぬ。失禮ながら何うか此處で、召あがつて下さいましと、三杓子半に御飯をよそひ、形ばかりの盆に据ゑ、先づ母親にすゝむれば、老母は如何にか悦ぶならんと、霞村は傍よりおもひきや、皺の中より眼球を剣出し、お千代の顔を

屹度睨んで、アヽ始めから癪に觸る口の利振、勝手の知れるも知れぬもない掌ほどのこの家、一目見て無ければ膳は無いのだ、諸道具整然と不自由なう揃うて居るはお前の里のやうな物持分限者の事で、こゝのやうな貧窮人の家には膳一枚はおろかなこと、お釜一ッも前から無いのだ、お前はこれを得心で來てくれたと聞いて居つたに、さては、不承知であつたのか、と例の苦々しき口調身振で、先づ突かくる一番鎗の穂先鋭し。

（後篇未完）

梅の下風（廿）

白魚女史

越前の守は又しづかに詮議をかへられ、こや傳吉、そちは江戸へ奉公中、専なるものと通じ、伯母お早、妻おはなるものを不法にも逐ひ出したるよし、さやうか、傳吉涙のみなぎりて直ちに答へも得ざりけり。こや傳吉、眞すぐに申立い、一体伯母とは父方か母方かと重ねて問ひ給ふに傳吉はやう／＼涙をかき拂ひ、伯母は母の　妹に　候て、若き時より身持惡しく、家出して何處にありしか知らざりしを、私　母なるもの苦にやみて最期の折り、伯母のことを語り、如何にもして尋ねあてゝ、我これもひてはぐくみ呉れよとのことと、私も身にしみ／＼悲しく其後江戸表へ飛脚をたのまれし際、ゆくりなくも伯母母子に行きあひて伴ひかへりその後、村人のすゝめにより、其女花をば妻とし、共に朝夕を送るもの、家もと貧しく、心のまゝに二人を養ふこと能はず、かくては母の遺言にも戻り、且は父の苦にやみし身代をも取り返さんものとて、江戸表へ奉公中、妻は、私從弟庄次郎と忍びあひ、私がお専方へあづけこし金子をもとりし事分明したれば、妻をば其儘庄次郎に遣はし、伯母は此方にて養はんか、さりとも女方へ行かるゝやと問ひしに、女の方へ行かまはしう申　候まゝ、私は母の遺言果たさぬも口惜しく



候ひしかど、何事もその心に任せんとて、金子七十五兩を養育料としそへて、彼方に渡し候は、其處なる喜平太平も存じ居り候事にて、何にて追ひ出す如き不法を致し申さん、此儀人々に御尋ねをと云ふに、越前の守は、喜平等二人を見られ、傳吉の申立に相違なきか、信を申立いとあるに、二人はそれに相違なしと答へ奉る。して、百五十兩と申せど大金なり。さるをゆかりも、何もなきお專に何とて預けたる、いぶかしきことなりと越前の守さまの御問ひに、傳吉は云はんとすれど言葉つゞかず、お專をかへり見て、其方よりくはしく、申立てよとあるに、お專、夫に代り、ありし事々申立けれど、越前の守は、なほ喜平等兩人を見、汝等、傳吉お專の中を取持ちしと云ふが僞りにはあらざるかと問はせ玉ふに、毛頭僞りには候はずと答ふ。さやうにては傳吉、憑司を恨む處はつゆあらぬやうなり、して傳吉暗夜何とて提燈もなく猿島川原へは行きたると問ふにそれは、先刻も申し上げし通り、卜者をたのまむとして夕刻參り、道に知り人に行きあひ、共に人を尋ねて夜半深くなり候とあるに、其の知己とは何者ぞとの重ねての問ひに、源次郎なるよしを答ふ、其日は其まゝ白洲を閉ぢ、あくる日源次郎なる者さへ召喚し、汝、傳吉と知己なるや何處にて知りしと問へど三浦屋抱へ空蟬と云ふ者と契り、通ひし折り、傳吉其處へ奉公中なれど知己となりしよしを申す。して、猿島川原へ行きしとあるが信實か、して、傳吉に行き合ひしかと問ひ、さて何とて其の河原へ行きたるかを問はせ給ふに、空蟬の親なる者越後なるよしにて、いつか其の親に遭ひたきことをかね〲云ひをりしが、此度年明けたるを幸、國を尋ね給はれとあるに、不便におもひ、伴れ行きしに、途中にて、雲助にかどわかされしを求むる折りから傳吉に遭ひたりと答ふ。して、其空蟬は如何せしとあるに、明朝さけど川岸の柳に女の首の流れかゝるよし承り、行き見しに、空蟬の首なりしかど、おどろき悲しめど、せんすべなけれ

た、近隣の寺院を頼みて葬り候とあるに、さらぬ猿島川原の死骸の女は其空蟬にて、男は雲助にもやわらん、こや馮司、猿島川原の死骸其方が忰夫妻とは分らず、判然たらぬ者を以て、罪なき者を罪におとし、あらぬ事を申立て、上に訴ふ不屆至極なりと仰せらるゝに、之れは、上樣の御詞とも存せず、如何に同じ衣服を着すもの候とて、襦袢より下着までしかも、帶、履きものまで同じなるもの候べき、今少し、御明白なる御裁決を願ふとたけ〴〵しき詞に、越前の守ははつたと睨まれ、だまれ、馮司、己れ惡事をなし、村長を辭はれ、恨みなき人をうらみ、しかも猿島川原にて男女二人を斬り、忰夫婦と僞り罪なき人を罪し、なほ上の裁決を明白ならぬとあざける憎くき曲者、彼に繩をかけいあとるに、傳吉が辯口をれん取り上げ候て、私を罪におとし給ふは恐ながらちと片手打の御裁判かと存じ候と、なほもたけ〴〵しき言申立つるに、片手打の裁判とは何事ぞ、無禮なり。さやうに强情を申し立てゝ、萬一忰夫妻が江戸に居らむ何とするとの仰せに、馮司ぎよつとしたれど、なほたけ〴〵しき心に制して、死にし者が生きかへるべき道理は御座りませぬ、のう、お早、全く庄次郎花に相違はなかりしな、なほも誠をよそはんとするに、何とて我が子を見違ふべきとお早もまた空涙をこぼす。だまれ早は此の方にて詮議する、してお早とは何ぞ夫婦か、どうして夫婦になりたる。娘が夫婦になりしゆゑ、わたしも、わたしも、馮司の妻になりしと、おろかなと白洲は大笑ひ、何はとも狂女を引き出せとあるに、馮司夫妻はぎよつと、思はずも顏の色をかへたり。





文林

春鶯呼客　　鍋島直大

日にそへて聲もひまなく聞えけり
とふ人れはきやどのうぐひす

行路柳　　高崎正風

玉鉾のみちゆくそでにかゝるまで
しだりやなぎのしだりける哉

千代野尼　　竹屋光昭

桶にくむ水いたゞきにそゝぎつつ
空しきつきにみをさとりけん

海邊春月　　前田利鬯

春の夜の月はればろにかすめども
よるなみしろしたけしむの浦

遠村柳　　長谷信成

きぎすなく野末のさとのやなぎ原
霞がくれにうちなびきつゝ

和氣公　　宮地嚴夫

君ありて傳へざりせば世をまもる
かみのみこともかひなかり劔

庭若草　　阪正臣

春のくさこくもうすくも萌いでぬ
よつめ垣ねのかなたこなたに

早春柳　　植松有經

打わたすとほ山もとのやなぎはら
かすみもなびく春はきにけり

海邊春望　　小出粲

ほむしらに集ふつむめの聲はして
ふねしづかなる春のうなむら

月帶霞　　千葉胤明

今すこしかすみをいでよ春のつき
たのづからちる花も見るべく

庭雪　　島多豆夫

庭面にふみたるあとの殘れるは
　雪みていにし人にやあるらん

藤原百川公　　荻原嚴雄

もも川にうつらざりせは朝ひねの
　光も世をてらさざりけん

徑　　遠山英一

横たはる石もありけりおのづから
　ふみ開きたるさとの小みちに

春月　　岡部譲

おぼろ夜のつきに心もあくがれて
　そゞろあるきに更かしつる哉

飯尾傳右衛が妾　　佐々豊水

くちなしの花の色よりうるはしき
　こゝろのかゞみかゞやきに鳧

今年の一月の末つかた松橋の里なる敎子の
もとを訪けるに舊曆の十二月なりとて一月
のことは夢にも見ずといひ出つれど

仝

大御代のみおきて守れたちかへる
　としのはじめぞ月のはじめぞ

ゆめよりも現にまもれおほ御代の
　おきて正しきとしのはじめを

春雪　　島宮太郎

わかくさの下もえいそぐ春の野は
　ふれども雪のつもらざりけり

松殘雪　　三輪義方

わけくれど雪こそのこれこまつ原
　おぼろ月夜もかげさむきまで

おたふくといへる女のかた　　足立正枝

高からぬはなこそよけれあた人の
　うらみの風もふかじと思へど

折梅　　酒井喜雄

たをりきてかめにさしゝは鶯の

今までなきし梅にぞありける

倭姫命　蜂須賀随子

いすゞ川齋きそめたるそのかみの
影ながらこそにごらざりけれ

溪梅　前田朗子

あつ氷とけてなかるたにがはに
影をうつしてうめさきにけり

月前霞　税所敦子

青柳につきはかゝりてあしがきの
となりも見えず霞む夜半かな

垣若草　西四辻茂子

我かどのかきねにもゆるわか草の
みどり日ことに色まさけり

窓前梅　松平健子

鶯はまたなかねとも昨日けふ
まどのうちとに梅かをるなり

道臣命　小池道子

しこくさをかり拂ひたる跡とへど
嵐もわらふこゑきこゆなり

始聞鶯　鶴久子

わが庭に去年より遊ぶうぐひすの
けさはつこゑをもらしける哉

都霞　中島歌子

行きかひのしげき都もうちかすむ
あしたぞかりはたつ塵もなし

大宮人の梅をかざせるかた　遠山いね子

宮人がそでにこめたるそらたきも
かざしの梅にうぞはれにけり

霞中雲雀　北島以登子

夕ひばりかすみのうちに聲はして
おちくる影もみえぬけふかな

孟母　南郷柳子

三度まで垣ねをかへておふしたてし
から撫子ぞ世々にはへる

煙草　　日野西廣子

中々に事わざしげきをりにこそ　しひてたゞこは吸まほしけれ

翠遠帆　　坂田泰子

ゆくふねのかたちは消てわたの原　眞帆のみしろく見え渡るかな

張良　　河村重子

橋のもとにれとしゝ履を拾はずは　くらゐの山にのぼらましやは

霞中梅　　土岐いく子

佐保姫のかすみの袖のほころびて　うめが香こぼす風ぞゆかしき

春曙月　　足立みつを子

あけぼのゝ雲も匂ひてさきつゞく　花のこのまにのこるつきかげ

浦の松をよめる長歌並短歌

酒井喜雄

駿河なる田子の浦わは　かたもよし渚もきよし　この浦に松のさはなる　この松は千代の色なる　其影をかゆきかくゆき　ふじのねを振放見れど　奇しくも高くたふとし　わたつみを打眺むれど　あやしくも遠く遙けし　この浦になみたつ松の　影踏みて行けども行けど　あかぬかげかも

ふじのねのふもとにつゞく田子の浦の　松のむらだち見れどあかぬかも

正誤

前號文林足立正枝氏の「都霞」の歌上句は、前々號「松上霞」の歌の上句を誤植したるにて、即ち「大路行く車の音も長閑にて」とあるべきなり。



雜報

●伏見宮殿下は、第十師團長として今姫路にませり。去る十三日部下御視察として丹波福知山に赴かせ給ひ、十四日は第二十旅團司令部に成らせられ、武裝倉庫等詳に御撿閲あり、終りて聯隊の將校集會所にて兵卒の麥飯を御晝餐として召させ給ひ、御食事了りて將校を集めて訓諭を給ひ、後酒肴を賜はりたり。十五日、工兵第十大隊、及、聯隊區司令部衞戍病院等の御撿閲あり。十六日雪を冒して舞鶴に向はせ給ひ、十七日及十八日は軍港御巡覽ありて御歸團ありたり。

宮の舞鶴に御滯在中は、佐々木繁三郎の別莊を御旅館にあてまゐらせしが、其際、繁三郎が養父眞平（七十三）母歌（六十四）を御前に召させられて、親しく姓名年齡などを御下問あり、斯く春秋の高くしていとも壯健なる事の嬉しさよ、麿も汝等が壽にあやからまほしければ何なりとも一文字づゝ書て得させよと、仰せられしに、老夫婦は、賤の身にして徒らに齡高きが故をもて親しく金枝玉葉の御前に進謁するだに家の爲め身の爲め死して榮ある面目なるに、御前にて拙き毫を揮はんなど、中々に思ひも寄らず、恐懼の情を御推察ありて然るべく上聞に達してよと、曾我御附武官まで縋り聞えしに、殿下はさのみ辭退する事かは、疾く仕つれとて御聽したまはざるに、老夫婦は謹みて墨すり流し、縑をのべて、眞平翁は『壽』歌姫は『梅』の一字を認めて恐る〳〵進獻しければ殿下は御滿足に思召されて、直ちに其の筆を御手にし給ひ『賜壽』の二大字を御染筆在らせられて之を汝に與ふべし、今は征途にありて印の所持なければ、歸團の上は直ちに小包郵便にて送り遣はんとて、曾我武官にまで御下渡ありしに、老夫婦は額つきつる雪の頭を得も擡げずして只管歡涙に咽びけりとぞ。

●伏見姫宮殿下　伏見姫宮禎子女王殿下は、先頃、御父の宮のわらせらるゝ播州姫路に赴かせ給ひたるが、去る廿一日は播磨名所のうち高砂、相生、別府、石寶殿等俗に四ヶ所廻りと云ふを御巡覽遊ばされたり。此日御供の衆は御牧家令の外に、八千子侍女は殿下の御手を取り、他に尙は三名の侍女御附添申上げ、御衣服は最と御身輕に扮裝たせられ鼠色小摸樣のれた召縮緬に、今紫の被布を纒はせられ、例の如く重ね草履を召され、御髮は銀杏返に裏地赤の丈け長を掛られ、總付の御簪を召せられたるやに承はる。

●宮中御歌會　一月御兼題は『雪中水鳥』にして、その詠進歌は左の如し。

雪中水鳥

雪深みあさるかたなくなりぬらんむれてかへりぬ池の水鳥　正風
山川の雪のしらなみうちかつきかもそなくなるさむき朝に　建通
寒さにはなれてうかへる水鳥もふりくる雪をうち拂ひつゝ　直大
水鳥のは風に雪のはなちりてあしへはろめく波のしらゆふ　千秋
雪白き池のみきはによるかものあをはは冬の色さしもなし　豊穎
さらぬたに寒きいそまにゐる鴨のあをはも白く泡雪のふる　眞賴

ふりまよふ雪をかつきて櫻田のみほりにあさる鳥もあり鳧　利鬪
一筋の川をのこしてふる雪にかものあをはもましろなり鳧　承昭
一つかひねふれるをしはふる雪の中にも春の夢やみるらん　詮
かきくらし雪はふれとも水鳥の浮へる池はうもれさりけり　光尊
ふる雪をはらひかねてや中島の木かけにつとふいけの水鳥　通善
氷りゐる池しろたへに雪ふれと鴨の青ははうもれさりけり　長說
あさほらけ雪ふりしきる池水にむれゐるかもの聲の寒けき　豊衡
雪深き池のみきはにゐるかもの氷のさこやさむけかるらん　公正
ふる雪をはらひなからに水鳥はいけの汀をたゝんともせす　光昭
かきくらし雪のふる江もをしとりの共ねの床そ暖かけなる　利器
池水の沖かきくらしふる雪をうち拂ひつゝあそふをしかも　忠敬
水鳥の拂ふはおさもたゆまなく雪ふりしきるひろさはの池　清
終夜つはさにつもる白雪をはらひわふらんいけのみづとり　美稻
をしのなく聲はさむくもきこゆなり雪ふりつもる池の汀に　國美
ふる雪につはさましろくなりぬれとつかひ離ぬ池のをし鳥　通治
ふりつもる上毛の雪をはらひつゝねむりかねたる水鳥の聲　長延
九重のみ庭の雪にあさつけてつみなきさまやいけのみづ鳥　雅之
枯葦のしたにねふれる水とりはふる白雪もしらすかほなる　治光
池もせに枯伏あしをたのみにてふゞきをさくるをしもあり　昰弘
あしかもの青羽もしろくみゆるまて雪ふりしきる池の面哉　隆元
なかしまもあしへも雪に埋れてさこしめわふるいけの水鳥　愛子
いつくにか鳥はうかはむ池の面の氷の上にゆきそつもれる　任子
水鳥のさむさをわふるこゑすなり翼に雪やふりかゝるらん　文子

ふる雪を葦のかれはにしのきつゝおきにはいでぬ池の水鳥　貝子
打拂ふかものつはさのおさはして雪しつかなるいけの面哉　敦子
水鳥のたつ音たに聞ゆなり雪しつかにもふけわたるよに　道子
かせさにて雪のふるよは水鳥もねられぬものかたち騒く也　いさ子
木枯はしつまりはてゝ白雪のふる江にさゆるみつさりの聲　好子
池水に浮へるよりもさむきかな雪うちはらひかものたつ音　いさ雄
ふりしきる雪うちはらひいけの面の氷らぬかたに遊ふ水鳥　三枝
枯葦もましろに雪のつもるよは浮れわびしさ鴨のなくらん　愛
人さはぬ庭のみ雪にわか池のをしこそ跡をまつつけにけれ　殿夫
折々はなにゝおさろくこゑならん雪しつかなるよはの水鳥　正臣
かきくらしふる江の雪になく鴨の聲はかりこそ埋さりけれ　秋香
ふる雪に氷のさこもうつもれてをしそなくなる岸の松かね　榮
ふる雪にうつもれのころ一筋のなかれをさめて鴨そ浮へる　有經
水鳥のかけはみねすもなりにけり雪かきくらすいけの中島　殿雄
水の面にふるはたまらぬ白雪を青羽にうけてかもそ遊へる　楓郁
あしかものあをばのうへにちりかゝる雪面白し庭のいけ水　正夫
大井河雪にもれたるいろはたゝなきたつかもの青羽なり鳬　長言
枯渡るあしまに眠る水鳥はふりつむ雪をしらすやあるらん　有義
吹雪するさか山おろしさにくれてかもそなくなる廣澤の池　行久
池のおもは雪やふるらん水鳥のはらふ青羽のたにす聞ゆる　昭子
よもすからふりつむ雪に水鳥のつはさをはらふ音そ寒けき　準子
池の面は雪かきくらしみねれさもをり〳〵さわく水鳥の聲　鋼二
中島に遊ひしをしもうかひけりみるまに深く雪のつもりて　胤明
水鳥のむれたつたひにしられけりいそ山まらにつもる白雪　英一
たちかれし汀のあしの下影に雪うちはらふかもそなくなる　義清
枯葦のふしさやいかに寒からん雪をかつきて浮ふをしかも　久子

●同（おなじく）　二月御兼題詠進（くわつごけんだいえいしん）

僧　忍向（月照）

西の海に沈みし月のかたわれは殘りて世をも照しゝものを　正風
つくしの海そこにしつみし白玉はよにうつもれぬ光なり鳬　建通
かの岸の花ささきけんさつまかたもくつさなりし君か心は　千秋
薩摩の海よろかた波に沈みけん月の船路のはてそかなしき　豊顯
國のため心つくしにしつみけん月かけ今もをしまるゝかな　利嗣
照月はそこにしつめささつまかた光は今もかゝやきにけり　承昭
東山いてにし月ははやひさのさつまのおきにいりにける哉　詮
國のためつくす心は清水のはなにまさりてうるはしきかな　榮壽
清水の音羽のたきのおさよりも君かいさをは高くそ有ける　隆崇
國のため心をちゝにつくしかた沈みし月のかけをしそ思ふ　利聲
さつまかた海にしつみし月かけも光うかへる時はきにけり　忠敬
さつまかた波にしつみしかけなれや都のそらの有明のつき　公正
なき人のたまかさそみろさつまかたなみまに浮ふ月の光は　清
曇なき心の月はよろつよにかゝみさなりててりさほるらん　美稻
敷島の道ふみなれし法の師もつひにさつまの海にしつめり　國美
四の海に身はしつめさも法の師のやまさ心は世に殘るらん　通治
さつまかたそこにしつみし月影は雲の上にそ顯はれにける　雅之
筑紫潟底のもくつさなりしみも高きいさをは沈まさりけり　治光

音羽山法のさもし火さやかにも殘るはきみかいさをなりけり　益弘
君かため心つくしの海原のもくつさなりしあとそかなしき　隆元
くもりなき御代の光にさつまかた沈みし月のかけそ浮へる　愛子
清水の音はのたきにてる月の海にしつみしあとをしそ思ふ　任子
國のため深く心をつくしかたみふれかおきの泡ときえつゝ　文子
國のため心つくしの海ふかくしつみし月のかけそかなしき　貝子
世をおもふ心の月も清水にすますなりにしかけそかなしき　敦子
大御代のひかりにあはてさつまかた波に沈みし月そ悲しき　道子
國のため心つくしの海ふかくしつみし玉の光りをそおもふ　艶子
世のためになかれ流れて薩摩潟波に沈みしひとをこそ思へ　いさ子
清水のきよきみてらに數島の道くらからぬのりの師そこれ　好子
さつまがた千尋のそこにしつみても月の光は世をてらしけり　いさ雄
さつまかたなみにしつみし月影も光は高く世をてらすらん　愛
音羽山たかねにすみし月かけはいりての後もあふかれにけり　戲夫
いたきもて沈みし龍は浮へさも浮はすなりぬあはれその玉　正臣
薩摩潟なみまにいりし月影は今もさやかに世をてらすなり　秋香
西の海ちかひの舟も波あれてしつみし月のあはれよのなか　粲
墨染の衣をみにはまさへさもあかきは君かこゝろなりけり　有經
はや人のせとの汐瀬のしほあひに砕けし月の影のさやけさ　嚴雄
しつみても光りそのころ西の海やひかしの山にすみし月影　樞郁
くもりなき心の月はわたつみに入りし後こそてり勝りけれ　正夫
國のため心つくしの海原にしつみてもなほよにのこりけり　長言
國を思ふ深き心はつくしかたちひろのうみも及はさりけり　行久
わたつみの海より外に宿る方なしとや月のしつみはてけん　綱二
をしまれて沈みし月のみ船峰浮はんせなきよやかこちけん　胤明
さつまかた月にうたひし言のはに赤き心のそこもみえけり　英一
邪公思ふそのれのよにもれてこかくれかれつたかの山にも　義清
みほさけのみちをもすてゝつくしけん薩摩の海の深き誠は　久子

●同（おなじく）　紀元節御兼題詠進（きげんせつごけんだいえいしん）

氷消田地

朝日さす澤田の氷うちさけてみちたる水にはるかせそふく　正風
こん秋のみのりもしろしを山田の氷をくたくはるのはつ風　利嗣
いつくかは氷のさけぬくまあらん山田ももれぬはるの光に　豊頴
小山田の氷もけさはさけそめぬしつか伏屋も春やしるらん　承昭
田鶴の居る澤田の氷さけそめて若菜つむへくなりにける哉　光尊
いさはやもかさたの氷さけにけり賤が心ものさけからまし　通善
きのふけふ春の朝日のかけさして田面の氷さけそめにけり　長說
春のきて門の田面もいつしかに氷あさなくきえはてにけり　豈衡
賤のをかすきかへすへき時きぬと田毎の氷さけわたるらん　光昭
梓弓はるたつかせのふくなへに氷をみつにかへすあらを田　利器
春風にさゝなみたちてをやまたの水田の氷さけそめにけり　忠敬
足引の山田のこほりうちさけてわかくさもゆる時はきにけり　美稲
水たまる門田のおもの厚氷けささけそめてはるかせそふく　通治
うらうらと春の朝日のかけさして門田の氷さけそめにけり　長言
長閑にもはるのあさ東風ふきわたる水田の氷今やきゆらん　國美
厚氷さけたるみつのけふりよりたのものさかに春たちにけり　雅之

うら〳〵と照す日かけに小山田の氷はとけて烟たつなり　治光
わか門の田さはの氷うちとけて朝日にけふるみつのおも哉　昰弘
春風にかとたの氷うちとけてけさはのとかに朝日さすなり　隆元
わか門のをたのこほりもとけそめて柳かねたに春風そふく　嚴夫
梅の花かけうつろひてかきつたの氷は波となりにけるかな　正臣
あしはらやさやたのこほりとけにけり春に先たつ風の光に　秋香
小山田のこほりやみつにかへりけん小波みねて春風そふく　有經
葦たつの聲のとかにもきこゆなり澤田の氷けさやとくらん　嚴雄
とちはてし片田のこほりあともなき水の上ふくけさの春風　楢部
たつのなくさは田のこほりうちとけて水豈にもみゆる春哉　正夫
ふく風も長閑になりてわか門のたつらの氷とけそめにけり　長言
伏見山けさふきおろすはるかせにさはたの面は氷とくらん　行久
たにしとろ里の少女もみゆる哉をたの氷はいつとけにけん　鋼二
かきつたの氷ふきとく春風にみはたなひきて梅かをるなり　胤明
若菜つむ里のうなゐのかけみねてたつらの氷とけはてに鳬　英一
冬枯し澤田のこほりうちとけて根芹つむへくなりにける哉　義清

●英照皇太后御祭日と暦　英照皇太后の御祭日、即ち一月十一日を、先帝　孝明天皇の御祭日と同じく暦の上に登載し、一般の公祭日とすべしとの議其向に起り、目下當局者に於て古今内外の式典取調中なりといふ。

●神武天皇御降誕祭齋主　來四月三日、宮崎縣に於て擧行せらるべき　神武天皇御降誕祭齋主は、神宮敎院管長藤岡好古氏擔當の事に決定せしを以て、氏は過日來屢次宮内省に出入し、式部寮の式典、其他古今の儀禮等を取調べ居たりしが、此の程漸く趣向を一定し、夫れ〳〵當事者に通知せりと云ふ。

●敎員檢定豫備試驗　師範學校、中學校、高等女學校敎員檢定豫備試驗日割左の如し、受驗者は出願學科試驗開始の前日迄に、各其の試驗を受くべき官廳に出頭して指揮を受くべしとなり。

三月三十日　代數測量、算術測量
三月卅一日　國語(解釋作文)、獨語、幾何測量、毛筆畫
四月　一日　修身、倫理、鉛筆畫、國語(文法文學史)、物理
四月　四日　敎育、物理、化學、用器畫
四月　五日　漢文、家事、英語、習字
四月　六日　歴史、日本史、萬國史、鑛物、農業、
四月　七日　地誌、簿記、生理、裁縫
四月　八日　地文、佛語、植物、商業

一本回にありては動物、音樂、唱歌、普通體操、兵式體操、手工の六學科及數學科の内三角法、解析幾何、微分、積分は豫備試驗を行はず又測量科は算術、代數、幾何を以て豫備試驗とす
一歴史科出願者にして日本史科萬國史科をも併せて出願したる者は日

本史科萬國史科に就き、毛筆畫及用器畫科出願者にして毛筆畫を併せて出願したる者は毛筆畫科に就き、鉛筆畫科及用器畫科出願者にして鉛筆畫科をも出願したる者は鉛筆畫科に就き別に豫備試驗を行はず

●海舟翁追悼會　群馬縣高崎町なる深井仁子刀自は、夙に國振女學校發育小學校の二校を設け、縣下の女子教育、幷に普通教育に力を用ゐ、其小學校は縣下私立校中の第一位を占め、刀自の來歴も美談殊に多きが中にも、去る明治十九年三月中、刀自の姉なるタメ子の夫、故天野判事の遺言に、其墓碑は勝海舟翁の書を願へとあるに從ひ、出　京して依賴せし所、翁は快よく承諾ありて「惟忠惟孝循々良吏、賛天野寧剛」と認め、殊に美事に出來せしかど、一同の喜び一方ならず、早速同地の大信寺に建碑式を行ひしが、此程翁の逝去を聞き、深く之を惜しみ、且當日の恩を記するため、頃日門人故舊等を會し、盛大なる翁の追悼會を營みたりと云ふ、尚當日献詠中に、

我爲めに取りし昔を忍ぶれど　天野くめ子
ねのみし泣かゆ水莖のあと

いにしへのまた武藏野と成にけむ　深井仁子
其世に君のなからましかど

●海舟翁追悼歌　故勝伯五七日逮夜の節、上野東照宮本多晉氏は、左の追悼歌を薦めたりと。

海舟先生勝伯薨去後五七日
逮夜追悼作歌幷短歌　本多晉

千萬のつはもの率ゐたしろかぬ人はあれども百舟の軍さゝのへおくれさる人はあれども君は船臣は水なり水はよくみ舟を浮へ水はよく舟くつかへす理をはやくもさとり武藏の海江戸の湊に風荒て危き時に五百重浪立もさはらす和田の底いかりをしつめ眞梶柄取もたかへすありその海の深くはかりて皇の御國の爲さつかへこし君をたすけつ柔きもて強きに勝の君はしも比ひあらめやかくはかりいさをしき君斯許かしこき君も年波のよせてかへらぬ老らくの病の敵にはすまひかね勝やかれけん引汐のあわさし消て今は世にましまさぬこそなしみても猶惜まれなけきても猶歎かるれ千よろつの兵ひきゐ百船のいくさ整ふる人はあれども

反歌

空の海に御船はやすくますらめさ
こゝに見ゆれはかなしかりけり

●京橋區教育會と德行者の彰表　京橋區教育會第七十三回總會は、去る廿六日京橋區議事堂に開き、併せて

區内在住の德行者八名の彰表式を擧行したり。當日會する者、會長花房義質、三浦安、日下義雄の諸氏を始め、會員無慮二百五十名、彰善會よりは會頭高崎正風氏代理色川國士、大口鯛二、同千葉胤明、南摩綱紀數氏臨場あり、千家東京府知事も後れて參着したり、花房會長開會の趣意を述べ、敎育勅語を奉讀し、一同起立靜聽、之より會計報告あり、終て彰表式に移りしが、文海學校長今井市三郎起て左の德行者八氏を呼び、順次目錄又は彰德盃を贈れり。

京橋區鈴木町十二番地故冨次郎妻　渡邊　はな(四十三年)
　貞節(金員贈與)
同區西紺屋町八番地　平松芳次郎(四十八年)
　實業精勵(彰德盃贈與)
同區築地二丁目二十五番地元福井縣士族玉村篤妻　戸川　はま(五十年)
　貞節(金員贈與)
同區五郎兵衛町二十番地　柴田幸三郎(四十三年)
　孝養(彰德盃贈與)
同區彌左衛門町十二番地　藤木兼次郎(四十四年)
　孝養(彰德盃贈與)
同區尾張町新地二番地　平岡清次郎(五十三年)
　出勤孝養(彰德盃贈與)
同區南傳馬町三丁目一番地　月村　豊吉(五十九年)
　孝養(彰德盃贈與)
同區築地二丁目三番地　松風　光作(三十四年)
　孝養(金員贈與)

右の内最も目立ちて見ゑたるは渡邊はな女にて、双子木綿の垢附きたる布子に同じ半纏の黒唐繻子の襟附たるを着し、塵だらけの髮をたゞこに結びて、足袋は穿かず「渡邊はな殿」と呼ぶる聲に應じて會頭の前に進み平伏す、會頭は懇に目錄と表彰狀を取りて之を授くれば、同女は感涙に咽びつゝ之を受けぬ。斯くて贈送の式全く終れば、大口、千葉、遠山等の諸氏がはな女を詠じたる和歌の披露あり。即ち、

霜雪にみさほたはます咲く梅の
　花や皇國のかさしなるらむ　大口　鯛二

うつろはぬ心の花にくらへては
　梅も櫻も色なかりけり　千葉　胤明

君が名の花さく春にあひにけり
　冬かれはてし折もありしを　遠山　英一

聞くからにゆかしきものはうるはしき　遠山いれ子

むの花の匂なりけり
夫より高崎彰善會頭（色川氏代讀）南摩綱紀、三浦安等諸氏の祝文演説等ありて散會せり。

●女教師受賞　本所區中和尋常高等小學校訓導三好てる子は、東京府高等女學校の卒業生にして、廿六年十月以來一日の缺勤なく職務に勉勵するを以て、松田東京市長より左の賞賜ありしと云ふ。

東京市中和尋常高等小學校訓導　三好　てろ
明治廿六年十月就職以來五ヶ年有餘一日の鈌勤なく職務に精勵候に付爲其賞木杯一組并金五圓を贈與す
明治卅二年一月　東京市參事會　東京市長　松田　秀雄

倘は本所區學務委員よりは、彰表狀にそへて黒塗蒔繪硯箱一個を贈れり。

●孝悌　千葉縣市原郡五井町にお豐とて年廿四歳の女子あり。九年以前父母を亡ひ、今は祖母と妹二人との四人暮しなるを、元貧しくして父母のみうせしをりは其の負債百餘圓に及びたるが、お豐剛直にして他人の救助を仰ぐを好まず、拮据黽勉菸蒻を行商し、悉くその負債を償ひ、倘數百圓を貯蓄し、祖母及幼妹に嘗て窮乏を感ぜしめすといふ。

●孝女　安藝國加計小學校女教員沖長ゆた女夙に孝行の名高かりけるが、此の程其の父突然重患に罹りて言語起居自由を失ひしを憂ひ、悲泣の余り卒倒して人事不省となり、時々譫語を發するも、猶父を忘れず、指にて布團の上に父上は如何にと書くにみなりといふ。斯かるめでたき心ありてこそはじめて人の師表ともなるべきなれ。今の女教師界醜聞を耳にすること殊に多し、庶幾くは此のゆた女を顧みて以て自ら愧ぢよ。

●又　東京府下南葛飾郡松江村の農高石春藏の妻あさは天性温順至孝にして夙に近隣の賞賛する處となりしが、其の實母たか（七十歳）十年以前老病にかゝりてよりは一層まめやかに仕へて茲に十年一日の如く嘗て變ることなし。よりて小松川警察署にては不日あさ女の孝徳を其筋に上申する筈なりといふ。

●師弟の情　筑前博多に住める祝部やす女、自宅に

十九名の弟子を置きて裁縫を教授し、又炊事の事をも教へていと懇なり、やす女一日欺かれて自家の貨物を他人に貸與し、其後之を促するも返還せざるより、親族皆やすを詰責せり。十九名の弟子等其師の爲に亦之を憂ひ、夜間二里餘の愛宕神社に跣參りしてその返戻を祈りしといふ、赤心感ずべし。

●篤志　長崎縣の豪農藤田好衛、貧民を救助するを以て畢生の樂とせり。其の村の峯某なるもの四人の男子を遺して死にけれど、そを自宅に引取りて撫育し、長ずるに隨ひて各一人毎に家屋と田畑とを與へて一家を興さしむといふ。今の世には稀なる篤志家なり。

●同　備中の豪家大原孝四郎なるもの亡父の遺志を繼ぎて一萬三千圓を投じて備中子弟學資貸與の法を設け、大に育才の途を謀れり、其返濟法は、成業の後所得に應じ、無利息月賦にて償還するなりといふ。

●貯蓄の美風　美作久米南條郡佐良山村遠藤意十郎自ら村内を說きまはりて、毎戸金三錢乃至五錢宛を貯蓄せしめて天災救濟の豫備とし、之が利殖を謀ること八年、今や數百圓の多きに登れり。近郷其美風を聞きて移住し來るものありといふ。

●國字創案　東京盲啞學校教師石川倉次氏は、先年盲人用の文字を工夫し、目下日本全國の盲人間に行はれ、非常の功績ある人なるが、夙に我國文字の不便を憾み、同志と共に國字改良會を組織せられ、同會へ向つて改良文字三案を提出せしが、全體六十字内外にして、皆一二畫の運筆にて事足り、一見速記字樣にして、左より右へ横書するものなり、氏の新字に要する資格の標準は、第一總ての文字よりも便利ならざる可からず、第二發音の總てを記し得ざるべからず、第三成べく少數に、第四成べく學び易く記し易く、第五何人にも(盲人等)記し得べく、第六其記法簡易に何人にも用ひらるゝこと、第七其他文字に要する普通の資格を具備すること等なりと。

●東京小學館の規則改正　麴町區虎の門内なる東京

女學館にては、此の程其の規則を改正して新に生徒を募集せり。生徒は科を分ちて、高等普通、專門、特別の三種とし、高等普通科は科目を、修身、國文、英語、歷史、地理、數學、理科、家事、習字、圖畫、裁縫、音樂、體操とし、別に漢文、手藝を隨意科とせり。修學年限五ケ年入學程度は。小學校卒業に準ず。專門科は高等普通科卒業の上尙進みて高等の學科を專攻せんとするもの丶爲に設けたるにて、國文科、英語科、技藝科の三とし、年限を二ケ年とす。特別科は一般生徒と同じく出席する能はざるもの丶爲に特に時間を設けて望みの學科を敎授するものなり。授業料は一學年に付、高等普通科、及選科を各金貳拾貳圓、專門科金貳拾七圓五拾錢、特別科を金參拾參圓とす。

●本邦在留外國人敎師の數　文部省最近の調査に據れば、本邦に於ける官公私立の各學校に於ける外國人敎師の總數は二百七十六人にして、就中多きは亞米利加合衆國人にして計百二十四人、内男七十三人、女五十一人。英吉利國人は計六十九人、内男四十八人、女二十八人。佛蘭西國人は五十二人、内男三十二人、女二十人。伊太利、瑞西、白耳義の三國人は各男一人。獨逸國人は計十八人、内男十七人、女一人。露西亞國人は男二人。葡萄國人は女一人。淸國人は男四人。韓國人は男三人等なりと云ふ。

●郵便條例中改正　曩に帝國議會の協賛を經たる郵便條例中改正法律の二月十三日公布せられたるものは左の如し。

法律第二十一號

郵便條例中左の通改正す

第十五條「長一尺二寸幅八寸」を「長一尺三寸幅八寸五分」に改む

第百三十一條及第百三十三條中「三十圓」を「五十圓」に改む

附　則

此の法律は明治三十二年四月一日より施行す

(參照)第五十九號布告郵便條例(明治十五年)抄錄

第十五條　郵便物の大さは曲尺にて長一尺二寸幅五寸厚五寸に超過すべからず

第百三十一條　爲替證書一枚の金額は三十圓以下とし端數は厘位を限りとす

第百三十三條　同一の差出人より同一の受取人に宛て同一の郵便電信局郵便局に於て拂渡すべき爲替の振出は一日金額三十圓に超過すべからず

同じく本月一日公布せられたる同法律の要點は、

第一種郵便物(信書)　重量四匁毎に　三錢
第二種郵便物　葉書　一葉　一錢五厘
　　　　　　　往復葉書　一組　三錢

四月一日より實施、

●電報取扱規則の改正　同規則は改正せられ、來る四月一日より施行せらるゝことゝなりたるが、改正の要點は左の如し。

國内(一市内を除く)を通ずる電報料

一	和文	片假名十五字以内	金二十錢
		五字以内を加ふる毎に	金五錢
二	歐文	五語以内	金二十五錢
		一語を加ふる毎に	金五錢

一市内に發着する電報料

一	和文	片假名十五字以内	金十錢
		五字以内を加ふる毎に	金三錢
二	歐文	五語以内	金十五錢
		一語を加ふる毎に	金三錢

發信人は其住所氏名を頼信紙の餘白に記載すべし若し其住所又は氏名の傳送を要するときは尚之を本文の末尾に記すべし、和文電報の住所氏名にして左に掲ぐるものは之を字數に算入せず

一　受信人の住所及氏名但連記したる氏名及追尾電報に逐書したる住所は最初の一名若くは一住所に限る
二　頼信紙の餘白に記載したる發信人の住所及氏名

歐文電報の住所氏名は總て之を語數に算入す

●和歌募集　熊本縣士族、米田新、通稱甚左衞門是輔といふ。新とは老後の名なり。贈正四位米田監物の家と同姓なり。新本年八十歳の高齢をかさねていと壯健なれど、男子なければ、女子の富惠子主唱者となり、左記のごときすりものをいだしたり。松風舍主人寄す。

妾が父米田新こと、いともすこやかに、今年は八十歳の高齢をかさね侍りぬ。伏てこひねがはくは、各位風雅の君よ、賀歌に祝文に、妾が意をくみとりたまひて、投與たまひてよ。

明治三十二年
二月十一日
熊本縣肥後國菊池郡城北村
大字木野
末女　米田富惠子
補助　佐々有鄰子

編者曰ふ、此の二孝女の事はさきに、女鑑第百七十三號雜報欄に畧記せり。されどここはまたいさ詳しければ重復をいとはず茲に掲げぬ。

●寄書

二孝女(かめ、あい)　中津邦夫寄

國亂れて忠臣あらはれ家貧うして孝子いつ、吹く風も枝を鳴らさぬ、大御代の三十二年のまつりごとはしめに兵庫縣のつかさは二名の孝女と貞女とにそれ〲褒狀をあたへて濁りに濁り腐りにくさりたる人の心に一のたよるべき光明をあたへぬ、誰れか見て鑑とせざら

む何れの子か以て親に仕ふる鑑とせざらむ

姫路驛を北東に走ること七里許山陰こ山陽との境にあたれるに町ありこの町はほまれを負へる孝女が產聲あけたる地にして山崎町といふ父は長次郎と呼びて炭をあきなひ富めりといふにあらざれど妻との間にわけたる二人の娘をこよなくかあいかりて風波さへ立たねむ笑ふ門には福來るの譬にもれずます〳〵家は富み榮ゐゆきたりしも一朝にして榮ゐ一朝にして衰ふるは商業の常態にして長次郎も終にこの厄にかゝり一敗地にまみれ多からぬ不動產は悉く人の手にわたりぬ長次郎の悲しみやいかばかりなりけむ

母は水腫病といふにかゝりぬさらでたに明日の命をもつなぎかぬる一家を如何にしてさゝふべきか母の藥餌はいかにして調ふべき幼きころ源烝内とかいふ人には神の酒をわきいたしてわたへたまひけるとか學びの庭にてきゝつるを海山よりもふかくたかきみ恵かゝふれるわれらはいかにして病をはらひやらむもし金にてもあまたありたらむには病院にても勸めてよしや耆婆扁鵲の藥あらずとも名醫の藥をすゝめ申さむにもし世の人のやうならむには滋養分などをも求めまゐらせむにあはれ貧しき身の悲しさには藥餌をたに充分にすゝめまゐらすることの叶はぬさよと天を仰ぎ地に俯してひたすらに病のおこたらむことを祈り年はも行かぬ二人の少女はつゝれの衣をまとひ朝な夕に病の床に侍りかたはらには藥餌の料はては滋養の品をも上らむと夜を日につきてつとめいそしみぬ

花の蕾の二人をぞ藥餌の爲に日夜つとめさせおのれが爲に世の人のやうにわざやかなる衣をもまとはしめず蝶や花やと育てしことも今は昔なれやおひさきこもれる少女をはいかにせんなど病の床に臥して子をおもふ恩愛に神經さへさしてわけくれ心づかひしたりしが爲病はやう〳〵重らなりぬ

二女の悲みはいかに天にも地にもかへ得べからざる母親をなくなさむことの悲しさにます〳〵看護を怠らざりしかど天もこの孝女を救はさるか神もこの孝女をあはれまざるか終にこの孝女を殘して長き旅路にいでたちぬ頃は昨年の五月なりきとかや

孝女は已に母を亡ひぬ賴るべきは只一人の父のみと嘆きかなしみて孝養を怠らざるとかや

われは大阪朝日新聞（一月五日本紙二面）をよみて老ひたる親をもてる身のわが身の上におもひあはされてあはれにたへず終に山崎町役場にとひあはせたりしかば左のやうにこたへきたりぬ

小倉長治郎の商業上の失敗をまねぎし以前の動產及不動產の總計（中等？上等？）及商業はなになりしか

失敗を招ぎし以前に於て別に不動產とては左記の點數のみなりしも當町に於ける中等以上の家計にして一時商業も盛なりしにつき當時の動產物は其價格槪畧數千圓なりしならむ商業は炭問屋なりき

一家屋壹ヶ所　桁行六間　梁行五間

一部屋一ヶ所　同四間　同二間半

一土藏　貳ヶ所
一倉庫　貳ヶ所
一物置　一ヶ所
一湯殿　一ヶ所
一宅地反別六畝拾七歩
一畑反別壹反歩

先敗後の家計は何によりて立てつゝあるか
失敗後長治郎は謠曲の上手なるが故に夜は數人に敎授し晝は聊他人の代書等をなし其謝禮と筆耕料とを以ちて漸く家計を立てつゝあり

小倉長治郎は何程位の敎育ある人か
別に敎育を受けし事なし唯幼少の頃舊山崎藩士族本庄權なる人につき習字せしのみ

母は如何なる人の娘か又何程位敎育ある人なりしか
揖保郡龍野町平民商稻田榮助の二女にして別に敎育ありしにあらず

小倉かめ、あい二女は何程位の敎育を受けたるか或は受けつゝあるか
かめあいの二女は漸く尋常小學校を卒業せしのみ今は家に居りて家業を助けつゝあり

貴町に於てこれより以前に孝子貞女の鑑となるべき人はなかりしか
維新後になし

若小學校を卒業したりとすれば其校長はいかなる人物なるか
舊安志藩の士族にして赤川俊親といふ其人となり溫厚篤實品行方正にして兒童の誨訓に最親切なるが故に生徒は勿論父兄に至るまで其德を慕はざるなし

現今の生計は全く赤貧なるか
前項の如く謝禮と筆耕料の所得を以て僅に其日の生計を營み居れり

山崎町長は余が爲に右のごとく取調の上通報しくれられたり余は深く其勞を謝す
あはれ世の貴紳諸孃よ髮にきらめく一の釵指にはめたる指輪の代の幾分をさきてこの孝女あはれむべき悲むべきはたわれらの最尊敬すべきこの孝女を救へ

孝女をよみて　邦夫

風やます樹靜まらすしてはゝその
枯れけむ時をうらみ顏なる

ちるまでは色あせすあれ女郎花
霜はおくとも小雨ふるとも

●三都婦人の氣風　三都に到る者は先づ其土地の風土習慣人情の差違あるを目擊すると同時に、眼を一轉すれば又た婦人にも著しき固有の特所ある事を發見するなるべし、吾れ曾て試に記して曰く

此を他の獸類を假り來りて譬ふれば東京は犬なり、大阪は猫なり、京都は兎なり、前者は快活なり、次の者は溫和なり、後の者は因循なり快活は天眞爛熳を意味し、柔和は腹中聊か蓄藏する處を意味し、因循は二者此を發表し或は欲意するなきを意味す

若し夫れ花木を以て此を分たば東京は梅なり、大阪は櫻なり、京都は海棠なり、梅は稜々として犯す可からざるの貞節を保ちて其神韻遠く、櫻は徒に爛漫灼爍として美にして艶、海棠は雨に惱むの愁容を持して艶にして雅なり

而して此を他の喰料品にて別たば、東京は氷砂糖の如く、大阪は黒砂糖の如く、京都は西洋砂糖の如し、第一のものは噛めば噛むほど其の甘味を覺ゆ、第二のものは甞むると同時に其味のある處を悟り、第三のものは遂に何の甘味も厭味もなし

更に此を　門の種族より比較すれば京都は寧ろ貴族的なり大阪　は平民的なり、東京は貴族的にして更に平民的なり、故に今一歩進めて動靜の上より言へば、京都は靜止せり、大阪と東京とは活動せり、前者は恰も大理石の如く其動くや機械的なり、後者は自動的に進んで動けり、然り而して其の動くや大阪は秩序的に動きて止ます、東京は不規則に動かざる事あり「妾身不」許贈三千金」、妾身只許有」情人」なるもの實に東京の理想なり、故に彼等は容易に黄白などを以て情交を契らざる代りに、一旦盟約を遂ぐれば財産も將た身命も打忘れて唯一に意中の人の爲めに盡すの氣慨を有せり、若し大阪を以て此を言はゞ「誘ふ水あらば〳〵と螢かな」身を浮萍の根を絶ちて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふは實に彼等の性情なり、若し夫れ京都を以て此を言はゞ「うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき」なるものは彼等の觀念なり、靜に思ふて靜かに空想に煩惱しつゝ不語不言の間に自己が理想を埋沒し了はれるものは少くとも彼等の氣質なり

故に又た此を以て更に他の人に比較すれば、京都は何にしら糸の清き姫御前の如く、大阪は此れに隨伴せる世辞も愛嬌もあるお守役の下婢の如く、東京は粋も無粋も嚼み分けたる仲居の如し

以上は唯だ其の理想に就て言ひしのみ、更に此れが理想を發現する外觀上よりして繰返せば、東京は意氣なり、粋なり、大阪は艶なり、麗なり、京都は優なり、美なり、前者には瘦影赭顏の者多く次の者は紅顏豊頰のものに富み後者は白皙にして長方形の顏色に傾く、故に或は凜然として憎くらしきは東京莞爾として愛らしきは大阪、整然としていぢらしきは京都と云ふ事を得べし

當時吾れ私に肯綮に當れりと爲す、爾來年月を經る五六、嚮に犬と云ひ、梅と唱へ、氷砂糖と呼びしもの果して能く其の幻影を今日迄全ふし得つゝありとするか否な彼が私擬は今や事實に戻れる空想の中に葬られ了はんぬ、吾は東京に於ける固有の氣風が或る一部の文明に眩惑せられ、日に月に萎靡し頽廢し、滔々乎として土方風に感染しつゝあるに疑なき能はず、是れ豈に近年有夫の婦の不行跡、女學生の醜聞稀れならざるを見て、しかく言を爲すものならんや、嗚呼豈にしかく言説を費すものならんや乃ち今古の感を書して江湖觀風の人に質す（蔵六庵主投）

教の庭



三月五日兼題　閑居春雨

天

しめ〳〵とふる春雨にいとゞなほ
うき世にうときくさの庵かな
東京府下豊多摩郡淀橋町　中桐杏子

地

とふひともなきやどなれや春雨の
しづけき音もまさぎれりけり
東京四谷區伊賀町四十九番地　牧瀬かう子

人

のがれすむ庵としりてや音たてず
降るものどけし夜半の春雨
栃木縣安蘇郡佐野高砂町　永井あき子

秀（十首）

たづねよる人もとたえしふせ庵の
のきもしづかにはる雨ぞふる
肥後　佐々小琴子

世の中は背き果たる身にしあるを
など春さめのさびしかるらん
豊前　下元茂登子

玉水のおとづれもなきいほなれど
ふるとも玄らぬ春のあめかな
下野　永井さい子

世のうさをの逃て住める我か庵は
音もしづかにはるさめのふる
東京　下田春子

世離れてひとり住む身は春さめも
いとゞあはれをそれもほゆる哉
東京　下田與子

友もなき世のかくれがの淋しさに
おとだにたてよ軒のはるさめ
肥後　小森田輝子

とふ人のなき宿なれどはるさめの
降る日はいとゞ侘しかりけり
信濃　勝山忠子

とふ人もなき柴の戸につれ〳〵と
いとも玄づけき春さめそふる
京都　清水貞子

春といへど人もとひこぬ柴の戸を
れとなふものはのきのたま水
備前　降田槇子

花見にとゞひ來る人もたえはてゝ
ゆふべ淋しくはるさめの降る
陸前　小川清子

（以下原稿到着順）

おとつれもよそにきゝなす山かげの
いほりさびしきはる雨のそら
佐々有鄰子

月はなにこゝろをよせしやますみの
しばのいほりにはる雨ぞふる
坂本遊多歌子

靜けきをこゝろさなしてすむ身にも
さびしきたへぬ夜半のはるさめ
橋本登譽子

うきよをばよそにみ山のかくれ家は
ふるはるさめもしづけかりけり　吉富彦子

のどかにもふるはる雨のしづくこそ
とはれぬいほのおとづれとなれ　村上昌子

はる雨にとふひともなきわがいほは
ゆめものどかにむすばるゝかな　平山政子

木のめにるまどのけふりになびきあふ
くもしづかなるはるのあめかな　佐々値路子

もゑ初めし庭のわかくさきのふけふ
降るはるさめにみどりいやます　久米貞子

人とはぬむぐらのやどははるさめの
たまたまふるもおとなかりけり　友永章子

世をすてし身にふりかゝるはる雨は
はなをもともとさせじとすらん　永日芸子

今日もまたはれぬはる雨つれづれと
ふりくらしつるやまかげのいほ　那須昌子

しづかなる草のいほりははるさめの
のきのしづくもともとこそなれ　村崎包子

さま〳〵になく鳥のねもしづまりて
こけしめやかにはるさめのふる　黒田明子

つれ〳〵とひとりながむる庭のおもに
うれしや木のめはるさめぞふる　虎口貢子

しづかなるいほりにすめば音もなき
のきのしづくにはるさめをしる　下田絶子

憂き事のたゑてまぎるゝ事もなし
おとづれもなきはるさめのころ　武藤しげ子

しつけさをれかふ宿にもはるさめの
ふる日はいとゞさびしかりけり　住山幾子

世をいとふしのゝあみ戸をうつ音の　小林文子

のどけくもあるか今日のはるさめ

かしましきよをのがれきし庵なれど
あまりしづけきはるのあめかな　根岸豊子

塵のよをのがれしまゝのわがいほを
ふりきよめぬるはるのあめかな　浦井豊子

世にとほきわがかくれがの寂しさを
よきたくひとやはるさめのふる　森やす子

のがれすむいほにはあれど春さめの
ふる夜はいとゞさびしかりけり　羽室象子

のがれ住む草のいほりもはるさめの
さびしさあまるのきのたまみつ　浅井静子

とふ人もなきかくれがにひとしほの
さびしさそへてはるさめぞふる　菊池不二子

常よりもさびしかりけりひとゝはぬ
くさのいほりのはるさめのころ　中村壽枝子

春さめのそらのながめものどかにて
そぼ〳〵おつるのきのたまみづ　村田よし子

すみなれてきけどさびしきはる雨に
いぶせさまさるやまかげのいほ　仁保基子

しづけさをこゝろと住めるいほりには
よきたぐひなるはるのあめかな　吉田季子

とふ人もなきやまざとにつれづれと
ふるはるさめのおとのしづけさ　溝口貞子

たまみつの音よりほかにおともなし
くさのいほりのはるさめのころ　宮崎せん子

かくれすむむくらの門はとふひとも
なけれどはるのあめぞおとなふ　田代喜知子

しつけさをこゝろとすめる庵なれば
ふるはるさめもしめりがちなる　田代艶子

はるさめはたねず軒端におさすなり
さふひさもなきいほりなれさも　田代綾子

すみわびぬあまりしつけき春さめに
つれにはなれしくさのいほりも　河田いし子

世の外のくさのいほりさずまへども
はるのながめはおさづれにけり　高橋信子

ありさたにしられぬやさはいふ人も
たねて日をふるはるさめのそら　長松かれ子

人さはぬ世のかくれがもこのころは
まなくはるさめおさつれにけり　中山登美子

のがれ住むあさちが宿はしかすかに
しづけくあるかふるはるさめも　福原壽美禮子

しづけさを何にたさへむひさりすむ
いほのゝきばのはるさめのおさ　都水春子

いつさしゝ柴のさぼそぞはるさめに
ながき日くらしこもりわびつゝ　目黒佐喜子

すか〳〵さかまへしいほの芝の戸を
おさもゆかしくはるさめのふる　所佐以子

今日もまた音なくそゝくはるさめに
さふひさもなしよもぎふのやど　安孫子かづ子

はなちりて今はさひくるひさも無く
こゝろのどかにはるさめにふる　篠崎ふさ子

あはれにもたねず春さめけぶるかな
さふべきひさもさはぬすみかを　篠崎のぶ子

春さめにいさゞさひしさまさりけり
なくうぐひすのこゑもくもりて　阿部久子

たまつばきたま〳〵おつる音のして
のきばさびしくはるさめのふる　清河照子

世の中をしのぶがをかはひさもこず　奥玉子

おさつるゝなりのきのはるさめ

静かにさ住むこゝろをや知らさらん
おさはけしくもはるさめのふる　池江榮子

山ばさのこゑさへしめるこゝちして
けふしもふれるはるのあめかな　飯田たま子

かくれがも春めきぬらんはるさめに
うらわかくさのもにしいづれは　左近充わき子

さゝがにの糸よりそほくきのふけふ
くさのいほりにはるさめのふる　大津みれ子

花ゆゑにひさも來へきをかくれ家に
さてもながめのうらめしきかな　新井登代子

さらぬたにさふ人もなきくさのいほに
しつくさひしきはるさめそふる　小野寺竹子

春なれどいささわひしきふせいほに
ひさりみにしむあめのおさかな　清水すみ子

ひさりすむ我が宿なればはるさめの
しつくさへこそしつけかりけれ　阿部與宇子

さらめだに淋しきまさるくさのいほに
なほもそへよさはるさめのふる　羽根田米子

つれ〳〵さふるはる雨におのつから
れむりひきたすいさくろまかな　寺内志津子

さはれぬをこゝろさすめるかくれ家の
のきはしつかにはるさめそふる　早川くに子

さらぬたにしつけき山のしたいほに
さひしさそふるのきのはるさめ　小野寺てふ子

人もこすあらしもさはすつれ〳〵さ
ふりしやいくかのきのはるさめ　山本きよ子

この頃にかきらぬやさのつれ〳〵も
あめにかこちてわふるはるかな　春野八重子

くれ竹のうきよをすてゝ住むいほに
降るはるさめのおとのしづけ　伊勢歌子

まちにまつ花をもよほすはるさめの
なさかくはかりいふせかるらん　佐野幾代子

花をまつこゝろひとつになぐさめて
しづかにあめのおとをきくかな　吉岡歌子

うゑおきしいつもとやなぎ影きゐて
かすむかどべにはるさめぞふる　吉岡純子

つれ〳〵となかむるやどの淋しきに
おとこそなけれはるさめのふる　名倉節子

ひとゝはぬしばの折戸のやなぎかげ
いともしづかにはるさめのふる　佐々敏子

獨り住むやどはさらでもさびしきに
しめやかにふるはるのあめかな　八木沼里子

をり〳〵はとはれまほしき庵なれは
おとだにたてよよはのはるさめ　坂田のぶ子

世のなかをしのびてくらす庵なれば
はるさめさへもおとのなきかな　河村君子

つれ〳〵とこのめ春さめかすむなり
ひとめはかるゝくさのいほりに　横山柳子

あともなき庭のこけちのふかみどり
いろこそまされけさのはるさめ　横山すか子

をり〳〵もとふ人あれとおもふなる
くさのいほりにはるさめぞふる　青木たま子

わかなつむ人もかへりてはるさめの
おとしづかなるなかもとのいほ　谷口房子

かき本のわかなつまんと世のひとの
やがてとふへきはるさめぞふる　加賀みん子

とふ人もまれなるやどはおのづから
ふるはるさめのおとぞさびしき　小野けさし子

とふ人もあらぬのきはゞゆふくれに
はるさめさへもおとせざりけり　椎野ぬき子

さらでだにとふ人もなきわがやどに
こゝろもくもるはるさめのそら　吉田ひさ子

はるさめのおとは定かにきこゆなり
訪ふひともなきいほりなれども　道廣彌榮子

春さめのふりしむかしのしのばれて
いとゞつゆけきよもぎふのやど　彦坂尊子

人とはていとゝしつけきわがやどの
にはをかすめてそゝくはるさめ　田邊照子

思ひ入りてみやまのおくにすむひとも
つれ〳〵わぶるいほのはるさめ　立神とみ子

世はなれてかゝる深山にすまへども
なほおとつるゝにはのはるさめ　井上まさ子

友とせるうぐすのねもうちたゐて
にはのはるさめおとしづかなり　宮野あや子

春さめのしづにかふるはのとかにて
けふはひねもすふしながらく　横手こう子

やまさとはとふ人もなくつれ〳〵と
ふるはるさめのおとのみぞする　横手たつ子

柴の戸をとふひともなくきのふけふ
たゞはるさめのおとつれにけり　横手ふく子

世を捨てしこゝろにかなふゆふへかな
おぼろつきよにあめかすむなり　鈴木乘子

あめふりて人もとひこぬわがやどに
なかきはるひをいかにすごさん　板井喜世子

打ちつゝきふるはるさめに友とせし
ふみのまきをもよみつくしけり　山下茂登子

やまさとの人もとひこぬしつかやは
　さびしさまさるけふのはるさめ　小野久良子

うくひすのほかには誰もたつねこぬ
　はるさめさびしやまかけのいほ　吉田元子

うくひすの聲もしめりてつれ〴〵と
　ふりくらしけるやとのはるさめ　（三河）永井さい子

花とひて來るひともなしはるさめの
　おとそ聞きつゝふみやよみてん　西豔子

つく〴〵とものおもひつゝすむ宿に
　さびしさそふるはるあめのおと　猪崎縫子

くれ竹の世のかくれかにしのひきて
　おとなふものはのきのはるさめ　深谷清子

ひとりすむ梅の木かけにはるさめの
　ふりてはいよ〳〵つけかりけり　濱野時子

かゝれとてすみしものから春たにも
　あめのふる夜はものそさびしき　名取正代子

世をしのふくさのいほにも春さめの
　おとはありけりのきのたまみつ　坂田喜美子

はるの日をつれなくくらす柴の戸に
　おともしのひてあめかすむなり　名取よし子

わびしさをなぐさめ顔のはるさめに
　いざおき出てゝことやさらまし　香川れい子

しめやかにふるはる雨をつれ〴〵と
　けふもひねもすなかめくらしつ　石川樂子

かたりあふ友なき庵のはるさめは
　ところえかほにふりいてにけり　石川久子

さひしさは思ひさためしやさなから
　さすかひとまつはるさめのそら　石川類子

はるさめのきのふもけふもふる軒は
　いよ〳〵さひしたまみつのおと　石川南江子

まれに訪ふ人も絶にしこのころは
　くもりかちなるはるさめのそら　山田婦美子

けふもまたはれぬなかめに見ゆる哉
　はるさめくらきやまかけのいほ　佐伯きぬ子

のかれ住むいほりの庭はうめ見にも
　くるひとたえてはるさめにふる　仲田榮子

人とはてしづけきやどははるさめも
　おとなくてこそふりくらしけれ　島澄子

世離れて我がすむいほのしづけさを
　そらにも見せてはるさめのふる　島立子

はる雨のふりそめしよりかくれかの
　のきのあをやぎいろまさりけり　伊佐早梅子

世の塵をよそにはなのみまつやどは
　ふるはるさめもなつかしきかな　楠しづ子

いつかたもおなし春野のあめながら
　わけてしつけきやますみのいほ　宮脇雪枝子

雪もきえはなまつやまのかくれかは
　ふるはるさめそたのしかりける　佐藤榮枝子

さらでたにいとゝさびしき我やどに
　つれつれとふるはるのあめかな　仁保しま子

しづかにも文よむまどにしめ〳〵と
　ふりくらしたるはるのあめかな　眞島千鶴子

つれづれと軒ばにすがくさゝかにの
　いとよりほそきはるさめのふる　石井登子

世をいとふかくれがながら樂しきは
　わかくさもゆるはるさめのそら　德永萬壽子

世のほかの宿とはいへど世にもれぬ
　木のめもはるのあめはふるなり　德永廣子

とふ人もなくてさびしきくさの戸の
いとゞしづかにはるさめのふる　江口隼子

とふ人もなくねさびしきうぐひすの
こゑもしほるゝはるのあめかな　澤田春子

花かけのかすみより降るはるさめは
てふの夢にもさはらざりけり　山田璋子

しづけさをこゝろさすめる柴のとを
たづねきてふるはるのあめかな　上杉光子

ひとり住む田中のいほのしづけきに
こゝろもはるのあめの降りつゝ　塙いさむ子

うき世をは避けてむすへる誰か庵に
きのふも今日もとへるはるさめ　佐藤きよ子

訪ふ人もあらでしづけきわがいほを
こゝろありげにはるさめのふる　佐藤やす子

まれ人のくるかときけははるさめの
ふるやののきのたまみづのおと　早川信惠子

よのうさもよそにすむなる草の戸に
けふもしづけくはるさめぞふる　下多康子

人しれぬやどのあるじにならひてや
おとなしのびてはるさめのふる　外川益子

さらぬだにさびしき宿をつく〴〵と
おとさへしのぶのきのはるさめ　外川さい子

のきつたふしづくもかすむ春の夜の
しづけきねやにあめをきくかな　服部桑子

春の日のながさもあかずふるあめを
ひとり見つゝや今日もくらさん　綿野りき子

あをやぎのいとくる風もしづまりて
あめあたゝかしよもぎふのやど　村しん子

ありとたにしられぬ宿にはるさめの
いともしづかにおとづるゝかな　内本みち子

のがれすむ宿ともいはでとふものは
のきはのつきとはるの夜のあめ　前田たけ子

柴の戸をおとなふひとのあとたえて
おともしづかにはるさめぞふる　都谷森りよう子

さらぬだにおとなふ人のなきいほを
いとさびしげにはるさめのふる　東宥子

つれ〳〵とひとりながむる谷かげに
世にはしられぬはるさめのふる　齋藤いれ子

文まなぶこゑのみもれてはるさめの
おともしづけきまどのうちかな　日高かず子

はるさめにとふひともなき柴の戸の
ひとしほまさるけふのしづけさ　牛窪たみ子

ながき日をながきものとも思はせて
しのぶにつたふのきのたまみつ　高市さし子

ながめわびくらしかたしや春さめの
おともしづけきくさのいほりは　野中朝子

さらぬたにひともとひこぬ山のいほに
さびしさそへてはるさめのふる　森こと子

騒がしきうき世のがれしやどなれど
あまりさびしきはるのあめかな　二宮春枝子

つく〴〵とはるのながめの淋しさに
おとこそまされのきのたまみつ　賀屋壽子

あめふれは花にとひくるひともなく
こゝろにかなふいほのはるかな　新井不苦子

つれ〳〵とふるやののきのたま水に
かゝらぬそでのぬるゝはるさめ　竹村良子

うなゐらも皆あといしてはるさめの
おとしづかなるこのあさけかな　稲本直子

まさのさはあけての後もはるさめの
　おさきゝながらまたれふりけり　大竹治子

世のほかにうきをのがれし者なれは
　さふひさもなしはるさめのころ　戸塚てつ子

はるさめに庭もまがきもいろつきて
　こゝろやすけにすめるやさかな　箱脇ます子

春さめのおさつれさへもめつらしや
　ひさにさはれぬこゝろならひに　吾妻ちか子

思はすもあさいするまてこもり居に
　のさけさそへてはるさめのふる　諸井久良子

ひさりすむみには中〳〵はるさめの
　ふるもあかれぬものにそありける　萩原章子

つく〳〵さこゝろ細さのまさるかな
　さもなきやさのはるさめのそら　持地桃枝子

つれ〳〵に文よむしつかいほりには
　それさもわかぬはるさめのふる　齋藤千賀子

しつけさをこゝろさすめるくさの庵に
　ふるはるさめのなつかしきかな　足立ます子

よをさけて人めをしのふやますみの
　こゝろにかなふはるのあめかな　足立まつ子

しつかなるこゝろにすめははる雨の
　おささへしのふこけのしたいほ　柴宮信子

うき世をははなれてすめるわか庵の
　のきはしつかにはるさめのふる　北原季子

なか〳〵に清めるにはのちりもなし
　はるさめそゝくやまのしたいほ　與志岡ひさ子

よのちりをさけし我か家の軒はにも
　み代のめくみのはるさめそふる　吹田たけ子

まつかせのおさにかよひけり窓ちかき
　をさゝにそゝくよるのはるさめ　柳島ゆき子

もゝさりのさひこぬ宿そはるさめの
　のきのたまみつおさそしつけき　竹腰隆子

はる雨のさこころへたてぬしろしには
　くさのいほりもいろめきにけり　竹腰八千代子

静けくもすめるあるしのこゝろさや
　こけにおさせぬにはのはるさめ　賀茂笹子

人さはぬにはのこけちのはるさめは
　ふるもおさせぬものにそありける　村田多豆子

訪ふ人をいさひくすめるやさなれは
　はるのあめさへおさなかるらむ　河合ぬひ子

物いはぬくさ木をさものやさてや
　木のめはるさめおさせさるらむ　服部萬子

はなゆゑにまたるゝはのあめなるを
　なさふるさしもおさせさるらむ　加藤加壽子

けふもまた親しきさもはおさつれす
　のきのたまみつおさはかりして　林環子

静けさをこゝろさすめるいほなれは
　やなぎもれむるけさのはるさめ　松本ゆた子

はるくれさひさもひさこぬみれの庭に
　こゝろしつけくはるさめのふる　加藤壽枝子

うき雲のうきよはなれししばのさに
　しつけさそふるよ半のはるさめ　加藤かつら子

つれ〳〵さなかむる軒のしのぶくさ
　しつかにつさふはるのあめかな　金森俊子

なかき日をいかにくらさむ音もせて
　ふるはるさめのくさのいほりは　高島壽子

たゝひさりなれたる宿のしかすかに
　はるさめふれはいふせかりけり　絹川ます子

のかれすむ身にもまたれぬわか宿の
　はなのひもさくはろさめのそら
長尾香子

さなきたにさはれぬ宿のしづけきに
　さひしさそふろはろさめのおさ
河南たつ子

かくれかの友なきやさにつく／＼さ
　こゝろほそくもはろさめそふろ
高屋はきの子

さふ人もあらぬいほりははろさめの
　おさもひさしほしつけかりけり
前原たつ子

ひさりすむやさの友なろうめのはな
　かをりまさりてはろさめそふろ
日吉あさ子

かくれ家の軒端のやなぎうちけふり
　今日もひめもすはろさめのふろ
金原吉子

花にたにさはれぬやさのつれ／＼を
　なくさめかほにはろさめそふろ
岡部やよ子

咲けばちろ花のうきよをすてし身も
　ちゞにおもひをくだくはろさめ
三苫ふみ子

世をすてゝ庭にうゑてし五つもさの
　やなぎにそゝぐ今朝のはろさめ
井手たけ子

よをすてゝさふ人もなきいほりには
　おささへしのぶはろのあめかな
本田さし子

をり／＼はつはきこほろゝ音のして
　にはしつかなろはろのあめかな
白石梅子

よをいさふ人のすみかのはろさめは
　はなのさかりもしらてふろらん
中島景子

まれにたにさふ人もなきくさのさは
　ふろはろさめもおさなかりけり
田中さみ子

はろさめのゝきはしつかにふろ音に
　さひしさまさろやまかけのいほ
須磨ひて子

しつ／＼さふろはろ雨はかくれすむ
　みにさへさはろおさなかりけり
大音ふみ子

世をしのふくさのいほりの柴の戸に
　今日もおさなふはろのさめかな
垣根うめ子

さふひさもたえて浮世のかくれ家に
　おさつれにけろのきのはろさめ
花野露子

おほかたのうき世をすてし芝のいほに
　はれまもみえすはろさめのふろ
海島伊登子

いさゞしくしつけかりけり春さめの
　けふりこめたろしばのさぼそは
永井花子

心なく花をちらしのはろさめは
　はにふのこやもつれなかりけろ
竹村千呈子

雨しけくかたらふさものなかられは
　まつはろさめのこさやしらへむ
吉田碩子

さもゝなく小雨のいさゝしつけさに
　にはのさくらをゑかきてもみむ
吉田静子

わくらはに問ふ人もなきくさの戸は
　はろのあめさへおろなかりけり
荻野露子

ひさもさのさくらも今はちりはてゝ
　なかめさひしきわかいほりかな
服部かつみ子

ふりぬれはものにまきれぬわび人も
　こゝろほそきはのきのはろさめ
杉野ぬひ子

玉みつのおさよりほかのものもなし
　しつけきやさのはろさめのころ
大西禎子

音もせてわかさくら戸をしめやかに
　はなにさはらぬはろさめそふろ
高橋かれ子

世のちりをさけしいほりさ春さめの
　わかものかほにふりくらしつゝ
田尻保代子

たつれこし人なきやさにふろあめは
　なかきはろひのさもさこそなれ
酒井小樂子

人とはぬさひしきのきにおとつれて
あはれもまさるはるのむらさめ　松島きみ子

しめ〳〵とふるはるさめも聞ゆなり
ほかにおとなきいほりなれとも　齋藤かす子

靜けきをこゝろとすめるやとなれは
こゑしのはせてふるかはるさめ　齋藤よし子

つばき散る音ばかりしてかくれかの
にはしめ〳〵とはるさめそふる　高砂きよ子

をり〳〵はつばき花散るおとのして
こけのまかきにはるさめそふる　高砂靜子

たれこめて友なきやとのつれ〳〵に
さめてはれむるはるさめのそら　高砂菊代子

つれづれと向ひのごてをなかむれは
あはれにかすむはるのあめかな　田中ひろ子

たえまなくはる雨そふるしかずかに
うき世わするゝやまのおくかも　藤澤萩子

しつけさをこゝろにすめる我やとゝ
しるやおとせぬこのめはるさめ　尾立さみ子

けうもまたしつけきまとの春さめの
ほかにはみえしやましたのいほ　村上貞子

はるさめに茶をにるけふりひろかりて
しつけきやとのかすみとそ見る　笹子茂子

にはとりの尾羽うちぬれてかへらすは
くるゝもしらじはるさめのやと　敷島花子

春さめのしつけきまとのつまことに
しらへあはするとりもありけり　笹子歌子

かたりあふ友なきやとのつれ〳〵に
ふるはるさめのことやしらへん　吉田碩子

やまとはとふ人もなくいたつらに
さひしさそへてはるさめのふる　山根久子

さみしさを音なふものはともならて
きのふもけふもはるさめのふる　姫野いね子

靜けさをこゝろとすめるやとながら
ながめわびしきはるさめのそら　畠山香代子

いとも〳〵あはれに音のきこゆるは
ともなきやどののきのたまみづ　小幡光江子

けふも又はれぬながめにつく〳〵と
さひしさまさるよもきふのやど　穴水わか子

とふひとも絶えてきこえぬ夕ぐれに
ひとしほさびしはるのむらさめ　河田八重子

ひとゝはで苔むすにはのゆふぐれに
おともしづけきはるのむらさめ　池澤天與子

しつけさをこゝろとすめる宿ながら
あまりさひしきにはのはるさめ　杉山綠子

花にたにとひ來るひともなきやとに
さひしくそゝくにはのはるさめ　田村多豆子

わびしさを誰にかこたんすべもなし
くさのいほりのはるさめのそら　岸なみ子

三月五日兼題

高等女學校入學の手續を問合する文

天

福島縣白河町　八木沼里子

春立ちぬとは名のみにて、のこんの寒さ、いやましにきびしう候折から、貴姉様には、御かはりもなく、いよ〳〵學びの道に御いそしみ遊され候御事、御目出度存

し上候、私事亦障りなう暮し居り候まゝ、憚ながら、御心安う思召下され度候、扨昨年夏季御歸省の折、種々御校の御物語承り候に、趣旨といひ、教科といひ、誠に望ましき限りと存じ居候ひしか、年月の流れはやく、私も來三月蹟きなくば、高等小學の業も卒るへき筈に候若し然様なりなは、兼て御羨み申居候御校へ、是非とも入學致したく存し候へとも御承知の通りの未熟者にて、到底覺束なき次第なから、萬一如何と存し、兩親にも相尋ね候ところ、もとより兄弟多の身故、させる差支もなしとの事にて、扨て、兄なとは、頻りに勸めくれ候に付、是非此度は入學試驗に應したき覺悟に御座候、然るに受驗の手續等、一切不案内にて、甚だ困り居候間、御試驗前御忙はしき處、恐入り候へとも、何卒一寸御報導下され度御願申上候、なほ未筆なから、御兩親様にも、御すこやかに渡らせられ候まゝ、御安心遊ばされたく妹なとは、毎日參上して御邪魔いたし居り候、いつれ委しき事は御面會の折にゆつり申候、あら〳〵かしこ。

地　伊勢度會郡宇治中之切　河村君子

故郷の空を遠く隔て給ふ御身には、春とは云へさぞや此頃のさむさも殊更はげしく感じ給ふらん、げに父母のあたゝかきめぐみのもとにある妾さへ、いときびしくなん、扨て、妾も、この學年試業に、小學を卒業して後は、かねて望みゐし高等女學校に入學仕りたく、つきては奈良の伯母君よりも、當地の高等女學校に來れと申さるゝなれど、東京府の高等女學校は、御身も御入學あらせらるゝ事にて、まいて地方より、程度もたかく、我が國の首府に候へば、見聞も多く、なにかにつけて音便よからんと思ひ、父母に願ひし處、その許しをも得候まゝ、入學願の書式、入學料、又保證人の件など、それら入學の手續き、御きかせ下されたし、何分非蛙の妾の事に候へば、上京の上とても、よろしく御願ひ申上候、かしこ。

人　備前國和氣郡閑谷　西艶子

其の後は如何渡らせおはしますらん、さなきだに、物事さとくおはしましつる君の、學の庭に、入らせ給ひてよりは、一しほ著くて、去年の試みに、早くも、級の首席を占め給ひぬとか、御友の數に加れる身こそ、いとも〳〵喜ばしく待れ。さて今度、君の芳しき御名、聞き傳へて、思ひ立ちたる一人二人、此の程、妾許おとづれて、某高等女學校に、入學の手續き知らまほしきを、君は、かねて彼の君とは、淺からぬ御交際のよし、いかで、我れ等が爲に、其の委しき事を、尋ね遣らせ給ひてんやと、切に請ひ申さるゝまゝ、いなみ難くて、御試の前、ひとまなくおはしますらん、とは思ひなから、御手煩しまつるになん、あなかしこ。

（以下原稿到着順）

橋本と代子

たえて御不沙汰致居候、ひしがゝいかに、わたらせ給ふらん、いとなつかしうぞんじ候、私事先日漸く、某女學校卒業いたし候に付ては、都なる、某高等女學校へ、入學致度候、さるにても、彼の校のよしあし、手續など、すこしも存じ申さず、兩親へ相談のいとくちも、これなく候まゝ、御勉學の御さまたけとは存じ候へども、御細の事、御知らせ下さるやう、くれ〴〵もねがひ上候、いよ〳〵相談もまとまり、上京のはこびに相成り候はゞ、東京には、之と云ふ親族も、心易き人もこれなく候まゝ、たゞ、御許様をたよりに候故、御世話のほど、今よりねがひおき候、かしこ。

編原菫子

さえかへる此寒さを、いかに過させ玉ふらん、其後は、打絶え侍りて恐多くこそ、此方にも、變りなくれ侍れば、御心安く思し給ひてよ。さて、妾もこたびの試験に、事なう高等小學を卒業いたし侍りにければ、いよ〳〵來月よりは、御地の高等女學校に、入學いたし侍らんと、たのしみ居りはべり、されば、それにつきて、何かの手つゞの程を、あるは、保證人とやらは、其御地の知人にてもよきにや、入學試験は、やはり受け候にや、君には御入校とうけたまはり侍れは、さだめて詳しくしろしめし給ふならんと、かくは、なめげながら一ひらの文さゝげて、たづねまつるになん。かしこ。

淺井喜代子

月日の小車は廻り〳〵て、流るゝ水よりもはやく、そこもとの、東なる都に、物學びにと上られしより、はや三歳を過ごし、雲間になきわたりつる、かりがねも、漸くかへりそめて、いつしか春がすみたなびく時節と相成候、さても久しうなどゝは、世のつれに口ずさむ、事ながら、つひ〳〵筆のつたなきまゝに、事とはで打絶えし、おこたりを、なめしとな怒らせたまひそ風のたよりに承はれば、そこもと様にも恙なうおはしますよし、かて、加へて、このたびの試験に第一のせきをしめられよし、うれしさなすらふべきかたもなく候、國もとにいらせられし頃より、學びの道を好ませられ、才學ともにたちまさりて、文の園生にも香りそめ、御兩親様も末頼しうあらせられ居られしに、ましてや、けふこの頃の御勉強、さこそと察し參らせ候、この後とてもます〳〵御勵みあらんことこそ望ましけれ、賤が身は、春としてあらず、片田舍にうづもれ居るも、いとすこやかに、明けぬ暮れぬと、過し居り侍れば、御心ゆるべ給へかし、さて御前様も御承知の通り、此春にて高等小學も終りを告げぬれば、なほ學びのみちに進みたく思ひなりぬ、世の人はかたゐなかに引きこもり居る少女は、學なくとも事たりなんなど、言はるれど、日に月に歩を進めらるゝ、今の世に、男子はます〳〵事多くなり行きて、我が家にのみ居る身にしもあらねば、なべて一家のせいさいは、女子にこそあらめと思はれ候、せめて此の世に生れたるかひに、完全なる教育を受け、ひじりのふるまひをも學び得て、のち〳〵女子の道も盡したく、かく思ひ浮び出でつるまゝに、御前様の御身の上、いよ〳〵懸しく、如何にかして、學びの道を修得致したく思ふものから、ふた親にもこひすがりて、漸くゆるしを受け候、ついては、こん彌生の末つかた花の都にのぼるべく、誠にかつてがましうは候へども、そのもと様の學びののり、入學の手續など、御知らせ給はゞ、こよなき、うれしさになん、餘は御まのあたりにと、あら〳〵かしこ。

佐野幾代子

わらは事、此度小學校を卒業しつるにより、父母のゆるしをえて、高等女學校へ、ものまなひせまほしう侍れと、其手續、つゆしり侍らす、あなた様には、とく御入學の事なれば、何くれの事、御承知あるへくと心えて、御手數わつらはしさむらふ、何卒知らせ給へかしと、こひまつるになん。あなかしこ。

吉岡歌子

春立つと云ふは名のみにて、まだかき暮しふる雪を、學の窓にめで給ふらん、さるを、引かへ埋火の許にうづもるゝ身こそいといと恥かしけれ、妹とし子、今度愈々高等小學科卒業致し候ものゝ、唯御國の民

さして受くべき一わたりを習ひ得たる迄にて、今一際教へたてゝは、何かに事足らぬ心地し侍り、されば妹もあなた樣御入學の某女學校へ入れくれよさ、せちに申しこひ候に付、隔なき友垣なるを幸ひ、萬事御世話ねがひたらんには、如何ばかり後安からんさ存じ侍れど、入學の手續は如何取計らふべきか、更に存じ侍らず候まゝ、御手數ながら、御知らせたまはりたうなん。

横山柳子

よへよりふりしきる雪、いかにながめさせ給ふらん、ちさきかせ給ひてんや、さてさいつ頃ほのかにきこゐ上けしわか妹、このほさやうやう小學の業卒へたれは、この上よき學校へさおもひはへれさ、わかしれるはいつれも不完全にて、心に叶ひはへらす、日頃御もさ君の通ひたまふ所こそ、其名も高く、我國のうるはしき德育をもさし、外國の文のかすく\かつけ給ひ、師のきみの恵のつゆもいさふかしさきけは、適當ならめさ思ひ侍る、されは、一日もはやくさ心せかるるを、校則又入學の手續きなさ、くはしう御敎へにあつからは、こよなき幸にこそさ、かくはこさしけき御身をもかへりみす、うちつけにねがふになん、あなかしこ。

谷口婦佐子

春もやうく\深くなり侍る折から、いよく\御すこやかにおはしますこそ、こよなう嬉しう侍れ、こゝにも障りなう暮し居り侍れは、御心安う思召したまひてよ、却說妾の妹事、去年の春小學校を卒へ侍りし後、某先生の許に通ひて、學の道をたさり侍りしか、此度俄かに都なる高等女學校に入學したきよしいひ出てゝやまれは、まだ此の道にいたりあさきみにてさは危ゐ侍れど、此の事、父母に聞ゐ上けしに、父上にも母樣にも悦ひたまひて、其意にまかすへしさなんゆるされ侍る、されば、妹はうれしかりて、一日も早く、そなたにのぼらんさいさみ侍れど、其の手續を知られねば、なめしうは侍れど、消息にて伺ひまゐらするになん、いかてつはらに知らせ給ひてよ、あなかしこ。

名取正代子

きのふけふ年立ちかへりぬさ思ふまに、はや二月もなかばすぎて、いよゝ定期の試驗も近うなり侍り、つれく\御いそしみの其君にも、一きは御學びのつさめに、御暇もあらせらるまじさおしはかりまつりてなん。それにつきては、妾が妹事、こたびは小學のわざも卒へ侍るべければ、ぜひく\其御校へ入學いたさせたく思ひ給ふるものから、其手續なども知り侍られば、いかゞはせんさ思ひわづらひ侍り。さても、君はさいつ年より其校におはして、何くれの事、ようわきまへ給ふらんを、いかで洩し給ひてよ、もさも、いまだ來ん月までの事にて、いそぎにも侍られど、さりさてためらふひまに募りの人數もみち侍らんには、いかゞさ思ひ侍りて、うちつけになめげをもかへりみず、うかゞひまゐらすになん、いかで御いそがはしき折柄、かしこかれど、一言のみいらへ事待ち奉るになん、かしこ。

香川つゆ子

進

文して申上まゐらせ候、私事此度高等小學全科やうく\卒業致し、て當市高等女學校の方へ入學致したく存じ候處、さかくの手續心得候はず、こゝかしこきゝたづね候へども、たしかに相わからずこまり入り候、承り候へば、御妹子樣にも、此度御入校遊ばされ候よし、ついては、そこらの手續御承知に候はんさ存じ、失禮をもかへりみず、突然御うかゞひ申上候、御心得候はば、何卒御知らせ下されたく候、御多忙さは存じながら、先は右御問合せ申上候、あらく\かしこ。

田村はるゐ子

春さしいへど、いまだ門田の雪も消ゐやらで、寒さ身にしみ候を、まして都の内の御寒さ、如何に過させ玉ふらむ。常々たけくおはしませど、かゝる寒ぞらに、限りある身の限りなき度こゐてはげみ玉ひ、御身そこなひ玉はぬやう、祈り上候、さても、私事、御許樣の御在校中、共に進みて文の林をたどらんさちかひしも、此の校卒業の後ならではさ、父母のさとしに止まり候へ共、遊學の念やみがたくて此の度いよいよ父母の許を得侍りぬ。つきては御校入學の手續承りたく萬につけて、御許樣をのみわづらはし、御用多の身の、さぞかし御惑迷の事さ

存じながら、親しきにくつろぎてれぎまつろになん、むらひのつみは、さろ方にゆろし玉ひてよ、

なほあらためて申上ぐろ迄もなき事に侍れど、大事は小事より至ろならひなれば、たけき御身とはいへ、日毎の御養生專一に御座候、かしこ。

新井不苦子

大御代のひらけ行くとゝもに、女學のわざも日に月に進み行くこそうれしけれ、さても、御地にては、過ぎし年より、志ある師の君たちうちつどはれ、高等女學校を設立いたし、いづれもこころに教へ給へるよし、かれ〳〵承り居り候、ふつゝかなる妹事、ことし何月、高等小學校を卒業いたし、猶少しく高等の學を修めさせたく存じ居候まゝ、御地の高等女學校へ入學いたさせたく、思ひ侍れど、入學の手續しりがたくて、ちゝに心をくだき居候處、昨日老母參上のせつ、君には校長の君と御懇意に遊ばすやう御はなしなされ候よし、うけたまはり、たよりを得し心ちして、このようれしう存じまゐらせ候、御多忙の折から、誠に恐入り侍れど、師の君に御問ひ合せ、右手續御知らせ下されたく、くれ〴〵もねぎ奉るになん、あなかしこ。

佐々有鄰子

かねておとづれをもなさずして、うちつけのことぎこえまゐらするは、いとなめげなれど、風の音の遠ぢにうけたまはれば、錦地の女學校は、高等科を授けて、裁縫をも、いづれもごろに教へらるゝよし、妾がごとき山がけに教育せられし身を以て、入校せんと欲するものから、いかなる手續を經ばよろしくはべらんか、中垣のへだてなくしめしたまはらば、幸甚のいたりに候、あなかしこ。

上杉光子

庭前の梅の花、二ひら三ひら、今を春べと咲きいで申候、さるからに、君には御かはりなく平かに物したまふよし、めでたく存じ上げ候、さて、妾事も、こたびいよ〳〵この地小學校の業を卒へ候ふまゝ、學の林日ましに茂り行く御世の春にそむきて、天さかる鄙にこの儘こもり果て候はんも口惜しく存じ、君がもの學びしまふ御地の高等女學校へ、入學仕る事に心を定めまをし候、ついては右入學の手續、委細御しらせ下されたく、願ひまつるになむ。

塙いさむ子

春はまだ淺澤水の、再び氷を結び初め、折々は雪も降り來て、げに餘寒の去り難きには困り入り申し候ふ折柄、御許樣には、益御機嫌よう入らせられ御目出たく存上候、私事も、替りなう通學致居候まゝ、御心安う思召し下されたく候、さても御承知の通り、私事來三月には、高等小學の學科を卒業致候樣相成り申候處、右滯りなく相濟申候はゞ、高等女學校へ入學爲致吳候旨、父上申居候まゝ、私日頃志望の事とて、日夜それのみ樂みにしつゝ勉學罷在候、されど、其入學の手續は、未だよう心得居申さず、いと心にはなく打案じられ申候間、御許樣にはかねて御通學遊ばされ居り候へば、さるかたは御承知の御事と御推察申上候まゝ、何卒〳〵右の手續等、通知下さるまじきか、最早日數も差迫り候處、御示教を仰ぎ候上にて、いろ〳〵用意なども仕りたく存候間、右呉々も御をしへのほど、偏に希上候、かしこ。

佐藤喜代子

怠らず行かば千里のはても見む、牛の歩みのほど〳〵と、學びのやに勤しみつゝ、稍くにもことし小學のわざを終へはべるめれば、此四月より某高等女學校に入學なさまほしう思ひ侍れど、元よりおろかなる身には、さる事の手續などは、少しも心得侍らで、いと〳〵心細く、如何にせましと打案じられ侍り、さるを御許君には、御通學にてましませば、かゝる事は、御心得にておはします御事よと、おしあてまつりぬれば誠に〳〵み筆を煩はし、おもぶせの業には侍れど、いかで右のすべをへし給へとくれ〳〵もねぎまつるになむ、あなかしこ。

服部桑子

御上京後は、御遠々しくのみ打過ぎ候處、定めし御勉學にお暇なき事と存し候、さて、妹事、今度高等小學校卒業いたし候につきては、ぜひに御地の女學校へ入學致したき由申いで候へども、西京の摸樣も存せず、なほさら入學手續も相わからず、幸ひあなた樣は、なか〳〵某校へ御入學

に相成りたり候事故、其邊の事御承知ならんと存し候、寄宿通學いつれにかよろしきか、入學試驗、及ひ手續、また學資はいか程入用にや、御面倒なから、なるへく委しくおしらせ下されたく、其上にて相談とりきめ候心くみに候、追ていよ〱上京いたす樣ならば、年はもゆかず、旅なれぬ身に、外に親類と申すもなく、心やすき方もなく、あなた樣のみおたよりとも存し候間、何卒御厄介なから、萬事お世話の程、今よりねかひ上まゐらせ候かしこ。

花野てふ子

殘りの寒さきえやらず、吹く風も肌寒く覺え候折柄、あなた樣にも御替りもなう御勉強の事と存候、次に私方皆々替りし事なう過し居候まゝ、よそながら御心安うおぼし給はりたく候、扨あなた樣よりは、雨につけ風につけ、折々御たより給はり、其御地の模樣、手に取るやうに覺え、開け行く御世に、都も鄙もへだてあるべうは候はねど、片田舍のならひとて萬はおくれ勝ちにて、取りわけ女子教育などかへり見る人も少なく、御許樣には、年月みがき給ふいさをのあらはれて、程なう業を終へ給ひ、故郷へ歸り來まして、後進の女子たちを教へ導き給ひ、なほ女子教育の基礎をかためんも御許樣と、一人悅び待ちわび侍るになん、私も、こん四月に首尾よく高等小學卒業致し候はゞ、なほ聊か、文の林にわけ入りたしと、兩親に願ひ候處、ゆるしを得候まゝ、何れの學校よろしく候か、兩親共不案内にて、とり定め難く、あなた樣には、もはや御地の御樣子もくはしく御存じおはすらん、定めて學校も數ある中には、よきもあしきもあるべく、入學の手續もいかにか、御多忙の御身、さぞかし御迷惑の事と存じ候へ共、しるべなき身の、御心安きにあまえ願上候、いよ〱相談取りきまり、上京致す樣相成候ひても、是と申す親戚も、心安き人も之なく、たゞあなた樣をたよりに思ひ居り候まゝ、旅なれぬ身の一しほ御厄介に相成り申すべく、今より願上げ候、あなかしこ。

賀屋壽子

着更衣も夢の間に打過ぎて、彌生の空のどけく、谷の戸出づる鶯の初音うらめづらしき折柄、いかに暮し給ふらん妾事も何の障りもなう過し侍れば御心安う思召し、さて、妹やす事、此度國の女學校卒業いたし候處、猶あかぬ節々いと多く、いかにもして一度都の空に修學いたしたき由、せちに申出でやむべくもあらねば、かねて評判よき御地某高等女學校へ入學いたさせたく、附ては、手續の儀不案内にて、いたう困り居候、御許には、この節、よし子樣事その校に御修學中の由聞き及び候へば、御迷惑ながらこま〱御しらせ下されたく、まづは御願ひまであら〱かしこ。

北原季子

昨日けふ、とみに、春めき、わたりて、そよふく風のいとすが〱しう覺えはべるを、みな樣御うるはしう、御くらし遊ばし候にか、伺ひまつるになん、扨わらはが妹事、去る十日の卒業式、首尾よくやう〱小學高等科の業を卒へ、はべりぬ、就ては、兼て望みゐはべりし某高等女學校は、規則もいときびしく、且教育に熱心なる姉の君たち御そろひの由きゝゐ、はべれど、ひたふるに、其手續を存じ申さず、承れば、御孃樣には、其校に御通ひ遊ばし候由、實になめげには候へども、如何にして、よろしく候か、其手續委しく御もらし下されたく候、まことに、御勉學中恐入り候、若し御きゝとゞけたまはらば、こよなき幸にこそ、かしこ。

橋本きく子

其後は御不音にのみ打過ぎ申候段、御免しも有之候はゞこよなう事に存じ參らせ候、伺ひ申候に、御前樣には益々勵勉の由、なによりの御事に存じ參らせ候、妾ことも御きこしめしも候如く、當國許にて、勉勵申居候ところ、此春は出京申候て、雪竹高等女學校に入學申し候處、就ては御姉樣には、先つ年其の高等女學校に御在學有之しことを、洩れて存じ侍れば、誠に御手數には存じ候へ共、其入學の手續しらせ下されたく候はゞ、幸の極みに存じ奉るべく候、かしこ。

筆末ながら御家中樣に宜しく御傳へ願上參らせ候。

降田槇子

昨日今日、俄かに春めき渡り、花のたより聞かんも、今しばしとは、

成り侍れど、兼て學の道に、いそしみ給ふ君の、試驗も近づきたれば、一向御はげみの、御事と察し奉り、たつのあぎとの玉を、得給はん日亦近きにも、あらんと、嬉しうこそ、さて妹事、知らせ給ふやう、不つゞかながら、こたびの試驗にて、首尾よう參らんには、高等小學三學年の課程を卒へ、今一年にて、全科卒業の、筈に侍れど、今年より、高等女學校へ、かはらせ候ふ方後の爲よろしからんと思ひ、御校へ、入校致させまほしう誠に御手數ながら、入學の手續鳥渡御知らせ下されたく御忙しき折かゝる事聞ゆあぐるは、いとく心苦しう、嘸御迷惑とは、推し侍れど、外に尋合すべき方も侍らねば、かくも御身をわづらはすを、ゆるし給ひね、あなかしこ。

高砂きよ子

思ひまはせば、御元樣、去年の春、都に出でさせ給ひしより、私事、魚の水にはなれしごとく、誰とて、深くまじはる人もなく、唯たれこめてのみ居侍り、今更御身のうつくしみ、思ひ出で言の葉につくし難く、獨戀ひしたひ居り侍り、さるに私事、父母の、み惠にて、こゝに二八の春をむかへつるにより、父母の我に心を置かせ給ひ、丁度今年、御身御勤學の何高等女學校入學、定年滿期と成りたれば、つたなき我をもかへり見ず、入學試驗受けさせまほしう申侍り、定期試驗の前にて御せはしき其中へ、申すもはゞかりなれど、入學手續、御元樣には御承知と聞くまゝに、目ざしての御れき事、何卒聞こし召され候ひて御知らせ下されたくかへすぐくもねぎまゐらせ候、あなかしこ。

田中ひろ子

都にのぼらせ給ひし後は、たえてみけしき伺ひまつらず、いかに甲斐なしとやおもほすらん、試驗も程なければ、さこそ御いそしみに御いとまなき事と、おさつし申すになん、本校は先頃よりの試驗も、昨日やうやう卒業證書の授與式すみ、妾も幸ひに卒業致したれば、此上は、兼ても聞ゆ上げ置きし通り、御許に侍りて、彼の何々高等女學校に入學せまほしう思ひになん、さるにても、しろし召す樣に、こたび初めての事故、入學の手續など更に存じ侍らねば、御手數の程、誠に恐入り候へども、次に記す事々御示し給はりたく、其上にて相談とりきめたくなん、いよく上京の期日も定まり候はゞ、近きにさぶらひて、猶よろづ伺ひ置きまつるべくなん、

一數ある女學校の中、何れか尤も宜しきか
一寄宿と通學とは、何れが宜しく候か
一學資金は大凡一ヶ月に何程くらゐ入用にて候か

田村堯子

春曙

梅か枝に宿れる月の影消えて
花よりしらむ春の曙

海上春望

のどかなる海原遠く見渡せば
霞にうかふ蜑人の釣舟

梅花始開

春まだき文よむ窓の春風に
匂ふもゆかし梅のはつ花

花嫁

河村君子

おもはもくせど綿帽子
やさしき嫁のこゝろには
こよひのうたげ恥しく
うれしき二途にまよふらん

蝸牛

所なく身をも家をもうつしつゝ
ふる里しらぬ虫やこのむし

遊女

おのが身を波にまかするうかれ女は
まことにぬらす袖や誰か袖

外國人

萩原のめぐみの風に外國の
青人草もうちなびくなり

神職高等試驗書記 吉岡德明先生題字
國學院講師 逸見仲三郎先生序
神宮皇學館教授 井上賴文先生校註

校註古事記讀本

全壹冊 定價金卅五錢 郵稅金八錢

世に古事記の註釋多しと雖も高尚にして初學に便なるもの少きが如し。こゝに弊堂神宮皇學館教授井上賴文先生に乞ひて最も平易に最も明快なる標註讀本を出版せり。先生が寸鐵の筆鋒を以て或は俚言に或は俗言に縱横譯述して通せざる所なし。もし一たび此の書を手にせん神皇の國を建て民を導きたまへる迹も炳焉として掌を覆すが如く凝滯通せざる古言古語も忽ち氷の融るが如くなるべし。乞ふ一本を繙きて其の如何に明快なるかを知りたまへ。

發行書肆 東京京橋區南紺屋町十八番地 小川尚榮堂

○女生徒募集○

今般教程ヲ改正セリ入學志望者ハ三月中ニ申込ムベシ履歷ニ依リ無試驗相當級ニ編入ス

麹町區虎ノ門內 東京女學館

私母杉谷多加子儀本年八十八の龜齡に達し候に付賀壽の爲四方大家の玉詠玉吟蒐集致度豫て本人も希望致居候儀に付何卒御吟詠御惠送被成下度伏て奉願候敬白

詩題 賀八十八 用紙隨意

和歌兼題 寄榊祝 用紙短冊

期日 本年三月廿日迄

右御屆所

熊本縣鹿本郡山鹿町
男 杉谷齊
孫 杉谷正隆
仝 杉谷正

仝縣熊本市迎町御舟口
孫 井上正雄
仝 藤岡文記

今回都合に依り柞園女塾幹事を辭す 石井泰次郎

華族女學校學監下田歌子君著

家庭文庫

全拾貳冊和裝（隔月一冊發行）正價 ●壹冊金參拾五錢●參冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●郵稅壹冊八錢

第八編

女子手藝要訣

蠶桑、裁縫、刺繍、押繪、編物等、凡そ我邦の女子に缺くべからざる手藝は、一々之れを圖解して詳密なる說明を施し、之を讀めば師に就かずして、各種の工藝自ら悟了するを得べし。眞に深切丁寧の良書、請ふ一本を購ふて坐右に備へ玉へ。

全壹冊和裝菊判大
和綴密書數十入
正價卅五錢
郵稅八錢

家庭文庫總目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

第七拾號は**明治三十二年二月十五日發行**せり

●定價一冊八錢●六冊前金四拾五錢●十二冊前金八拾六錢●全國無遞送料

LA CROIX ROUGE DU NIPPON

日本赤十字

毎月十五日發行

本誌は單に日本赤十字社の機關たるのみならず日本に於ける赤十字社業の機關たらんことを目的とす故に其讀者は廣く之を滿天下に求めざるべからざるを以て本誌の記事は赤十字本社及各支部の現況を錄して以て彼此の聯絡交通を媒介するに止まらず苟も赤十字の性質事業の正鵠準備計畫の効果を得んが爲には軍衙衛生部及日本赤十字社の措置を評論して曲筆することなく又參考資料としては外國各社の記事更に誘引の捷徑として雅樂の記事に及ぼし號を追て益改善を圖らんとす博愛慈善に志ある人請ふ本誌を讀め！

日本赤十字發行所

東京京橋區築地二丁目廿一番地

本號掲載の**要目**は錄事、吊辭、赤十字、論壇、彙報、文苑、講義、雜錄、寄書、家庭、記事、時事、**等是皆有益**の**文字**

再版　生田目經德編　再版

製本　大和綴　頗優美

定價　金二十五錢
郵稅　金四錢

標註

雅文消息集

日用消息文の摸範は之を中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし

との篇專ら心を用ひて古人の消息文中より高向にして雅致なるものを採り

春の部　廿七編
夏の部　十六編
秋の部　十九編
冬の部　十一編
雜の部　二十四編

の各部に別ち註釋最も懇切に參考者の便よからんことをはかれり……又

北畠親房の　吉野御事書案
源頼朝の　三河守範賴に答ふる書
島津忠の　垣人におくる書
德川家康の　二代將軍の方への教誨文
俊寛僧都女の　父の鬼界島にあるにおくる文、
大高源吾の　母におくる書
小野菊女の　夫來女正に遣す文

の三十七頁の附錄を添へたり

斯道に志しあるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること大なり

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

大日本體育會々長陸軍大將野津伯爵題字
全副會長貴族院議員丸山作樂君序文
陸軍憲兵大尉隈元實道先生著

三版

體育演武必携

全壹冊

定價貳拾錢郵稅貳錢郵劵代用一割增

編中には左圖の如く一々圖解を附け又至極讀み易き文字を以て說き明したれば學校生徒其外誰にても之を讀まむ劍術と柔術の奥意を詳く飲み込むこと容易なり



本書は劍術柔術の基本に加ふるに兵式號令を以てし先生が日常門生に訓練せらるゝ所のものを懇切に說明せられたるものなり故に本書を熟讀する時は道塲十年の苦行は僅々數旬にして卒り速に豁達自在の域に至ることを得べし

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　靜思館

男爵高崎正風先生序　本居豊穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

本書發行の由來

富士谷御杖の翁斯の道の學に至り深かりしは今更にいはずそのものせられし著書はかれこれあるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり巻となりて、世に廣こりしも、この中に土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の粟田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せずなりにき、世の學者見まほしふすれども、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるべき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り巻にものして廣く世に流布せしめてんとす抑々此燈は世にありふれたる註釋書の類とはことかはりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されし貫之朝臣のこの日記を書かれしはかゝる由ありて、あらはには女のものせしさまになしく憤るうちに、ふくめたる深き心の言葉のうちにこもりといふを、本として引き出して言詞は更なり文意をもいと委しく解なしかれはいと廣く考證でられたり

菊版　大和綴製本　頗美麗

全　自一巻至八巻　壹千五十頁　合三册

正價金一圓五十錢　遞送料　小包四種郵便三十錢　十里迄七錢　百里迄十二錢　百里以外廿四錢

發行所　東京京橋區築地二丁目　國光社

賣捌所　各府縣書肆

最寄書肆に無之時は直接本社へ御注文被下度候

謹告

本書發行の儀屢に豫告せしより續々御注文に候處聊か差支これあり製本に意外の日子相費し申候今回完く整頓相告げ茲に發賣致候大方の君子陸續御注文あらんことを

社告

○代價は通貨及郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納稅の郵書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年三月六日印刷
同　年三月七日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木頁雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

（明治二十四年八月四日／内務省許可）
（明治二十五年三月十二日／遞信省認可）

孝明天皇御遺德

先帝御製歌挿入　全壹册　●實價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに先帝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして尚湮晦に屬し未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の談に依り以て汎く

事蹟聖德　實歷逸事遺聞

を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示せば左の如し

御一代の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て　先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明らかにし

豁達は言路洞開の聖德を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配當する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖德を頌し奉る**

國民たるもの〻必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

（印刷所東京國光社印刷部）